

# 經濟學原理

法學士 志田勝民 講述

東京專門學校出版部藏版

完

35.9.5

8

緒論

第一章 經濟學

第一節 經濟學の觀念

第二章 經濟學の系規

第三章 經濟學の研究方法

第四章 經濟學の基本的事項

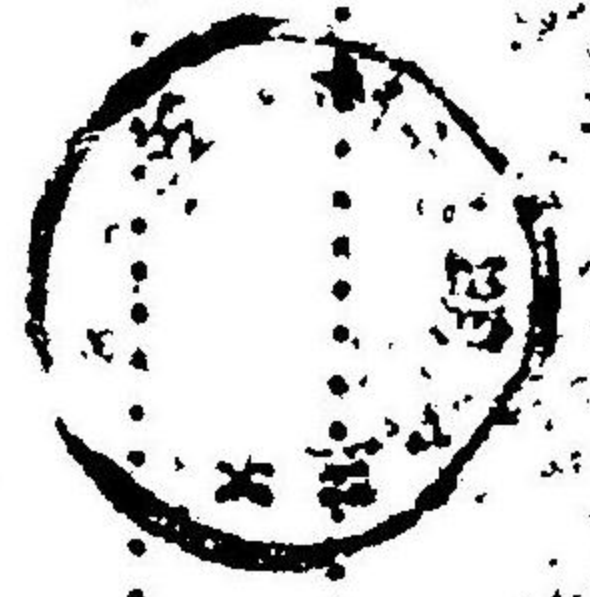
第一節 經濟の觀念

第二節 慾望

第三節 貨物

第四節 價值及費用

第五節 生産及消費



第一編 國民經濟發達の條件 ..... 二五

第一章 自然的條件 ..... 二九

第一節 外界の自然 ..... 二九

第二節 人口及其自然的分界 ..... 三一

第二章 國家及社會 ..... 三三

第一節 社會 ..... 三三

第一款 緒論 ..... 三三

第二款 社會と國民經濟との關係 ..... 三四

第三款 分業を論ず ..... 三四

第二節 國家 ..... 三九

第一款 法律 ..... 三九

第三章 人的條件 ..... 四三

第一節 生產論 ..... 四七

第一章 生産取得及生産要素 ..... 四七

第一節 生産 ..... 四七

第二節 生産の要素 ..... 四八

第一款 土地 ..... 五〇

第二款 資本 ..... 五五

第三款 労働 ..... 六五

第二章 生産の組織 ..... 七六

第一節 企業の形式 ..... 七六

第一款 企業の意義及性質 ..... 七六

第二款 會社を論ず ..... 八七

第三款 組合を論ず ..... 九五

第四款 公共事業を論ず ..... 一〇二

第二節 經濟の技術上より見たる企業の形式 ..... 一〇五

第一款 大專業及小專業 ..... 一〇五

第二款 企業者の結合を論ず……………一五

第三章 生産を支配する原則……………一七

第一節 自由競争を論ず……………一七

第二節 自由競争の經濟上及社會上の結果……………一九

第一 經濟上の結果……………一九

第二 社會上の結果……………二一

第三編 交易論……………二四

第一章 總論……………二四

第二章 價值論……………三三

第一節 緒論……………三三

第二節 價值評定の條件……………三五

第三節 限界的價值の觀念……………三九

第四節 客觀的價值、主觀的價值及交換價值、使用價值を論ず……………四二

第三章 代價……………四四

第一節 緒論……………四四

第二節 獨占代價……………四六

第三節 競争代價……………五一

第四節 生産費と代價との關係を論ず……………五四

第五節 相關的代價……………五六

第四章 貨幣論……………五七

第一節 貨幣の起源及歴史……………五七

第二節 貨幣の定義及職分……………五九

第三節 貨幣の材質……………六一

第四節 貨幣制度……………六三

第五節 各種の貨幣制度の特質……………六六

第六節 貨幣の流通に関する原則……………七〇

第一 法律の勢力……………七〇

第二 慣習の勢力……………七〇

第三 グレンシャム氏の法則……………一七一

第七節 貨幣と物價との關係を論ず……………一七五

第八節 本位論争……………一七八

第五章 信用論……………一八二

第一節 信用の觀念……………一八二

第二節 信用の種類……………一八三

第三節 信用の發達……………一八四

第四節 信用の經濟上に及ぼす效果……………一八六

第五節 信用機關……………一八九

第六節 信用の形式……………一九一

第一 簿記法……………一九二

第二 爲替手形……………一九四

第三 約束手形……………一九六

第七節 紙幣……………一九九

第一款 紙幣の意義及種類……………一九九

第二款 紙幣發行法……………二〇〇

第六章 不換紙幣を論ず……………二〇三

第四編 分配論……………二〇八

第一章 所得……………二〇八

第一節 總論……………二〇八

第二節 所得の種類……………二一〇

第三節 所得と物價……………二一三

第二章 企業者の所得……………二一五

第一節 企業所得の成立……………二一五

第二節 企業所得の高低及其平準の傾向……………二一八

第三章 地代論……………二二三

第一節 地代の觀念……………二二三

第二節 地代の成立……………二三四

第四章 利子……………二三〇

  第一節 利子の觀念……………二三一

  第二節 利子の高低……………二三三

第五章 労働の報酬を論ず……………二三七

  第一節 緒論……………二三七

  第二節 勞銀支拂の形式を論ず……………二四一

    第一款 生産物支拂法……………二四二

    第二款 貨幣支拂法……………二四六

  第三節 勞銀支拂の方法……………二四九

  第四節 勞銀の高低の原因を論ず……………二五三

  第五節 勞銀基金説……………二五九

  第六節 各種の職業に付勞銀の差ある理由……………二六一

  第七節 同盟罷工を論ず……………二六三

第六章 保險を論ず……………二六五

  第一節 保險の觀念……………二六五

  第二節 保險の經濟的作用……………二六七

第七章 消費を論ず……………二七〇

  第一節 消費の觀念及種類……………二七〇

  第二節 生産と消費との關係……………二七四

  第三節 奢侈を論ず……………二七七

經濟學原理目次終



法學士 志田勝民 講述

その正當經濟學派あり、獨逸派あり。而て余は其最も頭  
角全備なる所、經濟學派の學說を基とし、廣義の經濟學中最も嗜味あると同時に  
其最も煩雜なる經濟學原理を講究せんとす。就中重きを其根本的觀念に措き  
英派と其研究方法に於て稍異なる所あるを示さんとす、只憶む紙數に限ると余  
が研究の未だ盡さざる所あるを。

緒論

學問の目的は自然及社會上の複雑なる現象を研究して其間に存する原因結果の  
關係を明にし、人類生活に據るべきの資料を供するにあり。自然の現象は個々分  
立するもの少からざると同時に之を分立せしめて研究するとも亦容易なるか故  
に其學や早く既に完備の域に達せり。獨り社會的の現象に至りては人類意識の

發動如何によりて變幻出沒極りなく原因は他の原因と合し、結果は又他の結果と共に生じ、錯綜して其因て來る處を知るに苦む。加ふるに人類の意思始めは隠れて現はれさりしもの偶、結果に於て外部に表はるゝとあるを以て一定の理法を發見すると難し。假りに之を發見し得たりと信ぜらるゝ場合に於ても之を諸の場合に適用して果して誤なきやを精査する能はず。

此故に學者は先づ簡單なる場合を想像し他の現象より分離して考察し各原因に對する各結果を示さんと欲し思を原人の境に奔らし想を天地開闢の間に致す、蓋し故なきに非ず。然れども其弊や研究の範圍を脱し或は假りに一定の法則を發見し得んとするも遂に實際と相容れざるに至る迂論とは是之を云ふなり。

經濟學は廣義に之を去へば經濟的活動に關する學問なり。其經濟的活動たるや人生行爲の大部分を占むるものにして其範圍や時と處とに擴がり從て諸種の現象紛亂せり、是現今社會の狀態なり。經濟學は現今及將來の爲にする學問なり、過去の研究の如きは只此目的を達する手段たるに過ぎず。然り現今及將來に資するの學問なり。故に一の經濟的活動を研究するに於ても現在及將來に如何の結果

を呈するや如何に其結果を改革すべきやの問題を論ずるなり。

人は社會的動物なりとは人口に増殖するの格言なり。古代より人類社會發達の工合は歴史も未だ充分なる證據を擧げ得ざる所なりと雖も吾人の得たる經驗と推論の結果は人の自然的必要より、又は社會的必要より合して一團となるに至ると是なり。例へば寒暑を防ぎ他の鳥獸の危害を禦く如き團體の力に非んば何んそ能く生存を全ふするを得んや。昔に團結か防禦に利あるのみならず其之に勞すべき勞力と時間とを以て人類有用の有形的無形的貨物を生産するを得るなり。分業の利益も之より生じ、合業の効果も之によりて全し社會の進む所以、偶然に非ず。且や團體は必ずしも同時に生存するものゝみ互に利益を蒙むるものに非ず、子々孫々に傳て相互の利益を進捗するものなり。

前代に於て生産貯蓄されたるものは之を後代に譲り、後代は又之を其次に譲る。是實に生計に必要な物に於て行はるゝのみに非ず、是等の物の生産を補助するものに於ても然り、例へば食物、器具、機械が後世を利用するに足るのみならず前人の經驗觀念言語及文章皆然り。千年又は万年一定の準繩として據られたるものは



後人の共有財産と均く之によりて其利益を享受し更に竿頭一步を進むることを得るなり。故に此間に處する人間の活動は如何なる程度まで其個人の献替に出るものとして社會は其分配をなすべきや如何なる發達の結果斯くの如く社會が構成されたるや。而して此構成は變更し得べきか變更し得べしとせば如何なる程度に於て之を爲すべきか。吁是經濟學に於て最も研究すべき處而も最も難信難解の點なり。

故に曰く經濟學の研究する問題は複雑なるか故に其原因結果一定の理法を説明するに當て此綜錯紛亂せる現象の中に於ける各種の經濟的活動及其關係を研むべく其立脚の點は實に此社會若くは團體に存するとを忘るべからず。

## 第一章 經濟學

### 第一節 經濟學の觀念

學問に確固たる定義を下すとは古來學者の難んずる所にして所謂最初の原理は最後の原則(The first principle is the last principle)なるが故に充分に説明を終たる後に非れば定義を先にするも殆ど益なきなり。只余は經濟學に於て研究すべき範圍を

定む自ら經濟學の何たるを了知せしむるに止めんとす。

經濟學は吾人が日夜營々として活動する状態及之が社會團體に及ぼす影響を明にし其間に存する法則を究め以て吾人の知識を廣うするのみならず尙實際に處して誤なきの道を知るにあり。只に之のみに非ず吾人の經濟的生活は將來に於て如何の發達をなすや將來如何に發達せしむべきものなるやを究め或は過去に遡り又現在に鑑み將來の問題としては所謂社會主義なるものゝ運命と其適用の程度とを考察せざるべからず。

經濟學は概近長足の進歩をなしたりと雖も其の範圍他の學科との關係に至ては精確に其境域を定め難く學說未だ歸一したりと云ふを得ず。

經濟學は廣義の社會學の一部たり。抑も社會は實に有形上の發達をなすのみならず精神界に於ても無限の進歩をなすものなり。社會は人類の機械的集合に非ず有機的の集合なり社會は大となく小となく共同生活をなせる人類の集合なり其共同生活より生ずる諸現象間の關係發達の状態は實に廣義の社會學に於て研究すべきものなり。經濟學は所謂共同生活より生ずる現象中其一部に關する學

問なり、即ち人類の經濟的活動に關する學問にして狹義の社會學、法學等と對峙するものなり。

經濟的活動とは貨物の生産分配及消費に關する人類の行動なり。

抑も經濟的活動は意識の發動にして本源たる意識に遡りて考へざれば經濟的活動の全般を窺ふ能はざるや明けし、是心理學の經濟學と密接なる關係を有する所以なり。

經濟學は一の學問なり、技術に非ず、技術は學問の應用なり、技術は學問の結果なり。然れども是純理に過ぎずして術加學によりて進むと勿論なりと雖も學が術によりて助けらるゝと誠に多し。經濟學も技術を熟知するに非ずんば其蘊奥を究むるに苦しむ所あり。

之を要するに、經濟學は諸學科及技術と密接の關係を有するか故に學者往々心理學の境を侵し或は他の學術の範圍を犯さゝらんか爲に却て真正に經濟學に於て論すべき範圍を措て問はさることなるとせす。故に余は其範圍を限て曰はんとす「經濟學は經濟的活動をなすものゝ相互の關係及其交通より起る利害の一般的

影響を論ずるものなり」と。

## 第二章 經濟學の系規

所謂英派の經濟學に於ては特に經濟學の分科なるものなく、アダム・スミス氏の如きは現今財政學に於て研究する部分をも併せ論したりと雖も其後を繼ぐものは然らず殆ど之を措て顧みず、獨逸派の起るに及んで、經濟政策學、財政學等分科して進歩するに至れり。余は前に述べたる如く經濟學を廣義に解し之を分て純正經濟學若くは經濟學原理及應用經濟學の二とす。

第一純正經濟學 は人類の交通より生ずる利害にして各般の經濟に共通なる原則を研究するものなり。

それ吾人は生存を維持する爲に資本及勞力を自然力に適用し吾人の慾望を満足するに足るべきものを生産せざるべからず。其方法に至ては或は數人の結合により或は一個人の力による。而して此生産物は各人の間に分配せられ相扶接して自己の生存を全くするとを得るなり。是等の職分を満足する爲に或は貨幣なる交換の具用ひられ又信用の制度生ず、貨幣は又價値を顯はし私人の收入は之に

よりて決定せられ其收入の一部は消費せられ一部は資本として生産の用に供せらるゝとを得るなり。是を以て純正經濟學は自から左の三部に分る。

(一) 生産論 本論に於ては生産の條件たる自然、勞働、資本、社會的國家的條件其他企業の形式等を論ず。

(二) 交易論 交易は論理上より云へば生産の一方法なり。故に生産論に於て論ずるを正當とすれとも其論ずべきの範圍廣く且學者多くは之を以て特別の一種とするが故に暫く之に倣ふ、本論の範圍は貨幣信用及交易是なり。

(三) 分配論 個人は生産に寄與す、其報酬として分配を受くべきは當然なり、古代の學者は生産論に重きを措きしと雖も分配の問題は刻下最重の問題なり。故に余は此題下に於て地代、利子、賃銀等を論じ若し紙數の許すならば社會問題に論及せんと欲す。

第二、應用經濟學 是經濟の分派と之に關する各種の設備を研究するものにして例へば國家及公共團體の經濟的行政、財政、商工業、銀行、農政、林業、鑛業、恤救、保險、統計に關する政策を研究するものなり。吾て學者は經濟學を分て純正經濟學、財政學

經濟政策學の三とし財政學は公共の目的を達する爲に必要なる行爲を論ずるものとし經濟政策に於ては經濟及人類交通に關して國家の取るべき政策を究むるものとせり。

往昔獨逸に於ては内務學派(Kameralwissenschaften)ありて今日の經濟學と大に類似するものあり、只今日の異なる所あるは其が深く經濟の技術を研鑽して學理よりも寧ろ實際に重を措きたる點にあり。

### 第三章 經濟學の研究方法

學問の數は多からざるを得ず、而も之を研究する方法は少くして可なり。抑も人の能力は限りあり考察すべき事物は無限なり、是れ分科行はるゝの已を得ざるに至る所以なり。之を研究する方法に至ては畢竟論理に従ふべく統計的、歴史的なるべく又數學的なるべし。是等の諸法は凡ての學術に適用して行はれざるなく、只其難易の差あるのみ。

#### (一) 歸納的及演繹的研究方法

歸納的研究方法とは個々の場合より綜合して一定の法則を發見するものなり。

一の時一の場所に生ずるとは他の凡べての時又は場所に於ても正しきかを觀察し其間に一定の理法を見出すものなり。

演繹的研究方法とは既定の原則より推論して特別の場合に論及するものなり。故に演繹法は歸納法を前提とすると云ふなるべし如何となれば吾人が考へて一定の原則とするものは多くは吾人の觀察及前人の經驗によりて知ると多ければなり。以上の方法も勿論多少の缺點なきに非ず。演繹法に於ては一定の法則と傳せられたるもの必ずしも然らず爲に其推論の結果に誤謬の生ずるとあるや必せり此弊害は既に經濟學及歴史學等に於て數々見る所なり。歸納法に於ても先づものは觀察にして結果より其原因を尋んとするものなるが故に誤謬最も生し易しとす。何となれば同じ結果か種々の原因より生ずるとあり又同じ原因か時と處により異りたる結果を生ずると多ければなり。

經濟學は彼の自然科学(Naturwissenschaften)と異り原因結果は常に混淆し時に甚しき相違を生ずるとあるが故に歸納法によると難く從て又演繹法によるとも誤なきを保せず。

## (二) 抽象派及歴史派

抽象派及歴史派の名稱は前述せる演繹、歸納二法の別名として用ひらるゝとありと雖も余は茲に演繹、歸納の方法を經濟學に適用して既に一の學派となりたるものに付き其長短を比せんとす。

抽象派とは彼の自由貿易派若くは英國正當經濟學派に對し其研究方法の抽象的なるが故に命名したるものなり。此の派は先づ人類行爲の根本たる動力を假想し之によりて經濟的現象を説明せんとするものなり。此動力として用ひたるものは利己心是なり此研究方法たるや全く誤あるに非ず。吾人が社會を形成し一の經濟的交遊をなす上に於て其大部分を支配するものは利己心と云ふべく利子、勞銀、地代等多くは之によりて説明するを得べし。此故に經濟學は利己心に關する一の科學なりとの惡評さへ蒙りたるとあり。

然りと雖も人類活動の根本は只に此の利己心のみに止らず。便宜、習慣、教育等により或は良心の發動により或は公同心を促され自由競争の慘憺たる結果は大に制限さるゝとを得べし。故に是等の抽象的原則は或假定の條件の下にのみ行は

る、者にして無制限に然るものに非ざるとを知るべし。右に述べたる如く自由貿易派は個人を以て経済學の立脚點とするが故に經濟の動力は一に個人の意思のみに限ると雖も、歴史派及其後の學派は社會本位主義とも云ふべく個人の動機と共に社會的條規の之に關係すると大なるを觀るものなり。

歴史派とは自由貿易派に反對して起りたるものにして、社會變遷の狀態を歴史的に精査し其上に如何なる法則の存するやを知るにあり。此派の缺點は歴史を過重し事實の記載を以て學問の目的を達したりとし、演繹法の斯學に必要なとを看過するにあり。歴史派の泰斗ロツセル氏が嘗て曰ひしとあり「經濟學は國民經濟の發達の法則に關する學問なり」と古人の經驗と社會の趨向とが後世に裨補し、後世の經濟を支配するあるは勿論なりと雖も、彼の抽象的原則によりて推論すべきことを知らざるは大なる誤なり。何となれば吾人は只に自然の成行に任すべきに非ず、進んで理想的に社會の改造を計るべきは勿論文明の進み社會の狀態一變するに至ては昔し眞理と見做されたるもの今に於て其眞理たるを得ざるは勿論却て迂謬と變ずると往々にして是あればなり。今世の貨幣信用の制度、交通の機

關は尋常發達の系統にて卜するを得へからざるとを知るべし。

### (三) 統計

統計は始め國家の計算又は人口の増減等に関する材料の記載に過ぎざりしが益進んで日常の現象に關し過去及現在に關する大量的觀察を施すに至り、尙ほ進てケテレー氏の力により類似の場合に於ける現象を比較研究し、其間に存する通則又は法則を發見するとを職分とするに至れり。物價の變動、金銀の産出の割合、比價の趨勢等皆之によりて知るとを得、延ては貨幣本位の論に重大の影響を及ぼすものあるか如し。統計の術も學も未だ充分の進歩を爲さずと雖も經濟學に最も裨益を與ふると一般に認めらる所なり。演繹法は之によりて全く歸納法は之によりて誤なきを得べし。

### (四) 數學的研究方法

ロツセル氏曰く「經濟學の或る問題は數學的に之を研究するを得べし」と。シェフラー氏も亦曰く「經濟的活動は汎く確定せられたる大量の總觀念なり」と。蓋し一部の眞理を含めり、大量の見出さるゝ場合に於ては之を數學的に研究するを得るは

勿論なり。然れども経済學は他の簡單なる諸學科と異り一々精確なる法式により論究するを得ず。只數學を多く用ゆるを得べき點は之を一の推論の方法として即ち論理の一方便として其法式を利用し得る點にあり。之を要するに經濟學を研究するに當ては以上の四者を諸種の場合に其研究の目的に適用して宜を得るにあり決して或一種の方法によるを得ざるなり。

#### 第四章 經濟學の基本的事項

##### 第一節 經濟の觀念

(一) 經濟の意義を概論す 人類は自然と文化の發達とによりて供給せられたるものを利用して其目的の爲めにし、又は其慾望を満足せしめんか爲めに活動するものなり。此場合に人は何物か犠牲にする所なかる可からず。是或は勞力なり或は資本なり、此等の犠牲たるや將來希望の光明あるによりて始て起るなり。即ち最少の犠牲を以て最大なる效果を得んとするに至る即ち是此等の行爲を經濟と稱す。

人か慾望を満足せん爲めに働く行爲は經濟なり。而して其慾望の種類如何の同

題は經濟の意義とは、毫末も關係する所なきなり。抑も人の慾望は諸種の制限なき限りは益増進す而も自然及勞力には限りあり、故に出來得べき範圍に於て最大の利益を占むることを考ふるに至る是自然の必要なり。宜なり文化の進むに従て經濟的行爲の複雑となるに至ると。

(二) 經濟の觀念には繼續的の要素を必要とするや、又は一定の企劃あるとを必要とするや

(1) 繼續的の要素を必要とするや。人若し分業の完全に行はれたる場合に一は貨物に就き其由て成りし所以を考ふれば其間實に長時間を要するを知らん。此の一社會を爲せる人類の行爲は他人の行爲と密接の關係を有し共同扶掖するものなり。例へば家屋の製造の如き之を國民經濟より觀察すれば其材木として森林より樵夫の伐下す當時より考ふれば非常の長時期を必要とするのみならず、大工か家を作り始むる時より考ふるも其意匠に或は建築に時日を消耗すると多きを觀るを得べし。

然りと雖も經濟的行爲は悉く斯る長時期を必要とするものに非ず。所謂原始の

經濟社會に於ては人は只果物を採て直に之を消費するか如き是なり。文明社會に於ても樵夫か木を伐るか如きは之を一の經濟的事業として觀察するは當を得たりと云はざるべからず。只今日に於て經濟的活動の多數は繼續的なるに過ぎるのみ。

(ロ) 然らば經濟の觀念には一定の企劃あるを必要とするか。多くの場合に於て然ると勿論なりと雖も各人は其の經濟的行動をなすに當り一定の信仰判斷によるに非ず。前時代又は同時代の先例教育慣習によりて人の爲すか儘に之を模倣し甚きに至りては全く無謀に活動するとあり。故に時としては其經濟たるや得たるものを以て失ふたるものを償ふこと能はざる場合あり。然れども是只生産的ならざるのみ通俗に所謂不經濟なるのみ其經濟なる活動たるに至ては一なり。

(三) 精神上の活動及消費は經濟なるや

(イ) 吾人の行爲の大部分は意識の結果なり。器具機械を使用する上に於ても其運用の妙は實に一心に存す、汽車も人によりて動き、風船も人によりて揚り、貨物も

は器具機械、勞力によりて生産さるゝか如く、又人の腦力によりて生ず。貨物の生産の上に於ては何れか其最も多き部分を占むるやと云へば之を人の頭腦に歸せざるを得ざるなり。抑も術語として其意義を定むるに當ては學者の自由に存するか故に經濟の意義を只有形的の行爲に止むるも差支なかるへしと雖も、經濟の意義を斯く狭少にするの結果は殆ど生産の意義を沒了して却て經濟學を根底より覆すに至らんとす。余は既に經濟學の觀念を述べたり是によりて經濟の意義を定むるか故に精神上の行爲と雖も苟も貨物の生産、消費、分配に寄與する所のものは之を經濟と云はんとす。

(ロ) 消費は家事經濟の大部分を占むるものにして家事經濟は分配されたるものを消費して未來の生産に資するものなり。古來の學者是を以て經濟の觀念に入れさりしものありと雖も余は消費か貨物の生産に密接の關係あるを觀るを以て之を經濟の意義中に含ましむ。

之を要するに經濟とは普く人類の創出的行爲及貨物の生産及消費の經過を云ふ。

## 第二節 慾望

人は、自然的、社會的に、不満足の状態にあるものなり、此不満足の状態を回復せんとするの情を慾望と云ふ。寒に衣を思ひ、飢に食を欲するか如く、名譽を得、信心を満足せんとする如き是なり。若しそれ其性質程度に至ては時の古今、洋の東西、男女老幼の別によりて異なる。未開國の人類に於ては慾望の數少く種類亦多からずと雖も、文明の進むと同時に、慾望を満足せしむべき物體を獲得すると容易なるを以て益増大するに至る。

慾望の種類に關しては或はロツセル氏の如く奢侈的、自然的、身分的慾望の三に區別するあり。或は社會的、個人的慾望の二に區別するありと雖も、是等は必ずしも絶對の標準に非ずして、時に依り異り處に依りて相違す、只一定の時一定の場所に於て一定の人に向て諸種の方面より觀察して慾望の種類を定むるに過ぎず。例へば其人の生存に一日も缺くへからざるものあり、其人の地位を維持するに有用なる慾望あり、又其以上に出るの慾望あり。文化未だ開けざるの時に於ては所謂奢侈的慾望たりしもの後に人生必須の慾望となるあり。又經常的、臨時的慾望あり、前者は人類か食を必要とする如き、後者は氣候激變して特に異常の衣服を必

要とし或は疾病によりて特別の衣食を必要とするか如し。

又個人的慾望、集合的慾望の別あり。前者は一個人の感ずる慾望にして後者は一個人の結合したる一の集合體としての慾望なり。這是集合體は其の之を組織する個人の慾望を離れて其の團體の生存持續の爲に生ずるものなり。現今文明國に於ける國家若くは公共團體か一の經濟主體として有する慾望の如き是なり。又利己心及公共心の別あり、公共心は文化道德教育と共に益發達せしむべきものにして、單に慾望を利己心若くは貪慾のみとして、經濟學の基礎に立つるか如きは其の弊や只に斯學を誤るのみに非ざるべし。斯の如き慾望の種別の實益は後段説く所に於て自ら明瞭となるに至らん。

### 第三節 貨物

貨物とは人類の慾望を満足するに足る者を總稱す。最近經濟學の進歩するに及て貨物の意義は往々價値の觀念と同一視さるゝに至れり。然り貨物は主觀的に云へば價値に外ならず客觀的の名稱即是貨物なり。故に所謂貨物の生産、消費、分配とは價値の生産、消費、分配と云ふとを得べし。然りと雖も吾人は價値の増減高



低に關して論ずるとあり此場合に於ては客觀的意義に於る貨物の數量の増減を云ふに非ずして一の貨物に付人類の慾望を満足するに足る程度を云ふなり。故に余は貨物と價值とは全く異りたる意義に用ゆ、即貨物を慾望の客體 (Object) とし、價值は慾望の主體 (Subject) たる人か貨物に對して感ずる度合を示すものとす。ロツセル氏は貨物を以て眞正の慾望を充たすに足るべきものゝみに限ると雖も、是少しく倫理を過重したるより生せし誤なり。心理學に於て不道德の精神も一の精神上の狀態として觀察するが如く、經濟學に於ても苟も人類の慾望を満足するに足るものは之を貨物と稱するなり。例へば合鍵は盜用に供せらるゝとありと雖も尙貨物たるを失はざるか如し。

貨物の種別に關しては諸説あり余は其重なるものに就き説明せんとなす。

(一) 有形的貨物、無形的貨物 貨物は人類慾望の目的となるものなるを前述せるか如し。貨物は生産を補助するものたり、或は消費使用さるゝものたり。有形的貨物とは我民法に所謂物と稱するものにして通常交易の目的となるもの是なり。無形的貨物とは多くは商賣の得意、版權、商標、商號の如き一定の形式を有せざる貨物なり。

物なり。

(二) 人及人の行爲 人の行爲を以て一の貨物と主張するに最も力ありたるはラウ氏なり。人の行爲は新に貨物(有形の)を生産するとなく往々奢侈を満足するに過ぎざるものありと雖も、現今商工業の進歩と共に企業者なるものゝ存在を必要とし、其行爲は事業の經營上最も重要なるものに屬す。

他人は自己より觀れば一の貨物たるにあり。例へば食人々種に於ては人は明に食物の一たり、奴隸は生産の機械なり、現今各人は皆平等自由なりと云ふと雖も、精確に云へば吾人は他人を以て共同生活の一件侶と云ふを得ずして貨物の名稱を付するの目を得ざるに至る。労働者保護の問題は現今及將來の問題と稱すべく、各國舉て其良法を布くに務むと雖も、尙鐵、石炭等と人間とを同く生産の材料として觀察し、其間に殆ど區別の觀るべからざるを如何せん。

(三) 内部貨物及外部貨物 外部貨物とは吾人の外に存する貨物にして日常交易消費の目的となるもの及他人の行爲智識等はなり。内部貨物とは自己に存する貨物と云ふ意にして智識健康の如き是なり。然れとも此區別たる只に實際の觀

念と相違する甚しきのみならず理論上の誤謬ありと云はさるべからず。抑も貨物は人類の進歩發達なる目的を達する手段なり、自己の健康知識の如きは人生目的の一部なり、之を貨物とするときは目的と手段とを混淆するものなり。現今及將來の社會に於ては人は只生存するのみが目的に非ずして一層完備せる生存其ものか目的なり。故に之を違するの手段たる貨物と既に目的の一部を完成したる状態なる知識健康とを區別するを要す。

(四) 自由貨物及經濟的貨物 自由貨物とは極て僅少の犠牲を以て若くは全く犠牲なくして自由に得らるべき貨物を云ふ。例へば水、空氣、光線の如し。經濟的貨物とは之を得んとするには必ず多少の犠牲を必要とするものを云ふ。此犠牲たる吾人の得んとする貨物か吾人の欲する時と處とに於て吾人の欲する形に於て存せざるより生ずるなり。

自由貨物は更に一般的自由貨物(Allgemeine freien Güter)分有的自由貨物(Freie Besitztümer)の二に分たる。前者は空氣及光線の如く所有すべからず、又移轉すべからざるものなり。後者は本來所有し移轉し得られざるものに非ずと雖も其分量比

較的に多きか爲に價值なく交換の目的とならざるものなり。例へば水及土地、草、石、果物の如し。土地は人口稀薄なりし時は所有權の目的ならさりしが如く水は人畜の飲料としては其量多きが故に價值なしと雖も、水車、工場及水道に用ゆるに向ては其價值甚大となるに至るが如し、故に給水に關する法則は將來の問題となるに至らん。

經濟的貨物を分て二とす。一は直接に人類の慾望を満足せしむるもの、一は間接に然るものを云ふ。前者は専ら人の食用に供せらるゝもの、後者は其他の貨物の總稱なり。前者を消費的貨物(Verbrauchsgüter)後者を生産用貨物(Produktionsgüter)と稱す。

#### 第四節 價值及費用

吾人は貨物ありて生存するとを得るなり。吾人の幸福は之に因て存ず故に吾人は各種の貨物に付其吾人の慾望を満足する程度に従て之を輕重するなり。其程度を稱して價值と云ふなり。

貨物を有すると及之を失ふとは吾人の生計幸福の消長に關係す。其程度如何は一に吾人が貨物を貴重するの程度によりて定まる。吾人は生計の爲に其他一般

社會の爲に其手段たる貨物を増加するの念熾となる。然れども貨物の生産には他種の貨物の消費を必要とするとき多きが故に、將來の結果か得失相償ふて尙餘あるか少くとも損失相平均するに非んば生産なる行爲は行はれざるなり。即生産には必ずや價値の比較を前提とするものなり。

貨物の生産には他の貨物か消費さるゝとあるのみならず勞力の使用亦大なり。是等の犠牲を稱して費用(Kosten; Cost)と云ふ。費用と價値とは各經濟的行爲の進路を定むるものにして犠牲にされたる費用か如何の價値を産出し得るやは實に經濟の指針をなすものなり。

### 第五節 生産及消費

生産とは人間の行爲によりて人生有用のものを作出する行爲なり。抑も天與の貨物にして直接に吾人の慾望を満足せしむるに足るもの甚た少し、故に生産は人類經濟の大部分を占むるものなり。消費とは慾望を満足することによりて生ずる價値の消耗なり。是或は全く貨物の形を變ずることによりて行はれ、或は形を變せざるも尙價値の減少によりて行はる。

吾人の消費をなす方向範圍は慾望の程度生産の方法によりて定まり、生産は自然と人口の數等により消長す。例へばサハラ沙漠に於て農工の起らざるか如く自然力に富むる人口稀薄なるか又は人口多しと雖も諸般の技術藝能に乏しきときは、生産の發達期すべからず。環海の國に工業商業起り深山大澤に原始産業の行はるゝ如きは是なり。

### 第六節 収益及所得

収益とは或一定の經濟的活動若くは事實より生ずる生産的結果を云ふ。若し其収益たる、失ふたる費用を償ふて餘まるときは其剩餘の部分を純益と云ふ。右述べたる生産の結果の全部を純益に對して總収益と稱す。之を方程式に顯はせば

所得とは一經濟主体が一定の期間に收得するものを云ふ、収益は其發生の原因より觀察し所得は一定の期間を標準とす。

### 第七節 經濟的單位及經濟的組織

それ經濟的活動に之を指導する意思と一定の慾望とが豫め存在するとを必要

とす。其意思と慾望との主體たる自然人及集合體を稱して經濟的單位と稱す。抑も一個人は家族團體及國家を組織する一の分子なるが故に自己の慾望を満足せしむるを務むると同時に全般に關する經濟を顧みざるべからず。是故に諸般の個人經濟共同又は自由經濟又は強制經濟生ずるなり。國家及公共團體の經濟は國家の權力によりて一の經濟をなさしむるものにして一私人の自由選擇を容れざるが故に之を強制經濟と云ふ。之に反して個人か自由共同して一の經濟をなすものを自由經濟と稱す。

個人經濟は交易經濟的組織より生ず。所謂經濟的組織とは經濟上に於る人類の繼續的結合を云ひ、交易經濟的組織とは分業、所有權、及び契約自由の三者の存在する一の經濟組織なり。分業によりて人各其長所によりて働き有無相交換する必要を生じ、所有權あるが故に個人の特別の利害生じ、契約の自由によりて如何なる方法に於て、如何の程度に於て結合すべきやの問題定まる。是等の基礎あるに依り交易經濟なる人類の繼續的結合存するなり、故に此經濟組織に於る經濟の指針たる法則は有價の貨物の移轉及相互の行爲なり、而して經濟單位の間に於る相互の

關係を永續すべきや否やは双方有益の利無によりて定まる。略言せば最少の犠牲を以て最大の利益を得て其私益を計るにあり。勿論此場合に於て私人は極端まで其利益を求むるとに非ずして多少の制限を受くるなり、法律習慣道德等の制限是なり。

共同經濟は共同經濟的組織より生ず。共同經濟に特有なる點は共同の目的の爲にする數人の結合なり。此共同經濟に於る經濟上の法則は二の方面より觀察せざるべからず、即ち共同經濟の生産及其消費是なり。共同經濟の生産の爲に如何の割合に於て其勞力及貨物が徴收さる、や、其生産の結果は如何に分配消費さる、やの二點なり。共同經濟組織に於ては共同の目的を達するが主となるを以て生産の爲に個人の犠牲を促すに或は貨物提供の能力に従ひ、或は適任者を選び、或は全く同じ方法程度によるとあり。例へば累進税の如きは提供の能力に従ふものにして兵役の如きは適任を選び又村落等に行はる、交代の夜廻の如きは同じ程度に於て犠牲を求むるものなり。之に反して其分配消費の工合は彼の私經濟の場合に行はる、如く人各其爲したる行爲に比例して報酬を受くることなく全く

個人の犠牲と無關係に分配され従て消費行はるゝなり。其分配の行はるゝ方法は二あり、一は各人の慾望に應じて共同經濟生産の結果を享受せしむ。例へば公園、博物館、圖書館を何人にも觀覽せしむるが如し。他の一は全く個人の慾望に關係なく各人に其結果を利用せしむ即共同の保安軍隊の設備の如き是なり。上來述べたる如く吾人は二種の經濟組織を知れり。即交易經濟的組織にして自由又は相對的自由の交通より生ずる經濟及共同の組織をなせる人類の存在を前提とするもの是なり。個人經濟の法則と共同經濟に行はるゝ法則とは異りと雖も個人は個人の存在と共に社會の生命の一部をなすものなるが故に個人經濟の主體たると同時に社會經濟の一部をなすものなり。従て私益を計ると同時に公益の爲に行働をなすとあり現今の如く社會の狀態複雜となりたる時に於ては殊に然りとす。例へば農業に於て不作なりしときは其結果は都市經濟に影響し遂には國民經濟に及ぶに至らん。所謂國民經濟とは一國民を一の經濟主體と見做し其經濟を論ずるものにして一の共同經濟なり。此國民經濟に關する學問を狹義の經濟學と稱するなり。

## 第一編 國民經濟發達の條件

### 第一章 自然的條件

#### 第一節 外界の自然 (anssere Natur, Outer Nature)

人類も自然の一部たり外界の自然とは人類以外の自然を云ふなり。例へば地形、地質、地味、氣候、地位の如き是なり。

(一) 地形 地に平坦なるあり、險阻なるあり、川に大小あり、以て騾馬に鞭つべく、以て航すべく、谿谷には利用すべきの水力あり、電氣之によりて生ず、平野には風力あり、車を動かすに足る。人は皆此等の地理により事業を經營すべく、又自ら一定の事業發達するに至るなり。若しそれ水運の利便は經濟の發達を助けたるの跡、歴然たり。例へば古代文明のユーフラチス、チグリス河畔に起り西漸して地中海の三半島に移りたるが如し。現今に於ても水上の權力者は政治上、經濟優勢を占むること人の皆知る所なり。

(二) 地質 地に寶石、礦物に富めると否とあり、富める所は採鑛すべく、従て諸種の工業の發生を促すなり。英國の製鐵盛なるは鐵鑛と石炭坑と相接近するが故なり。

就中金銀は近世諸國の最も重んずる所にして金銀を多く所有することは百千の  
 雄雄を浮へたると同一視さるゝに至れり。

(三)氣候 寒温熱の三帯は人類の性情に影響し兼て動植物の分配に關係す。温帯  
 の人種は適宜の氣候に浴し文化最も進むと雖も寒熱の地方に住するものは生産  
 力に乏し。又動植物の多寡及其種類により生産に消長あること論述するの要な  
 からん。

此他地味も亦右に述べたるか如く産業の發達に影響す。和蘭人は其國の地味惡  
 きが故に早く航海通商に熟せり、熱帯の地は諸物の繁生宜きに過くるが故に却て  
 人民をして怠惰ならしむ。

之を要するに人類は自然と密接の關係を有するか故に益之を利用して限なきの  
 慾望を満足せざるべからず。始は僅に人力を以てすると雖も後に器具機械其他  
 交通の具を以てするが故に自然的に異りたる兩地と雖も其經濟の狀態相類似す  
 るに至る。尙其狀態異なる場合に於ても有無相交換して自然の寄與未だ盡さる  
 所を補ふに至る。其如何なる度に於て自然力を利用するやは人間の慾望技術の

進歩のみに非ずして得失相償ふや否やの經濟的觀察によりて定まる。

## 第二節 人口及其自然的分界

一國民及一地方人士の性情は經濟上に種々の効果を顯はすものなり。例へば英  
 人の堅忍不拔なる、江州人の商業に巧なる、支那人の蓄財に秀でたる皆經濟社會に  
 其特徴を顯はせり。殊に其男女老幼の區別は一層重大なる影響を生ずるものな  
 り。老幼の消費は殆ど同じくして其生産力に於ては非常に異れり、此故に生産能力  
 ある人民の多數なることは最も其國の利益たるや明なり。男女の差も亦稍此點  
 に於て同き所あり、就中小兒出生の數は男女の比例如何に存するが故に出生の數  
 を増加し小兒が比較的多數なる結果を生ず。

人口の大小は其團體の肉體的勢力の基礎となり經濟的活動の能力を決定するも  
 のなり。又自然力機械力を利用するの程度に關係す、人口大なれば分業行はれ易  
 く労働の供給充分なるが故に大事業を起すに適す。人口稀薄なる所に於ては勞  
 力の價甚た貴きが故に比較的機械の力を多く假るに非れば生産を増殖する能  
 はざるなり。是れ米國に於て機械の發明多き所以の一たり。人口の大小は國法

及經濟的組織の標準となり其結果個人經濟に大影響あり。

嘗て人口の増加が生計品の産出に超過するの議論マルサスによりて唱導せられし以來悲觀的樂天的論者の二派に分れたり。抑も土地の廣狹は限あり土地の生産力は遞減す然るに人口の増加は年を追ふて止る所を知らず機械技術の進歩を以て貨物の生産を益増加せんと務むと雖も恰も土地收益遞減法あるか如く機械等にも自ら此法則の存するを見る。例へば一旦据付たる機械は容易に之を變更すべからず石炭を焚き油を注くに於ても自ら限界あり一定の範圍外に於ては百の石炭千の石油ありと雖も毫も生産に資するなきのみならず害却て之より生ず。故に大體の傾向を云へば貨物の生産は人々の増加に伴はざるべし。是悲觀論の起る所以なり。然れども世界の廣き無人の境天然の遺利甚だ多し以て移住すべく以て貨物を收取するを得べし。和蘭は之によりて起り英國は之によりて強し。且下等動物の繁殖は假令其死亡少からずと雖も増加の率は大に高しと云ふべし。又實際に於ては飢饉疫癘戦争貧困其他過勞及道德上の制慾によりて一方に於ては死亡の多きと他方に於ては出生の減少とにより人口も無限に増大するを得

ざるなり是樂天論の主張なり。カールマルクスの如きは社會を改造して各人をして其職を得せしめ一人の遊惰者なからしめ以て生産力を増加するを得と云へり行はれ得へくんば幸なり。之を要するに人口増加の現今の趨勢は貨物の増加に超ゆるの傾向ありと雖も道德上の制慾國家の良政策に依て此缺を補ふとを得べし。若しそれ未來永劫に對する憂慮は之を杞人に任すべく釋教耶教の教導に従へば可ならんわ。

## 第二章 國家及社會

### 第一節 社會

#### 第一款 緒論

個人は自然的精神的經濟的歴史的又政治的に相類似せるもの集合して一團となる。例へば家族團體宗教團體政治團體の如し此等の團體に於ては自ら其行爲の動力生し思想の成立を來たすものなり。此團體を稱して社會と云ふなり。國家は尙一層強固の形體を具備し法律上政治上確然たる一の結合にして一定の領土人民及統治者の三者存するものなり。社會は或一定の目的の爲に存する人類の

結合なり故に國家は一の社會として觀察するを得れとも社會は皆國家なりと云ふとを得ざるなり。

### 第二款 社會と國民經濟との關係

それ社會に存する傾向は其固有の經濟的勢力を擴張するにあり。例へば農業が生計の要部を占むる場合に於ては農業に關する生産分配は最も貴重せられ商業繁盛の時代に於ては農業は殆ど顧みられざるに至る。見ずや現今農業大に頹敗して物價下落の勢あるに係らず、獨り穀價の騰貴するは農政の不振によるとの論あるに至りしとを。

又職業の種類は政治上及國家の法制上に影響することを見るを得べし。農業經濟時代に於て封建政治行はれ商業經濟時代に於ては立憲政體、民主政體行はれ就中議會は地主を代表したるの觀ありしもの、今は都府は獨立の選舉區として商工業を代表するに至れるを見るべし。米國に於ては政黨は金銀二黨に分るゝに非ずや。

### 第三款 分業を論ず

分業とは共同の目的の爲に、各部の行爲を云ふ。故に分業は先づ一定の目的たる事業の存在するを必要とす。又分業に於ては各部の行爲其ものは常に全體をなすものに非ず其歸着する點は社會或は社會の一部の目的を達するとなり。前に述べたるが如く個人は一社會をなすものにして社會の全體より觀察すれば個人は只其の一部分の事業をなすものなり。例へば農工商の別あるが如く皆職業によりて分れ以て共同の生活をなすなり、之を社會的分業と云ふ。

之に反して各人は一の貨物の生産又は一の事業の爲に行働するとあり。其事業の一部を擔當して働くと例へば留針に於て、一人は針の先を尖らしめ、一人は針の耳を作る如きは一種の分業なり、之を稱して技術的分業と云ふ。

分業は一方より見れば合業なり。何となれば其各部の事業は合して一の全體を爲すものなればなり。此故に分業に於ては其各部が相互に正當の比例を保たずんは不可なり。即一部完全に過ぎるか又は一部不完全なるときは全體の完備は得て期すべからざるなり。

(一) 國民經濟に於ける分業の條件及結果を論ず



古代の國家に於ては職業の數及び種類又は之に従事すべき人を定めたるが故に分業も充分行はれざりしと雖も、國法又は習慣法の制限無き限りは其の自由なる程度に應じて益々各人は一定の事業の爲に結合して之を完成することを得。是れ蓋し最少の犠牲を以て最大の效果を得んことを勉むるに出づるなり。社會的分業は技術的分業に於ける如く其分業の度烈しからざるも益々分るゝの狀態明なり。シユモルラー氏の說に依れば會社又は組合組織の工業の種類のみにては十八世紀に於て獨逸の各市に二十五種各邦に於て八十乃至百種あり、技術的分業に於ては機械の發明と共に益々分科し靴製造に於ては十六種の部分に分れハソカチーフ製造には三十四種分ると云ふ。

(二)分業の結果　を論ずるに當りては之を三方面より觀察するを要す。(一)各人に對する(結果)二、各職業に對する(結果)三、社會又は團體に對する結果是れなり。

(イ)各人に對する結果

- 一、仕事に熟練し易き事。何と云へば常に同じ仕事に従事するが故なり。
- 二、各人の技能に應じて仕事を擇み之に従事するに容易なること。女子又は小

兒を事業の一分に使役するを得るが如き是れなり。

三、職業の習得に容易なること、從て速に獨立して生活するを得るに至ること。

然れども之に伴ふ惡結果あり。

- 一、行爲單純にして變化なきが故に精神上肉體上の不快を來す。
- 二、小兒等を過勞せしめ又は婦女を工場に使役するよりして育兒に不完全を來し其の結果國民の精力を虛弱ならしむる事。
- 三、他の事業に移り難きよりして其の事業を離れんと欲する場合に於ても徒に忍んで之に従事するの不利を生ずる事。

(ロ)各職業に對する結果

- 一、現存の自然力又は勞力資本等を必要なる仕事の部分に適宜に使用することを得。
- 二、器具機械等益々分科して生産力大となる事。
- 三、生産の増加及改良は企業者の地位を高め自ら勞働者と別の階級を生ずるに至り經濟益、進歩する事。

抑も各種の職業は相互に密着の關係を有するが故に一事業の盛衰は悉く他に波及するに至る。又生産複雑となるに従て其の市場を見出す事難きより消費者の勞力に服従すること大なるに至る。

(ハ) 社會に對する結果　分業は生産を増加するが故に其の結果たる貨物の價を廉ならしめ又事業が獨立したる數人に依りて經營さるゝが故に各人皆其の事業に充分なる注意を施し生産上及社會政策上良好の結果を生ずるなり。

之を要するに分業は多少の害あるに係らず其の長所あるによりて益行はるゝに至る其短所の如きは國家の經濟政策によりて救済すべきなり。

(三) 分業發達の條件　分業の發達は只に技術上の分科のみならず社會の進歩あるによりて行はる。社會の進歩とは即資本の増殖、交通の發達及法制の完備を云ふ。資本増殖せざれば分業は充分に施すに由なく交通開けて貨物販賣の市場廣大なるに非ずんば畢竟無益の生産に終らんのみ。法制の完備なくんば將來の景況を卜して大資本を投じ分業を利用すべきに非ず。是一方より觀れば分業の發達を制限する事情たり。

分業は職業の性質によりて行はれ易きと否とあり。機械類の使用さるゝものは分業行はれ器具精巧を要する美術品の製造農業の如きものは行はれ難き事詳論するの必要なかるへし。

## 第二節　國家

### 第一款　法律

法律は法則の一なり、法則とは一定の原因に一定の結果を生せしむるものを云ふ。法則は古より存せり。社會の状態複雑なるに従て慣習教育倫理の法則のみに依る事を得ざるが故に遂に主權者の意思を以て強制し一定の範圍に人民を行働せしむるの法則生ず是法律なり。然るに主權者の意思は民に不能を強ゆるに非るは勿論苟も民姓に裨補するものは之を取り又民姓に害ある者は之を禁せんとするなり、故に法律は人民の行爲を一定の範圍に限定すると同時に其の範圍内に於ては自由に行働するとを保證するなり。之を經濟的活動に適用して云へば社會に害なき範圍内に於て自由に經濟的活動を爲し以て其の個人の利益を進捗するとを許すなり。

法律を分ちて公法私法とするとは其源や古し、而も其の區別の標準に至ては區々たり。此の議論を爲すは本論の範圍に非ず。余が最も正當と信する者によれば私法とは個人と個人との平等關係を論し、公法とは國家と個人との間に存する權力關係を規定するものなりとす。私法は重に私人の交易に關するを規定す、故に物を如何に處分し得るか人の行爲に如何の權利關係を生ずるかを知るを得。公法は國家又は公共團體の根本の組織、人民の政務に參與し得るの範圍を決定するが故に各種の法制の經濟に適用して益經濟の發達を期するとを得るなり。財産權殊に所有權 財産權は各種の物權及債權より成る、畢竟經濟的貨物を自由に支配するとに歸するなり。財産權中最も重なるものは所有權にして他は所有權の一の變態と見るとを得べし。所有權を分て私所有權及び公所有權とす。私所有權とは私人か其私益の爲に有する權利にして公所有權とは國家又は公共團體が公益の爲めに財産を所有する權利を云ふ、即ち公有鐵道郵便道路の如き是なり。蓋し私益は公益に服従すべく少數の利を以て多數の害を醸すべからざると勿論にして國民經濟當然の結果なり。

現今所有權の範圍は土地を始とし一切の經濟的貨物に及ぶと雖、古代に於ては土地は所有權の目的に非ずして共有たりし。蓋し當時土地の面積人口に比して廣大なりし故に所謂自由貨物なりし點と土地の生産力豊なるが故に之に資本を投するの必要なく又改良をなすの必要もなく即ち土地の生産力は自然力の結果にして之に關して個人の方は殆ど皆無の狀ありしが故なり。後ち人口増加と共に土地收益遞減法によりて益、人工を加ふるの必要を生し其結果たる土地は資本が其大部分を占むるに至りしが故に自ら各人の技能忍耐の補償として私所有權を認むるに至る。極端なる社會主義の學者は古來の共有財産に復歸するを理想として主張すると雖も、人民の道德の進歩著しくして恰も佛菩薩の境界に至らざれば到底行はれざるの論にして、經濟の發達上私所有權の認む可き理由は實に右述べたる自然力其他の經濟道德上の理由に基くなり。只公益の爲に多少所有權を制限するとは事情により國家の政策として行ふ可き所なり。親族法 親族に關する法則は早くより發達し又種々の變遷を経たり。去れと一貫したる傾向は家族の繁榮を期するにあり、家族は國家の基礎、社會の起原なれば

なり。所謂民の富むは君の富なりとは此觀察點の表彰なり。願れば家族は母權に始り父權に移り一夫多妻より現今一夫一婦制に至る、是道德及社會の發達より促されたる結果なりと雖も、常に家族は一團體として血統により連鎖し利己心の發働以外に共同生活の必要を感ずるに至り、單に自己の爲に利益を得るの外に其後繼者に利せんとす即ち父は子をして己か社會に出でし階級よりも尙一層高等なる立脚點より浮世の旅路に出發せしめんとす、是即經濟の動力となりて生産力益増加するなり、然らずんば人は只た己の衣食を得る以外に身心を勞するの要なければなり。故に爲政家は此點に注意し婚姻獎勵法となり、家督相續法を生ずるに至るなり。極端なる社會主義の論者は親族としての觀念は後には公共心を以て代ゆるとを得、他人と親族との區別は殆ど皆無となり、兒女の教養は國家之を司り以て共同生存をなすときは世に不平なく生産増加すとの想像をなすものありと雖も、其之に違するには實に永遠の後に非ずんば國家の一時の政策によりて此社會的組織の根本となるべき偉大なる公共心を發生せしむるとを得ざるなり。相續法。相續は一個人の所有權を認めたる以上は之に伴はしめざるべからず。

何となれば人は其死後之を子孫に傳ふるを得ずして直に國庫に沒收さるゝときは到底生産の效果は見るを得べからざればなり。然れども其の規定の方法に至りては或は長子相續あり、分割相續あり、其程度如何によりて或は貧富の不平均を生じ、或は財産分割の結果資産の集積を害するあり、須く文明の程度と道德の如何とに鑑み宜を得るとを務むべきなり。

### 第三章 人的條件

人は經濟の主體なり、經濟的活動者は人なり、人の行爲の根本は人の精神なり。故に人の精神如何によりて經濟は指導せられ、或は其果を生じ、或は然らず。

(一) 人の意思 人の意思は種々に外部に表現す、喜怒哀樂は其重なるものなり。是等は一時の現象に止り、經濟上に及ぼす影響は多からずと雖も、人類の欲望を満足せん爲に發現する情は經濟上研究すべき問題なり。古代の學者は往々利己心又は利慾心を以て經濟的活動の動力とせり、其所謂利己心とは人に害の波及する否とを問はず、只己か利益をさへ得れば可なりとするの情を云ふ。而て經濟的原則即最少の犠牲を以て最大の結果を得んとするの意思は利己心より出るものと

し、二者全く同きものと解せり。左れと此經濟的、原則の本體たる意思は利己心とは其範圍を異にす、即ち最少の犠牲を以て最大の結果を得んとする意思は或場合には全く自利心より出るとあらんも或場合には高尚なる徳義心より出るとあり。或は名譽心公共心より生ずるとあり。社會の進歩と共に高尚なる精神によりて經濟的活動を爲すに至ると勿論なり。公共心は將來に於て最も經濟を支配すべきものにして又支配するの趨勢あり。

公共心は共同生存の爲にする精神にして其爲には財産上の利益は勿論身體をも捨つるが如きは是なり。現今の經濟組織に於ては或は慣習上或は法則上公共心の發動を見ると屢なり、公共心は倫理道德の發達によりて以て存ずるを得るなり。

(二) 科學上の智識及其應用

科學とは自然及社會上の諸現象に關し其の原因結果の理法を研究するものなり。故に科學は其研究の範圍によりて大別せらる。其自然の現象に關する學を自然科學と稱し、物理學、化學、地理學、氣象學等之に屬す。其機械力及其製造に關する學を工學と稱し、社會の組織變遷に關する學を社會學、歷史學、國家學と稱す。經濟

學は其の經濟的現象に關する學なると前述の如し。

自然科學は機械の發明製造に關する根本の智識を與ふるものにして化學は分析を助け、理學は諸種の自然力を説明し、地理學は人情風俗、生産物の異なる原理を教ゆるものなり。

工學の經濟に影響するとは非常にして現今に於ける社會の變遷は一に蒸氣印刷術の發明によると既に人の唱道する所なり。殊に機械の進歩は都府と田舎との區別を減少したり何となれば往時田舎は交通不便なりしか故に工場等皆都會に於て行はれしも現今交通の發達せし爲原料の所在地なる田舎に於て工場の勃興せるより僻村却て都會となり、都會變して寒村となるに至る。是等の學術は技術の進歩を促す。而して技術は生産交通企業の方面に向て發達す、例へば交通機關の發達は市場を世界に争ふに至り、機械の發明は小企業を壓倒し大企業を生ずるに至り、原始産業は衰へて精製品の生産に至るが如し。既に説ける如く經濟社會は其の連鎖密なるが故に一方に於る小變動は他方に及ぶ故に大資本によりて機械を使用するに至るときは小企業者の不平と一時の困難を來すに至るなり。

經濟學は經濟的活動と前後して伴ひ、經濟學は將來に向ては其指導者たり、過去に向ては其説明者となる。資本缺乏の時に資本家主義の極端論起り、後社會主義を生じ、以て資本家の專横を壓抑し、弱者救済の方法を説くと共に、一階級の不平は却て社會全体的損害なることを明にするに至れり。右二主義の主張者に極端論ありしも、共に其當時及將來の經濟社會に利したるに至りては一なり。

## 第二編 生産論

### 第一章 生産取得及生産要素

#### 第一節 生産

人は何物をも創作するを得ず、只自然に存するものに努力を加へて其慾望を満足せしむるに足る形にするを得るに過ぎず。生産は二の方面より觀察するを得。一は技術的方面、一は經濟的方面是なり。即ち生産は只新なる者を生ずる一の技術的經過と見るを得べきも、尙經濟的方面より觀察するを得るなり。それ吾人の生産は必ず多少の犠牲を必要とす、是或は有形の貨物たり、或は努力たり、故に生産の結果は此費用を償ふに足らざるべからず。若し生産を單純に技術的方面より觀察せば、只其目的とせる結果の生ずるを以て足れりとす。然れとも尙之を經濟上より見れば、生産の結果として生したる價值は失ふたる價值より増加するを主とす、故に生産とは價值を増加せんとする行爲を云ふなり。生産は價值増加其ものを云ふに非ずして、價值を増加せんとする意思の表彰なり。價值の増加は生産に常に伴ふ者に非るなり。抑も價值の増加は社會の状態によりて異なる例

へは奢侈品の價は流行の程度によりて其價に高下あるか如く、其價値下りたるときに於て生産されたるものは技術上より云へば常に同比例を以て生産の額と品質とを高むるも價値の消耗如何によりて得失相償はさるに至ることあり。又或田地より生ずる收穫の分量品質は前年よりも劣りたる場合即ち技術上より云へば不作なる場合に於ても尙穀類不足の爲め非常なる價値を生ずるとあるが如し。要するに生産は得失相償ふ意思を以てする技術上の行爲にして其實際の結果に於て果して有利なるや否やを問はざるなり。

生産と取得とは異なる。取得は人の利益を得る手段の總稱にして種々の形式によりて行はる。生産は取得の一形式なり。人は自然其他社會上の現象により自ら新なる貨物を得若くは自ら自己の貨物の價値増加するとあり、是亦取得の一形式なり。例へば天變により土地に新なる地力を生ずるとあり、或は停車場附近の土地の價増加するが如き是れなり。

## 第二節 生産の要素

生産の要素に關しては或は自然、勞働、資本の三とせし學者あり、或は資本は生産の

結果なるが故に自然と勞働との二に限るべき者とせるあり。所謂自然とは自然に存する力を云ひ水力、風力、土地の如く人工を加へずして天然に存する者を云ふ。水力、風力は暫く措き土地の如きは現今に於ては多くの資本を投せられたる結果として、土地が資本なるか、資本が土地なるか殆ど區別し難きの状態なり。且現今に於ては資本は生産に必要欠くべからざるものにして其の大部分は資本の力と云ふべく、且生産とは現今の社會の状態に於ける生産の謂なるか、故に資本を以て生産の要素とするも不可なきなり。それ資本は前時代より見れば一の生産の結果なりと雖とも之を現今及將來の生産の要件なりや否やを考ふるに於ては必ずや之を然りと答へざるを得ず。

自然力たる水力、風力又は光線の如き自由貨物は經濟上價値なきが故に經濟的意義に於ける生産の要素としては之を顧るを要せず、故に土地及資本の二者と之れを活動せしむる勞力とを稱して生産の三要素と稱す。然れとも生産は必ず此三要素のみによりて行はると見る可からざるは勿論なると前に述べたる所によりて明なり。

## 第一款 土地

土地は生産力あると同時に生産の行はるべき場所となるを以て之を種々の方面より觀察するとを得。

(一) 生の立場としての土地を論ず

それ生産を爲すには一定の根據地を要す。遊牧の時代に於ては其立場は變更せしと雖も只たそれが固定せざるのみにして生産の基く所なるとは勿論なり、近世大企業の起るに及ては投下したる資本は容易に動すへからざるか故に生産の立脚地も亦自ら一定するに至れり。

生産の立場の良否は生産力に關係す。生産は生産に便宜なる諸條件の多く存在する所及其生産物販賣の市場に近き所に於て之を行はすんは生産物の價値は殆ど見るへからず。若し生産を補助する條件少き所に於てせば生産の原料其他の資本を得るに困難するは勿論、又市場に遠き所に於てせば生産物を販賣するに苦む、即運搬の費用は生産物の價を騰貴せしめ却て顧客を失ふに至ると明なり。就中生産原料の遠き所に於ては其運搬費甚だ多し、只生産物が非常に貴重なるか、又

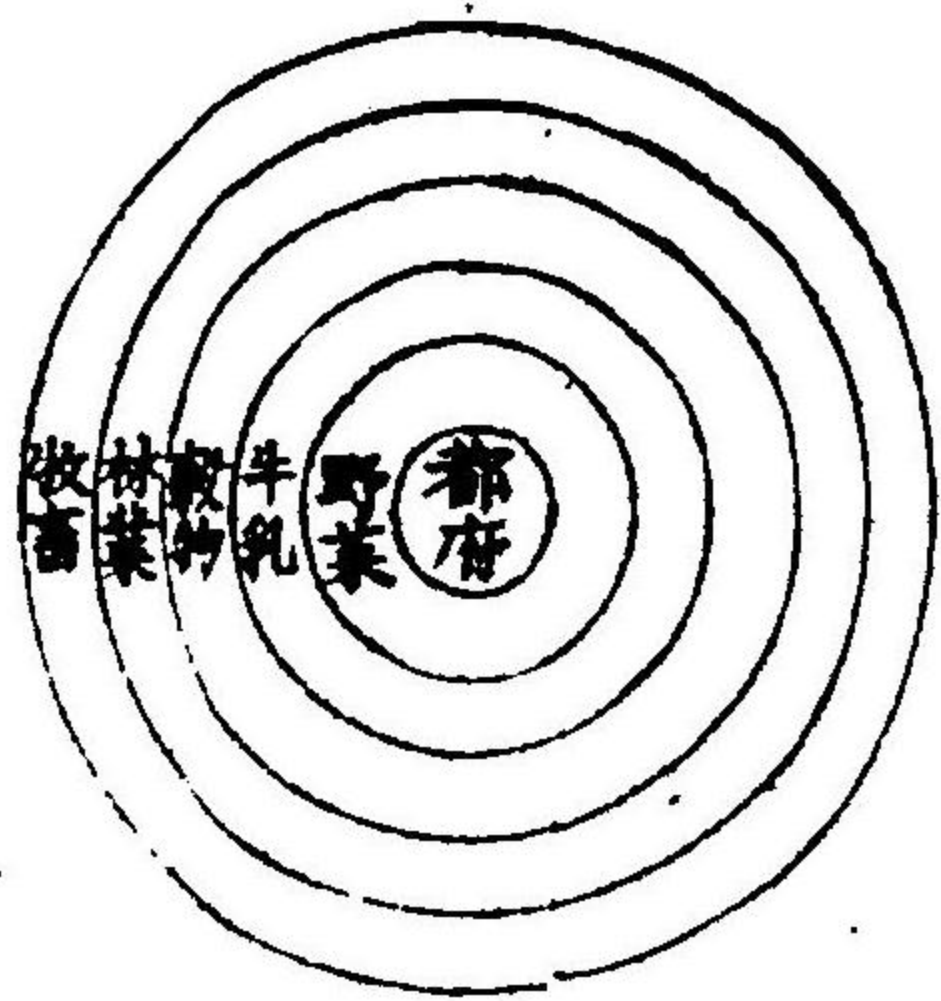
は其需用多き爲め産出の總額多きときは各貨物に對する生産費は比較的に小なるとあるのみ。

以上述べたるか如く生産の立場は市場に近く生産の諸條件具備する所に設くべしと雖も此二者を備ふる場合甚だ少し、故に比較的に生産に利ある點を考へて定むべきなり。其の觀察の標準は生産の資料多きと、運搬の利あると、販賣の便あると、及生産物の種類是れなり。生産物は大別すれば人の衣服、飲食、住居に關係するものの三なり、飲食殊に日常の食品は最も市場に近きを要し、衣は之に次ぎ、住は又之に次ぐか如し。運搬交通の具盛なるに従て稍、都鄙の別少なくなりしと雖も、出來得べき限り都會に集らんとするの傾向あるは他の社會的組織の發達せるものありて生産に重大なる影響を及ぼすか故なり。即ち貨幣信用の諸制度、消費者、需用者を容易に見出し得るの事情是れなり。チエーノン(V. Thünen)は孤立國を想像してそれに於ける農業(廣義)の生産の模様を説明せり、是によれば其都府を消費の中心として五の同心圓を畫き、都府に近きに從ひ、野菜、牛乳、穀類、林業、及牧畜の順序に發達すべしと云へり。是大に理由あるものにして、都府の近傍に於て、土地が比



較的に高價を有する所以は畠より生ずる野菜貴く而て野菜類は消費の迅速なるを必要とすればなり。只孤立國ならざる現今の國民經濟に於ては外國貿易氣候地味其他の理由により完全に上の順序に従はざるとあるのみ。

チューチンの孤立國に於ける土地産業發達の狀態を顯はしたる圖



(二)生産を補助する一のカとしての土地を論ず

土地の力は種々あり其の價値も之によりて定まり生産の事業も之に適應したるもの發生す。土地の消耗されたる部分は始と資本勞働を用ゆることなくして回復せらるゝもの例へは温泉沼澤の自ら源泉を噴出し又は草木の繁盛を助くるもの

るか如き或は其消耗は人が並に自然力によりて供給せらるゝもの例へは通常耕作物の目的となれる土地の如し。自然力のみにて供給さるゝもの即ち鑛泉の如きは是所謂天祐に出るものにして自由競争を容るゝの餘地なし従て獨占價格(Onopol price)を有す。然れとも通常農作に用ひらるゝ田地の如きは多くは資本勞働によりて使用より生したる欠損を補ふとを得るが故に自由競争が行はれ其の價格も之によりて定まる故に土地の自然力及人力(勞働資本)に對する關係は經濟上重大なるものなり。然れとも現今に於ては此關係以外に土地と社會の發達との大關係あるとを忘るゝからず。例へは交通機關の中心又は其の近傍は土地の價は比較的高直を有すると明なるか如し。斯る場合に於ては所有者は何等の勞力をも施さず全く社會全體の力によるものなるが故に所有者は之れより得る取得を社會に分配して可なり。是れ現今財政上に於て改良稅(Betterment tax)ある所以なり。又土地の生産力は自然力によりても亦人力によりても補償せられざるとあり例へは鑛山の如き是なり。斯る土地に於ては其の事業の發達は社會に於ての需用の發生するによる。要するに斯る土地は或制限の下に自由に生産を爲

すを得へき力あるものなり。

### (三) 地力遞減法

此の法則は土地の生産力に關する重大の法則として唱導せらるゝものにして、土地は如何る資本と勞力とを増加するも一定の限界以外に於ては収益は之に伴はずとの法則なり。例へば資本及勞力を増加するに當て一定の度までは其増加に比例して収益増加すと雖も、其後に於ては例へば三倍の生産費の増加によりて僅かに二倍の収益を生ずるか如き是なり。此法則の確實なるとは實際の經驗によりて疑なきと明かなり。然れども此法則は獨り土地のみに行はるゝものなりと信する能はず。何となれば機械と雖も或程度の馬力のものには自ら資本勞働を適用し、増加し得へき範圍ありて存す、其以外に増加せんと欲せば機械其者を變更せざるへからず。即ち一定の機械の生産力は一定の限界外に於ては収益は遞減するなり。故に論理上に於ては収益遞減の法則を以て只に土地に限るへからずと雖も、資本及勞力は土地に比して其の増加を容易にし得へく、即ち機械は一定の馬力のものに於ては前説の如く収益遞減法行はるゝと雖も、機械其の者を變更し

て其の馬力を増加し得るか故に人の欲する儘に収益を増加するを得るも、土地は其の増加の出來ざるが故に収益遞減の結果顯はるゝなり。故に此土地収益遞減法は理論上の名稱に非ずして、實際上の名稱と見るを可とす。即ち此の法則を以て土地の自然的制限より生ずるの結果なりと論ずるを可と信す。

## 第二款 資本

第一、資本の意義に付ても亦貨物、生産等の意義に於ける如く學說紛々たり。即ち資本を定義して、有形無形の貨物にして生産を補助するものを云ふ、セイ之に屬す。或は資本は外界の貨物にして生産を補助するものなりと云ふ、セフレワークナリ等之に屬す。我等の説によれば資本は生産貯蓄の結果にして生産を補助するものなりとす、今之を分拆して説明せば

### (一) 資本は生産貯蓄の結果なり

貨物は自然に存するとあり或は生産の結果によりて生ずるあり。自然に存する貨物の生産を裨補すると既に説けり、然れども其自然に存する貨物は、余は之を自然又は自然力と稱す、土地、水力等の如きは之に屬す。故に資本とは是等のものを

除き生産の結果たる貨物を云ふなり。

(二) 外界の貨物たるを

余の考によれば所謂内界の貨物と稱せらるゝ、体力、智識の如きは之を貨物と見ざるが故に當然資本ならざると明なり。

第二 資本と土地との區別

土地も生産を補助するものなるに何故に土地と資本とを區別するやは下の諸點より來るなり

- (一) 成立の點に於て異なる 資本は生産の結果なるも土地は自然に存す。
- (二) 土地は増加し得へからざるも資本は時を経るに従て増加するを得。
- (三) 土地の生産力は永久不變と云ふも可なり、之に反し他の資本たる貨物は一時に消耗するあり、或は然らざるも尙餘り長からざる時に於て毀滅するを免れず。例へば石油、石炭の如きは直ちに其形を失ふと雖も、機械は長時間存在して漸く破損するに至るなり。
- (四) 土地は自由に之を動すへからず、他の貨物は動すとを得 建物の如きは不動

産と稱するも、是法律上又は慣習上の名稱に過ぎずして絶対に動し得ざるに非ず、只一時人の意思によりて動かさざるに過ぎざるのみ。

(五) 土地と他の資本たる貨物とは用法及其結果に於て異なる。

- (イ) 土地は一定の方向に用ひられ其用途少し、之に反して資本たる貨物は其用途甚た多し。

- (ロ) 經濟上の結果及取得の點に於て異なる、土地は獨占行はれ販賣の安全なること、地主の地位の安固なること、之に反して他は所有者の地位に變更し易く販賣の景况不定なること。

- (ハ) 社會的階級の發生、都鄙、地主、小作人、市民及農民の生ずるか如し。

第三 貨幣と資本

貨幣は交易を容易にする一の貨物なるか故に之れが一の資本たるとは明なり。通稱に於ては資本は貨幣なりと觀られ資本即ち貨幣、貨幣即ち資本なりとせられる。而して種子、肥料、器具、機械等は却て資本とせられざるの觀ありと雖も、是等は眞の資本にして、貨幣か資本なりと稱せらるゝは種子、肥料、機械等を貨幣に見積り

て其の資本の大小を比較するが故に貨幣と資本とを全く同一視するに至れるなり。抑も企業家か一定の貨物を用ゆるに當ては之に用ゆべき原料品又は器具機械等種々あり而して此等は需用供給の關係によりて高低を生ずると甚だ多し。蓋し一方より見れば貨幣を有すると恰も眞正の資本たる生産用貨物を有すると均し、故に貨幣を以て資本と稱するに至るなり。

#### 第四 資本の經濟上に於ける地位

生産は必ずしも資本を必要とせず、人口稀薄にして土地饒多なる場合例へば古代に於ては人は只天然に存するものを拾集して直に之を消費したり、然れとも人口増加し欲望も亦進むに従ひ漸々器具を發明して手足に代へ、以て生産の効果を増し、後益進て諸種の機械の發明さるゝに至れり。即ち現今に於ては資本なき生産は殆ど之れを見るところを得ざるなり。それ資本は貯蓄の結果にして貯蓄には國家社會の安寧秩序を必要とするが故に、資本の増加及び發生は文明の發達を前提とするものなり。其の資本の生産に及ぼす影響は概言せば生産力を増加するに歸するなり。詳言せば、

#### (甲) 自由に生産を爲し得べきと

資本の數多きときは諸種の方面に利用さるゝとを得るか故に、經濟の發達に従ひて生産の方向を定むるを得。例へば材木を以て橋を作り、或は家屋を作り以て最も強き需用に應ずるとを得。

#### (乙) 生産の結果を増大し且完全にするとを得

始め手足のみを以て生産をなしたるときは其の生産の結果は甚だ少く、漸く日常の生計を維持するに過ぎざりしか、資本の利用さるゝに至りて只に現在の慾望を満足して餘りあるのみならず、之を貯蓄して將來の需用に應ずることを得。是に於てか器具より機械に進み、益、生産の増加を來し、而して其生産は益、完備するに至るなり。殊に貨物の保存は資本の増加となり、消費物の充分なる供給を確實にするか故に經濟上最も重要なものにして、其保存の方法となるものは倉庫の如き、其他一般の防備、防寒の具の如き資本是なり。我國に於ても倉庫事業未だ發達せず、開港場の設備充分ならざるか如きは資本缺乏を證して餘りあると同時に之か爲に資本の増殖力を減少するの不幸に陥るものと云ふべし。

資本を其の生産との關係より觀察すれば、之を左の如く區別するとを得へし。

- (イ) 原料品 石炭、毛皮類
- (ロ) 生産用具 器具、機械
- (ハ) 生産の設備 工場、倉庫等
- (ニ) 交通の設備 軌道、鐵道、船舶等
- (ホ) 土地に施したる改良 灌漑の類
- (ヘ) 消費物 衣食
- (ト) 通貨及其代用物 貨幣、紙幣及信用證券

又使用の目的より分ちて流動資本、固定資本の二とす。固定資本とは機械の如く一定の目的の爲に使用せられ容易に其の用法を變せざるものを云ふ。流動資本とは自由に交易の目的となり其の用ひらるゝ期間甚だ短きものを云ふ。通常資本家は其の一部を以て、家屋、工場及大機械を据付け其事業の目的より云へば毫も之を變せざるなり。又他の一部は之を金錢の形に於て有し以て勞働を維持し、又原料品等の購入費に充つるか如し。

貨幣は通常資本を顯はすとは既に説けるか如し。而して此資本たる貨幣か如何の割合に如何の方法に投下さるゝかは經濟上重要な問題にして資本となり得べき貨物の數量、性質、將來に對する利益の希望が影響するなり。

資本の投下に於て最も注意すべき點は流動資本と固定資本との比例にして殊に流動資本を固定資本に轉する場合なりとす。事業が益、繁盛となるに従て機械類の使用行はるゝの傾ありと雖も、餘り資本を固定し過くるときは恰も機械ありて油なきか如く、勞働者の維持、原料品の購求に不便を生ずると同時に事業の景況に應じて資本増減の難きより不測の結果を生ずるとなしとせず。尙注意すべきは生産的貨物及生活用品を製造する場合なり、生活用品は直接に消費の目的となるも生産に資する點に於ては間接なればなり。

資本の成立及消費 資本の成立の必要なるとは(一) 缺損せる資本を補ふ爲め(二) 人口に比例して生産を増加すべきこと(三) 以て國民經濟發達の基礎を造るとの理由に基くなり。資本の缺損は戦争、火災、風水害の如き人為又は自然の外部影響と同時に生産を補助する爲にする消耗によりて生ずるなり。生産増加の必要は只に

人口の増加に伴ふべきのみならず尙一國、一國家の爲に其生存維持の必要上より来るなり。即ち資本を生ずる方法に現存の資本を利用するにによりて生し、其の程度は資本の種類、數量によりて定まるなり。

現今の貨物にして資本として用ひらるゝに當て貨物を生し得べき範圍は自ら限あり。例へば土地産業(Landwirtschaft)の資本は人類の生計必要品の製造に用ひられ、又鑛山用のものは生産的貨物の製造に、又生産的貨物と共に生計用品を製するに足るあり、例へば原料品の如きは是なり。是等の存在の比例に應じて一社會の經濟の大勢定まる。殊に外國貿易行はるゝ場合に於ては各國其最も長する所によりて、經濟をなすとを得るが故に尙此現象生ずるなり。

以上述べたる資本の種類中生産的貨物を造るに足ると又生活用品をも製造するに足る性質を有する貨物に於ては、之を以て生産用品を製造すべき様に定む可きか又は生活用品即ち消費貨物を造るに用ゆべきかは經濟上注意すべき所にし、て、一概に之を論斷するを得ずと雖も、一定の生産を維持し得るの消費的貨物存する以上は之を生産的貨物の製造に用ゆるを可とす。然れども實際に於ては資本

及び消費物に關する需用供給の狀態によりて資本家又は企業家か其方針を定むるなり。

資本の増加は貯蓄によりて行はる。貯蓄とは現在の慾望を制して未來のそれを充さんとするの行爲なり。貯蓄の素因としては古來學者か貯蓄の意思及將來の希望の二者を主張せり。余は之を詳説して、

- (イ) 現在の慾望と、將來の希望との比較  
 (ロ) 將來に於ける所得の増加即ち所得の確實にして有利なる事  
 (ハ) 貯蓄に便利なると、貯蓄銀行其他一般の銀行及郵便貯金、社會の公安  
 茲に注意すべきは貯蓄其ものは必ずしも資本を増加せざるとなり。貨物は靜的狀態に於ては資本となるや、或は間接に生産を助くるや、或は浪費さるゝや不明なり。

資本とは生産の用に供せられたる貨物の總稱にして、貨物の動的狀態なり。例へば或人か器具、機械又は貨幣を土中に埋藏したりとせよ。之は經濟上より觀察すれば恰も全く存在せざる者に均しく何の效用をも之によりて生せざるべし。故

に貯蓄されたる貨物が銀行に於て使用され又は工場に於て使用さるに至るときは其の貨物は資本の状態に於て存するものなるか故に是に於てか資本増加したりと云ふことを得るなり。學者或は貯蓄と貯蔵とを區別して貨物を地下に保存する如きを貯蔵と云ひ銀行に貨幣を預る如きを貯蓄と云ふ。然れども余は貯蓄なる文字を廣義に用ひて此の二者を含蓄せしむ。是只用語の差異にして貯蔵的行爲の資本増加せざることを主張するに至ては一なり。

貯蓄は經濟上に最も緊要なる行爲にして貯蓄なければ資本なし、資本なければ經濟なし。我國に於て資本缺乏の歎は夙に世に唱へられ或一派の論者は外資輸入を以て其缺乏を補はんとす。然れども貯蓄心の基礎なきに外資を輸入するも只一時經濟社會を刺撃するに過ぎざると恰も興奮劑を飲用して後却て神經の緩慢なるに至ると同むからんなり。然れども貯蓄心の養成は容易ならず、宗教、道徳、風俗に影響すると大なるべし。嘗て東京大學に於て經濟學教授たりしフナクスウエル氏は貯蓄を發達せしむるの方法として陳べたるとあり。其一二を擧ぐれば、

一、室外の運動獎勵

## 二、共濟建築會(Building Society)

是なり。

室外の遊戯は室内の遊戯よりも費用少く青年は室外の遊戯を專一にせは殆ど金銭を浪費するの機會なし、是節儉なり。

共濟建築會と稱するものは其會に於て労働者等の住居す可き家屋を建築し労働者をして之に住せしめ同時に家屋の建築費及利息を年賦に拂出さしめ後には其家屋は全く労働者の所有となるに至る仕組なり。故に労働者は晩酌の一盃を減して一家の所有主となるに至るなり。是即ち貯蓄に依て資本を得る方法なり。

## 第三款 労働

第一労働 労働とは一定の目的の爲にする人間の行爲なり。

(イ) 労働は人の精神上及肉體上の行爲なり

精神上的の行爲とは事物の理を發明する行爲、事物を其宜に従て管理する行爲の如きは是なり、肉體上の行爲とは職工雇人の労働の如きは是なり。

(ロ) 労働は或目的の爲にする行爲なり

人の日常の生活の爲にする貨物の消費の如きは一種の勞働たるに相違なきも、經濟上の一の現象として觀察するときは之を勞働と云はすして單に消費と稱するなり。消費は目的にして勞働は其手段なり。勞働は或目的の爲にする人の特別の意思に基くものを云ふ。生理學上に於ける筋の運動、血液の循環の如きは經濟上の意義に於る勞働に非ると勿論なり。

勞働にして社會的關係より生ずるものを勤勞と云ふ。例へば被雇人の雇主に對する勞働の如きは是なり。

勞働力とは新なる勞働を發生せしめ得る力を云ふ。

人は其生活を維持する爲に必ずや多少の勞働をなすを要す。就中人は其社會上の地位を高むべきか爲に只に日常の生活を維持するに足るのみならず尙將來に於る餘裕の爲に働かざるべからず。其結果勞働が精神上、肉體上に危害を及ぼすの限界に達するとあり。此限界に近くに從て人は益勞働の苦痛を感じるに至るなり。此限界に達するの範圍廣き人は勞働力の強きものにして勞働の價值之に由て生ずるなり。

## 第二 勞働の種類

勞働の種類は種々の觀察點によりて異なる。ヨッセル氏は勞働の行はるゝ形式に從て五種に分てり、曰く發明及發見、曰く原始産業、曰く製造業、曰く分配的行爲、(國際商業又は國內の大小商業、曰く勤勞是なり。或は勞働の生ずる原因によりて之を自由勞働及強制勞働の二に區別するとを得へし。又之を社會的方面より觀察して企業家、資本家の勞働及所謂下層の勞働者の勞働の二に區別するとを得。此區別は現今及將來に於る問題に關係するものにして社會問題解釋の標準なり且材料たるものなり。フイリッポビヒ氏は勞働を生産の方面より區別して三とす。

(甲) 生産に關する企圖

(乙) 指導的技術 (Leitende technische Arbeit)

(丙) 實行々爲

是なり。

甲は生産の全般に關する計畫なるか故に科學技術に通曉すると同時に經濟社會の全軀を知了するの能力あるを要す。例へば建築の設計者の勞働の如きは是なり。



乙は甲と似て非なるものなり、乙なる行爲は甲なる一般企劃の範圍内に於て各個の勞働の間に相互の關係を付する行爲にして大工の棟梁の行爲の如き是なり。丙は全く技術上の行爲にして手足の勞働其多きを占む。此區別の如きも甲乙丙の間に劃然たる限界存するに非ずして大體の標準に従ふのみ。甲乙の二者は重に精神上の勞働なり。丙も全く精神上の行爲なきに非ずと雖も種々制限されたる範圍に於て行働するか故に殆ど其間に取捨の餘地なきなり。從て是等の行爲は速に熟練習得し易く何人も之に従事すると容易なり。是れ此等の勞働者の數を増加し其供給充分なるに至る所以なり。之に反して甲乙の勞働をなす者は習得に困難なるか故に其供給少く競争者僅少なるか上に事業の範圍と種類の決定とは一に此等の上等の勞働者の頭腦に存するか故に一般勞働者と企業家資本家の二大階級を生ずるに至れり。抑も資本未だ増殖せざるの時に於ては人各資本の貴重なるを知り他を顧るの遑なく、人は經濟の主體に非ずして寧ろ經濟の手段として觀察せられたり、資本家主義とは是なり。後資本充實するに到るや社會の不平等は講者の注意する所となり、貧富の懸隔分配の不

平均は經濟社會全體の損害なりとの觀念生ずるに至れり、是即ち社會主義なり。極端なる社會主義を調和せんとて起りたるもの即ち講壇社會主義にしてヒスマルクの稱逸に於ける勞働者保護政策共に益其勢力を増長するに至れり。精神上の勞働及技術上の勞働は教育されたと否とによりて生ずる勞働の區別と見るとを得るなり。若し機械の發達其他の發明發見等により益、精神上の働が勞働の大部分を占むるに至るときは教育の必要を生し、而して教育充分に行はるゝに至れば資本家又は企業家も勞働者を自由に取捨するを得ざるに至るを以て自ら勞働者の地位も高まるに至るなり。只如何にせば教育を普及するを得、又高尚に進ましむるを得るか、は經濟上社會上有用の問題にして其利益は無形なりと雖も海陸の軍備よりも外資輸入よりも遙に緊要にして且有利なりとす。或學者は勞働を分て生産的勞働、不生産的勞働となせり。生産的勞働とは有形の貨物を生産する勞働を云ひ、不生産的勞働とは然らざるものを云ふ。例へば醫師、辯護士の勞働、陸海軍の行働是なり。然れとも生産は只に有形物の價值を増加するに止らざると前に述べたる如し。故に貨物を浪費する場合の外、悉く之を生産的行爲と云

ふとを得へし。所謂不生産的労働たる軍人の労働は直接には貨物生産には關係せず否却て貨物を消盡するの觀ありと雖も、軍備ありて經濟社會の安寧と幸福とを維持せらるゝか故に少くとも間接に生産に與て力あると勿論なり。

### 第三 労働と労働力、労働時間及労働との關係

労働の増加は貨物を増加するとを得、貨物の増加は労働力、労働時間及労働と關係す。労働力は老幼男女の別、教育の有無、健康の如何、社會の狀態、國民の性情によりて異なる。労働に關する氣力に於ては英人勝れ、労働の智識は獨人勝れ、労働に對する嗜味は佛人能く之を解し千辛萬苦を敢てするものは支那人なり。又社會上榮譽とせらるゝ職業は労働力多し。労働時間長くして労働少きは労働者に取りて不利益なると勿論なるか、企業家には利益なりや。一見すれば其然るを見ると實際に於て然らず、英人は賃銀貴しと雖も其労働の效果大なるか故に得失相償ふに足る、是れ只に英人の特性に原因するに非ずして時間を減し労働を高くしたるに依る。何となれば労働時間を短くすれば精神及肉體をして活潑ならしむるか故に各時間に於て人の活動する度合多ければなり。労働を高くすれば生計を高

むるを得るか故に労働の効驗を多くす、機械に關する智識の増加の如き是なり。

此實例は十九世紀初頭に於ける英國工場法の結果及瑞西獨逸に於て著く顯はれ、企業家又は資本家の是認する所となれり。然らば時間を減少し又は労働を増加するに正比例して労働の効驗増加するや、曰く否、労働者の道德、教育の振はさるに從ひ労働を増加するも益なくして害あるのみならず、徒に時間を減するも亦何の益なし。要するに時間の減少及労働の増加によりて人の肉體及精神上の活動の増加と時間の減少、労働の増加によりて失ふ所との差が最も生産に利益ある點に於て限らるゝなり。

### 第四 労働の分量及需用

労働の分量は人口、法制及社會的組織の三に關係す。

人口の増加は労働の増加を生ずると勿論なりと雖も、各人盡く労働をなし得る者に非ず。老衰者及幼兒の労働は皆無なるか故に一經濟社會の労働の分量に關して毫も影響する所なし。男女の區別によりても労働力に差あると既に説きたる如くなれば労働の分量も自ら其比例によりて異なる。

法制の結果として生ずる幼者及び婦女に對する勞働の制限は分量をして少からしむ。

社會の組織に於て軍備上勞力を多く用ゆると自ら爲すなくして只資本に衣食するものの多きと否と、又は小企業、大企業の差、手工業、機械業の別は一經濟社會に於ける勞働の多少に影響するものなり。新に開けたる殖民地の如きに於ては壯年の男女殊に男子の數多きか故に人口の數に比して舊國よりも勞働の分量多し。勞働の使用さるゝ條件は生産要素中他の二要素たる土地、資本の分量及種類に係するなり。何となれば現今の生産は常に此三者の合力を待つものにして其の比例宜きを得たる時が最も生産の効力顯著なるときなりとす。然れども土地及資本は其の用途種々なるか故に勞働の使用さるゝ條件は亦土地資本の用ひらるる状態によりて異ると云はざる可からず。

今土地に就て之を論すれば一定の土地の面積は其用途の何たるに關せず多少の勞働を要求すると同時に其耕耘に用ひらるゝと鑛業に用ひらると、將た林業に用らるゝとに依りて異なれり。

資本に於ても然り、資本は土地よりも尚ほ用途多く最も勞働者を多く使用して生し得へき貨物に對する需用増加するに於ては資本は其方向に用ひられ勞働の需用の増加を來す。又一般に資本に對する需用増加するに至れば貯蓄其他生産的貨物の増加となり延て勞働益、需用せらるゝに至る。就中土地は限りありと雖も資本は無限(比較的)なり、故に勞働の需用は資本の増加と密接の關係あるものなり。然れども各勞働に對する需用を考ふれば必ずしも資本の増加に正比例するものに非ずして勞働の使用さるゝ度数の頻繁なると否とに關係す。例へば一人にて一日十六時間の勞働を爲したるも法律の規定其他にて勞働時間制限され八時間間の勞働となりたるときは二人の勞働者を必要とするか如し。

第五 勞働の經濟上特に生産上に於る地位『勞働は資本及土地の如き無意の物體を生産なる有意の状態に結合する人類の行爲にして生産上最も緊切なると明かなり。此故に其行はるゝ形式、其依て顯はるゝ原因の如何は只に生産上のみならず國民全般に影響を及ぼす者なり。顧みれば勞働は始め束縛に起り一轉して半自由となり、再轉して現今の自由主義となれり。之を具體的に云へば奴隸制度

に始まり中ころ團體制度となり後契約自由制の今日に至れり。

夫れ人の行爲は意思の發動なり。行爲の活潑なると精密なると否とは意思の然ると否とに存ず。働かんと欲せざるに働かしめんとするも其實益なきは明なり。然れとも經濟進まず慾望少かりし時に於ては奴隸制度を以て正當と考へたり。何となれば戦勝者は戦敗者を生殺するは自由なり、故に殺さんより生かして奴隸とするか如きは戦争の殘忍酷薄を避くるを得ると同時に經濟上利益なればなり。是一部の眞理のみ、其遂に廢せられしや當然なり。中世に及ては團體の勢力盛にして各種の團體は各自治權を有し一國は皆數小邦に分れたるの觀あり、否一國は各種職業の團體の集合にして例へば主權者の命令と雖とも之を裁判所の帳簿に記入せされは人民に向て羈束力を有せざるか如し。職業團體に於ても斯の如く或一定の職を得んと欲せば必ず此團體に加盟せざるへからず。團體に加盟したる者は其の團體の規約條規に従ふべきと勿論なり。故に時の如何、技能の如何によりて容易に他に職業を求むるを得ざるは勿論現今に於ても米國に於て職業を變更するによりて大に其の地位を高むるを得たるの實例ありしを除き、他國

に於ては殆んど實行し難しと雖も尙ほ職業を變更するの自由は存するなり。佛蘭西革命は社會の羈絆を一掃して乾坤こゝに自由の新空氣充滿するに至り我も人なり、彼も亦人の子なり、能く遇すべきの感生するに至りしと雖も是れ只法制の結果自由なりと云ふのみにして尙ほ勞働者に取りては勞働は唯一の生計を維持すべき資料たるか故に一日も職なくしては生存するを得ず。之に加ふるに將來に對する豫見の才能なく職の有望なると否とを見るを得るか故に往々衣食に窮乏を致すを免れず。蓋し寶の山を見て之に入ることを得ざるとあればなり。是契約に於て富者の意思のまに／＼之に服従するの已むを得ざるに至る所以なり。富者は其資本を用ひんと欲すれば立どころに勞働を得、然らざるときは直に之れを捨つ、其の狀恰も生産の材料を撰擇するに均しく常に生産費の安からんとを是求むるなり。

是私經濟に於て必常顯はるべき現象たり。然れとも國民經濟と私經濟とは異なる。國民經濟は國民全般より觀察して全體に於ける生産力を増加せんとするにあり、故に現今の勞働者、資本家の關係は適當なるや、分配は正當なるやの問題を

生す。社會主義とは此點に關して勞働者の地位を高めんとするものなり。

## 第二章 生産の組織

### 第一節 企業の形式

#### 第一款 企業の意義及性質

經濟の幼稚なる時代には企業なる觀念を存せず、人は只偶然に時に觸れて天然力を取得したるに過ぎざりしに漸々一定の企畫の下に貨物を得るの考を生ずるに至り企業なる觀念發生し、企業家なる一種の經濟的階級現はる。十九世紀初頭より資本家は多く企業家たるか故に資本家と企業家との觀念は混同せられしと雖、將來に於ては實際上益々此區別判然せんとする傾向あるか上に二者其性質に於て明に異なる點あるか故に學理上資本家と企業家とを區別するを要す。

茲に注意すべきは企業家、資本家、勞働者の區別は常に各事業に於て分れて存在するものに非ると是なり。資本家と同時に企業家たるか如く勞働者か同時に企業家たるかあり。又資本家にして且勞働者なるかさへあり。大企業の場合に於ては自ら企業家、資本家、勞働者の明なる區別を見るも、小企業に於ては一人に

して企業家たり、資本家たり、又勞働者たるかあり。只最も多くの場合は資本家と企業家との合したる場合なるのみ。

夫れ人は各其長あり賢愚貧富の差は洋の東西に於て免れざるのみならず現今に至て益、此の差異現出す。而して富める者必ずしも賢ならず、貧者必ずしも愚ならず、否な富者は却て愚人にして、貧者は却て賢なるあり。故に資本を多く有するものは之を使用するに迂にして、賢なるもの貧なるものは其才能を施すに由なきと少しとせず。

抑も生産は只に技術上に於て成功するを要するのみならず尙ほ其生産の結果に於て價値の増加を必要とす。故に資本を如何の方法に適用すべきかは緊切の問題にして更に世界經濟の大勢を鑑み其需用の如何を知りて價値の増殖を期せざるへからず。是に於てか資本、勞働及び自然を適當に支配するの能力を要す。此支配管理の行爲を企業と云ひ之を爲すものを企業家と稱するなり。

是を以て企業家の職務は(一)現在及將來に於る貨物の需用、其の需用の範圍、強弱及其貨物の之れ等に應ずるの性質を識別透察するにあり。(二)自己の利益の爲に其

左右する各種の生産要素を最も有利に使用するにあり。資本家及び労働者は企業者に其資本及労働を委するか故に間接に事業の成否に對する危険を犯すと雖も企業家は直接の利害關係者なり。

企業か如何なる方法に行はるべきや、如何なる經濟組織の下に行はるべきやに付て古來經濟學者、宗教家等の議論あり。此點に關しては經濟學史の範圍に屬すべきものなりと雖も現今の企業が行はるゝ條件たる社會及び經濟の發達を馴致せる學理の略説を試むるも亦可ならんか。

### (一) 重商主義 (Das Merkantile System)

此主義は又コルベール主義 (Colbertismus) と稱せらる始めコルベールの政策によりて佛國に良果を生せしより諸國之に倣ふに至りたるを以て此名あり。此の學説又は之より生ずる政策は十六世紀に於て勢力を逞ふせしのみならず餘勢遠く十八世紀に及べり。此の派の特徴にして而も最も誤謬なりとして排斥せられたる點は其の貨幣を過重したる點にあり。蓋し貨幣は富其の物なりと考へしを以て輸入を少くして輸出を盛にせんとせり。今此の派の綱目を擧ぐれば (一) 金銀鑛

の採掘 (二) 生産力の増加是なり。生産力を増加せんと欲するより人口の繁榮を欲して婚姻及び殖民を貴重し又商業を保護して輸入品を減し、輸出を盛ならしむる爲に關稅を課し輸出獎勵金を與ふ、殊に精製品の輸入を杜絶せんとを務め粗製品を輸入して精製品を輸出せんとす。

故に此の政策の如き只金銀の輸入若くは集合を貴ひ金銀の産出以外に之に代るべき有利の事業ある場合に於ても尙ほ之を措て顧みざるか如き極端拜金宗の誤謬ありしと雖も大略の施設に於ては大に其の當を得たるものにして、現今世界の強國には再び此の重商主義に類するもの出現せり。學者之を稱して新重商主義 (Neomerkantile system) と云ふなり。露は金を蓄積したる事多しとの信用は之をして世界に誇らしめ、英は十萬の精兵を萬里雲烟の遠きを送り、長日月の間人命財産の損害を顧みざるものは南亞の金鑛にありとは既に識者の疑はざる所に非ずや。

### (二) 重農學派

此派の主張者は有名なるフランソア・ケチーなり。時は十八世紀にして其の主張は地力尊重主義なり。土地は凡ての富の本源にして土地の外には富なし。貨

物か人工及び資本を加へて價值を増加するは資本及び人工なる生産費用丈を増加したるのみにして其の以外に何の價值をも生ずるとなしと云ふなり。而して重農學派は重商學派の餘弊に反對して起りたるものにして重商主義によりて保護獎勵されたる商業は却て不結果に終りたるを以て寧ろ之れを放任して自由競争により真正の發達を見るべきものなりと論せり。

此派に誤謬多きとは地力の過重にあり、勞働と云ひ、資本と云ひ、皆な其の費したる以上の效果を生産上に現出せしめ得ると人の皆知る所なり。

(三) アダムスミスの産業主義 (Industriesystem)

是亦十八世紀に於ける議論なり。アダムスミスは勞働を以て人類幸福及富の本源なりとし分業の利を唱へ自由の交易によりて自ら勞働の結果平均を得るものなりと考へたり。而して國家は毫も事業を經營すべからず只其の可なる場合は公共の目的に關する場合に於て一私人の力能く爲す無き場合に限るとせり。

(四) 極端個人主義 (Der extremes Individualismus) 又は自由貿易主義

此派は又資本家主義とも稱せらる。スミス學派より胚胎し來りたる者にして其

の主張する所は一個人の完全なる自由なるを以てし、私人は各私所有權の上に於て自由に企業することを以て國家は私人の行動に少しも干渉すべからずと論せり。此派は自由貿易によりて人は各其の長により競争して働くか故に勞働の效驗増し勞働及び資本等生産に干與するもの、間に適當なる分配行はるゝものと信せり。

然れとも現今此の自由主義の結果として顯はる所のものを觀察せば大に反對の結果の生ずるを見るなり。勿論自由競争なるものは良好の結果を呈し得べく又免るべからざるの數あり。然れとも自由競争は各人同し條件の下にある場合に於て眞の自由競争なるものあるなり。若し社會が甲に鈍刀を貸し乙に鋭刀を授けて以て二人の競争をなさしむることあらば之を自由競争と云ふを得べきや。現今社會の組織に於ては往々之れに類するものあり、表面は自由競争なりと雖も其の實は不自由競争なりと云はざるべからず。是れ豈に讀者の考慮を要する所にあらずや。

(五) 保護主義 (Protektionssystem)

政主義は外國の競争を關稅に依て防禦し以て國內の事業を發達せしめんとするにあり。

(イ) 彼の重商主義も此派に屬すると前に述べたる如し。  
(ロ) フリードリッヒリストも亦關稅政策を以て國內の事業の育成手段と考へたり。而して曰く「商工業には最も此の關稅保護主義を必要とし、土地産業には必要なし」と。其の理由とする所を見るに、商工業は精製品に關する製造商業本なるか故に外國の製品の輸入容易なりと雖も農産物は價値に比して運搬費大なるか故に外國より競争せんとするも難きか故なり。  
故に現今に於ては多少各國其の長によりて分業行はるゝと雖も戦争の如き交易を妨害するの事實存するか故に國家必須の事物例へは其人民の衣食に必要なるものゝ如き其未だ發達せざる産業は各國皆保護政策を取るの傾向を生ぜり。只如何なる程度まで保護すへまやは爲政家の最大の注意を要する所にして一概に論定するとを得ざるなり。蓋し保護に過ぐれば全部の犠牲を以て、一部の利を計るに歸すればなり。

#### (六) 保守的社會主義 (Die Konservativs Socialpolitik)

此派は社會の改造論者の一たりと雖も各階級に屬するものゝ一部の言にして農民黨若くは農民主義 (Agrarion) の如きは土地産業の利害を代表するものにして租稅及び經濟組織を改革せんとするものなり。又彼の土地改革派 (Boden Reformers) の如きは土地は悉く國家の所有とすへしとの論あり。

#### (七) 社會主義

此派は是迄行はれたる資本家主義による經濟組織を廢して生産の補助たるへき土地資本を共有にせんとする者なり。故に之を集合主義 (Kollektivismus) とも稱す。尙ほ極端の論者は各人皆悉く平等なるへく各人の安寧幸福は勞働と正比例すへしと主張するものなり。従て勞働によらずして地代利子に衣食するとなからしめ各人の得る所は悉く各自の勞働より出てさるへからすとせり。サンシモンの如きは相續法の改正を主張しフリーソエーの如きは共同生産及び共同家政の利を主張す。フェルチナンドラサレは國家の補助を以て生産組合を組織し一般選舉權を認むへしと論せり。



社會主義の極端に過るとは前に畧述せるか如し。然れども社會主義は資本家主義に反對して起りたるものにして現今の社會は多くは此の資本家主義によりて組織さるゝなり。

故に各種の法制を新に制定するに於ても其の真正の自由競争行はるゝことを注意せざるへからざるなり。抑も社會の狀態及び人情の變遷は先づ形式に始まり後漸く實質の之に伴ふもの多し、是れ善事に非ず必ずしも喜ふへきに非らず、願ふ所は名實共に存するにあり。若し行はれずんば事ゝ實の存せんこそ願はしけれ。方今我國の發達は非常なりと云ふも尙形式の進みたるに過ぎず、實質は遂に後にあり。法律は完成したりと云ふへきも、經濟は然らず。法律の制定には經濟の觀念甚た少く何如なる經濟的方針によりて分配、生産の正當を期すへきやの問題は未だ決定せられたりと云ふを得ず。法制は社會經濟組織の大本を爲すへきものたるに勿論なるか故に此の經濟上の將來に於ける問題か速かなる解答を得て法制の上に顯はれんと余輩の切望して已まざる所なり。

以下現在の經濟的組織に於ける企業形式種別等を略説すへし。

#### (甲) 個人的企業 (Einzelunternehmungen)

此企業は一個の企業者の經營する事業を云ふ、故に此の場合に於て事業より生ずる危険は一に此企業者一人に歸するなり。此故に企業者たる者は精密なる注意周到の考慮を要する者なり。抑も貨物の販賣需要の増減に應ずるの態度は極めて迅速なるを要するか故に機敏なる行動は此一人の頭腦によりて速に實行さるゝ事を得るなり、是れ個人企業の長所なり。其の短とする所は充分の資本勞働を支配するとを得ざるか故に需要供給に緩急相應するを得ざる點にあり。

此場合に於て企業者勞働者間の關係は企業者の道德心に存するゝと多く或は慘酷なる待遇をなし或は之に反する者ありと雖も多くは其の間に親密なる關係あり。何となれば勞働者は年月を經るに従て雇主たる企業者となることを得る希望あるを以てなり。之に反して團體的企業にありては勞働者と企業家とは自ら別の階級に屬するが故に其間の關係に付諸種の困難なる問題生ずるなり。前者に於ては企業者と勞働者との關係は程度の差にして後者に於ては性質の差異ありと

云ふとを得へし。

(乙) 團体的企業 (Gesellschaftliche Unternehmen)

團体的企業は現今益行はるゝ形勢ありとす。此企業は個人企業の反對の場合にして數人の集合より生ずる企業を云ふなり。故に危險及び利害の負擔者は數人に存するなり。此の企業の形式は各國の法制如何に依る。此等に関する法制は經濟上最も重要なものにして法律問題としては商法民法の關係すること勿論にして余か本論の範圍に非ず故に余は經濟上より觀察して其の經濟的方面を略述するに止めんとす。

團体的企業は左の三の場合の一なること疑ふべからず

- (イ) 勞働力の集合
- (ロ) 財産の集合

(ハ) 前二者の永久(比較的)若くは一時の集合

此の場合の如何によりて此等の企業が濶種に區別さるゝなり。之を大別せば  
(イ) 會社  
(ロ) 組合  
是なり。

是なり。

會社は法律上之を一の人格として認めたるものにして組合は數多の個人の集合なり。會社は社員と獨立したる一の人格を有す。組合は契約の一種なり(民法六六七條)。會社には合名會社、合資會社、株式合資會社、株式會社の四あり。商法は其種類を限定せり。組合にはシンヂケート、生産組合、消費組合等其の數甚だ多し。後段詳説する所あるべし。

團体的企業の利益を概論せば、散在せる力を合して(資本及勞働)其の各力より生ずる效果の總計以上の效果を得んことにして、而して各種の力は相待て生産に寄與するを得るとにあり。例へば大資本と大勞働とに依りてスエズ運河の開かれたるか如き、機車、汽船の運搬力の増加の如き、其の例枚舉に遑あらず。而して特に經濟上に關係大なる點は、其の生産の結果の分配にあり。

第二款 會社を論ず

合名會社

合名會社は社員の責任無限なるものにして(商三法第六)。社員の退社は我商法の認むる所なりと雖とも尙甚だ諸種の制限あり(商三法第六十)。

故に第三者に取りては甚た信用すへきものにして取引上大に好地位を占むるものなり。斯る會社は社員間の同情あるとを要するが故に多數の資本主を集むること難く従て大資本を得るに困難なり。

#### 合資會社

合資會社は有限責任社員と無限責任社員とより成る。有限責任社員は其出資額に止ると勿論にして無限責任社員は會社の代表者なり業務執行者なり。此會社は資本家か特殊の技能あるものを信用して其の事業に資本を貸與するの實益の爲に設けられたる制度なり。故に有限責任社員は其の行儀に於て羈束さるゝこと甚た少し(商三法第六十)。此組織は一方に合名會社に於ける如く第三者の信用を確保し一方に於ては資本の大なるとを期するを得るなり。然れとも其の短所と長所と共に存し一方に於ては充分に信を繋ぐに足らず又一方に於ては資本を大にすること株式會社に如かず。

#### 株式合資會社

株式合資會社は株式會社と合資會社の折衷にして合資會社に於ける有限責任社員の出資を株に分割したると同じく無限責任社員と有限責任たる株主との二種の社員存するなり。

#### 株式會社

現今に於ては株式會社は最も盛に組織さるゝものにして經濟上重要なる地位を占むるものなり。其の然る所以のものは

- 一、大資本を集むるの容易なると
- 二、企業者の有限責任なると
- 三、企業者は投下したる資本より容易に離るゝとを得

(一) 新に事業を起さんとするに當て果して其事業の有利なるや有望なるやは企業者の知らんと欲して能はざる所なり否假令其の事業は有利有望なりと鑑識するを得るも其事業の經營如何によりて不測の結果を生ずることなきに非らず。故に大資本家ありと雖も容易に之れを一定の事業に投下する能はず。然るに多く

の場合に於ては大事業の利あるに拘らず大資本を集むるとを得ざるは國民經濟上最も悲むべき所なりとす。株式會社は一定の資本を數株に分ち各人は各其欲する程度に於て其事業の經營に與ることを得るか故に各人は競つて之れに投資するに至る。是に於てか大資本を集積するとを得るなり。

(二)株主の責任は合名會社、合資會社の無限責任社員と異り事業の失敗より生ずる責任は株券額に限り其他に何の責任もなし。是れ株主の責任を薄ふして新事業經營の危險を減するの更方便なり。

(三)資本は其の用途の多からんとを貴ふ故に金錢の形に於て資本を有するときには必要に應じて用途を定むることを得て輕便極れりとは前に述べたる所なり。然れとも通常一度之を投下せば又如何ともする能はず後悔するも陸なきに至ること往々是あり。然るに株券の賣買は自由なるを原則とするか故に一旦投下したる後と雖も尙ほ毫も特別の損害なくして其資本と離るゝことを得るなり、利ありと信すれば則ち就き然らされは則ち去る。其容易なること株式取引所に於ける株式の賣買を見て知るべし。

以上は只株式會社に關する三要點を概説せしのみ尙ほ少しく詳論を要する點あり。

夫れ株の大小は經濟上重要な事項にして事業の性質經濟社會の状態によりて之を定むべし。株小なれば必ずしも富者ならずと雖も尙ほ之に應ずるとを得故に資本を集むると容易にして株主の數も勿論多し。而して株小なれば株主の責任も小にして資本亡失の危險も亦少し。故に大資本家は一の事業に向て其資本の全部を費すの危險を避けて之れを數種の事業に投下するときには資本亡失の危險甚た減少す。何となれば一事業は如何に盛況を呈するか如きも天事人事の損害によりて沈衰するとなきを保せず故に富者は其資本を諸種の事業に投下せば假令一部の損失ありと雖も全體に於て尙ほ堅固なる收入に安んずるとを得るなり。大資本成立せば其信用は到底個人的企業の及ぶ所に非らず而して信用を利用するとの經濟上有用にして莫大の利益あると多言を要せざるなり。

株式會社に於ては他の合名、合資會社に於ける如く株主相互間の關係密ならさるか故に株主は自由に出沒して止まざるに獨り資本は依然として其行働を持續す

るが故に合名合資會社等を人的會社と稱し、株式會社を以て物的會社と稱するものあり、人と無關係の委められはなり。株式會社は收益遞増法(Law of increasing return)行はるゝ事業の爲めに設立するに適す。換言せば大資本を用ゆるを得べく又用ゆるの利ある事業の經營の爲に設立すると可とす。抑も土地には收益遞減法行はれて資本勞働の増加に反比例すると前に述べたるが如し。之に反して機械類の使用によりて製作さるゝ物品即ち通常の製造品は資本勞働の増加と正比例して其の效果顯はるゝものなり。故に此等は資本の大は多々益辨するなり。而して株式會社は他の會社組織及び組合と異り資本増殖に便利なるが故に是等の收益遞増法の行はるゝ事業の爲に組織するを最も適當とす。其他一個人の事業として到底爲し能はざる事業例へは鐵道運河等の設計をなすに當りては運用其妙を得たるものと云ふべし。

#### 株式會社の設立

合名會社に於ては社員間は互に親密なるが故に創立に關する弊害少しと雖も株式會社に於ては弊害の伴ふ少からざるが故に法律に於ても之に關する豫防の規定を必要とす。其の弊害の重なるものは

一、無識無經驗なる企業者の輕忽又は詐欺的設立の弊あると

二、設立費用の多きが爲に創立者を利して會社の事業に滯滞を來すと

三、投機心を奮興し過ぐるの弊あると

(一)無識の企業家が事業の性質如何を顧みず又は全く一時の權謀に出て所謂權利株の賣買によりて大に利益を占めんとするの意思を以て會社を組織せんとするものあり。自由設立主義の行はるゝ以前に於ては設立の許可を得たるを以て國家が其會社の確實なることを保證したるか如く見せしめ以て公衆を欺きたるか如し。故に現今に於ては法律を以て創立に關して嚴密なる規定を設け事業の良否に關しては一に個人の選擇に任せたり。

(二)發起人又は創立者は會社の設立に盡力するか故に他の株主の此等を尊重するを利用して創立費用を多くし其内より過大の利を私するとあり。例へば工場專賣權等を高價に會社に賣付くるが如し。故に我商法に於ては創立總會に於て是等の諸點を精査せしむ。

(三) 發起人は會社組織によりて事業を起すか爲に發起するに非ずして發起其ものを目的として發起するなり。發起は會社設立の手段に非ずして發起人の利得の手段なり。若くは發起人直接の目的なり。故に發起人は僅に發起したるのみにて所謂權利株を賣買して會社の果して設立さるゝやを問はざるとあり。成るべく多數の株式應募者を得んと欲して株を小にするにあり。然るときは貧者も猶株に投資して遂には順次の拂込に應ずる能はず益々財産を失ふとあり。故に我商法に於ては額面金額最低額を五十圓に限り一度に拂込む場合に於ては二十圓に下すとを得とするなり。

#### 株式會社の機關

合名會社合資會社に於ては會社を代表するもの業務を執行するものは無限責任社員なり。且此等の會社は第三者に對して信用確實にして社員相互間に於ても親密なるを通常とするか故に株式會社に於ける如く社員相互の關係なきものは大に異なる所あるは當然なり。株式會社の機關は株主總會、取締役及監査役の三なり。株主總會は會社の最高機關にして總會の意思は會社の意思なり。株主總

會は株主より成るものにして毎株に一圓の投票權あるを原則とす。株主總會は企業に關して一切の指揮監督をなすものなり。

取締役 株主總會は常設の機關に非ず又常設にするは害ありて益なし。故に會社の行動を繼續するに於ては自ら之に關する機關なかるへからず、是取締役なり。取締役は株主總會の意思の範圍内に於て會社の事務を實行するものなり。

監査役は取締役の行爲を監視して總會の意思に背かざらんとを期するなり。

#### 第三款 組合を論ず

會社と組合とは法人なると否とによりて區別さるゝと前述の如し。然れとも經濟上より見れば其の性質に於て特別の差異あるに非ず、法人としての存在を得て第三者に對立し又諸種の權利を得るの必要ある場合には會社組織を爲す必要ありと雖も然らざるときは組合として法律の嚴なる規定に従はざること事實上の利益なれ。故に組合組織を爲すと否とは或一定の目的に關與する人と其の目的の性質如何によりて定まると勿論なり。

組合も其の組合の目的の爲に資金を必要とするは勿論にして其出資者は組合員

なり。組合の出資の種類は金銭又は勞務なり。

組合の發達は中世に於て最も盛なりしと雖も當時の組織は現今の如く人の自由の念熾なる時に於ては行はれ難く、左ればとて極端自由主義の主張に夢想するか如く個人主義を貫くとは只に社會經濟上に於て不利益なるのみならず個人利益にも反對するを以て社會主義の發生及經濟上の進歩と共に現今の組合なる組織生ずるに至りしなり。即ち組合の主眼とする所は

- 一、組合員の生涯を束縛するものに非ず自由に去就するを得ると
- 二、組合は合法のものたるべきと即ち組合の規約を以て直接に第三者を害すべからざると

三、組合員の利益の交換及社會上の地位を増進するとはなり。

組合は單に利益を得るの一方法として經濟上有用なるに非ず其社會政策上の目的を達するを得るか故に國民經濟に最も裨益を與ふるものなり。組合の經濟上に於て有用なるとは組合の種類によりて異り組合の種類は諸種の方面より觀

察するを得るなり。

組合の直接の目的より區別すれば其數甚多くして各人又は人の集合體の日常の行爲又は必要の行爲の數に應じて分つとを得るなり。即ち衣食住に關する慾望を満足する諸般の行爲に就き最も便利なる方法に出んと欲して各種の組合發生するなり。今其重なる例を擧ぐれば建築組合、消費組合、信用組合、原料品購買組合、生産組合等是なり。

建築組合とは組合員に其き住居を興へんとを目的とするものなり。消費組合とは日用品を廉價にて組合員に供給するにあり。信用組合は低利の資金を供給するとにあり。原料品購買組合は原料品を同時に買ひ同時に運搬するは其價及運搬費に於て大なる節約をなすとを得るを以て一の組合を組織するものなり。生産組合とは組合が共同に生産して且之を共同に販賣するものなり。尙ほ組合を經濟上より學理的に觀察すれば

- 一、經濟上の仕組を改良する組合
- 二、小事業として大事業の競争を免れしむる組合

三、労働者の地位を改良する組合  
 是なるもの。

(一)に属するものは仲買の数を減して直接に生産者と消費者又は消費者と大商業家との間に賣買の行はれんとを目的とするものなり。現今仲買の數増加して貨物の價は生産者の手を離るゝ時の五六倍にすら達するの狀態なり。仲買も經濟上有用の機關にして全く之を無くするを得ざるは勿論なま、其數多きに過ぐるか故に成るべく其手を経ずして貨物を購求するを得ば經濟上の利益なり。消費組合は此目的を達する方法にして益盛ならんとす。夫れ各個人が直接に生産者又は大商業者より購買するとせば各人は場所の遠きに苦しむべく、生産者大商業者は其煩に苦むと同時に速に資金を回收して新なる事業に此金を費すとを得ざるより勢ひ生産物の價を高くせざるを得ざれども、若し組合が此迄仲買の爲したる事業を自らせば仲買の労働に對する報酬即ち仲買の占めたりし利益は貨物の廉價となりしとによりて各組合員の手に歸するに至るなり。

(二)に属するものにして現存せる組合甚だ多し。信用組合、原料品購買組合等是なり。

り。抑も大事業の利あるとは人の知る所にして信用の鞏固なるまは薄利の資本を得、原料品は之を安價に購買運搬するを得。是等は一個人の信用と力によりては到底出来得へからざる所にして個人的企業の益、壓倒さるゝに至るは一に茲に存す。故に各個人は一の組合を組織し大事業の占むる社會經濟上の地位と同等の地歩を得んと欲するなり。

(三)に属するものは未だ多からず。此組合は労働者を集めて其力によりそれ等か企業家たる地位を占むるとにあり、生産組合は此目的を達する一の方法たるべし。即ち労働者は集まりて資金を得共同に生産し共同に販賣すると是なり。然れども労働者は學識乏きか故に實行し難し故に労働者の教育に關する組合が最も労働者の地位を高むるに直接に利益あるものと云ふべし。

以上述べたる各種の組合は實行の難易と其範圍の廣狹あり。例へば消費組合の如きは組合員は其日常入用の資金を投すれば可なるを以て資金を集むると容易なる上に組合員たるに特別の資格を必要とせず。然れ共生産組合の如きに至りては只に資金を集むるに少しく困難あるのみならず生産に多少の改良を加へん爲



には組合員たるものは多少技術上の資格を必要とす。殊に生産組合の事業を指揮するものは組合員に向て指導監督の技能を必要とし経済社会の状況に適應するを要す。加之組合員も亦事業の範圍の如何によりて經濟上に於ける智識を要し労働者と組合に進ましむることを務むべき故に經濟上社會政策上有用の組織にして益々此範圍擴張さるゝときは稍々株式會社に類するに至るなり。

信用組合の一種にして有名なるはシュニエーアタマヤ (Schulze-Deutsche) の主張に係るものにして國民銀行 (Volksbanken) とも稱せらる。斯は手工業者の如き小企業者に資金を貸與して大企業者に對抗するの力を與ふるものなり。小企業家は資本少きのみならず資本を得るの信用に乏し。故に同業者相集りて出資し此外に其組合より生ずる信用を利用して資金を得以て組合の基金を作り組合員に貸與するなり。而して貸金の期限は固より短期なるを可とし又其利子も高きを厭はず。何となれば利子高きときは利益配當によりて補はるゝか故に苦痛甚た少なければなり。此組合員の責任は連帯なるか故に相親きものゝ間に行ふべく且互に扶掖して組合の目的を達すべきか故に各員に獨立の精神を養ふと同時に社會

上の地位を増進するとを得るが故に最も良好なる制度と云ふべし。

英國に於ては既に労働者の組合 (Trade Union) ありて労働者は離金して一の組合を組織し労働者を指揮する技能ある者を雇ひ經濟上の形勢を觀察して資金の増加を雇主に迫るべき時機の良否を決定し若し同盟罷工をなすの必要生ずるときは組合の資金に衣食して以て其の目的を達せんとするなり。

企業者の組合も亦現今益々其範圍の擴張さるゝを見る。殊に北米合衆國に於てはトラスト勃起し競争の弊を避けて市場を獨占せんとす。其利害に關して詳論するは本論の範圍に非すと雖、それが生産力を節約し且競争者を減するの大利あるより勿論之を利用して經濟社會を利することを得るは明なり。殊に獨乙等に於て實行されたる如く其事業に關して諸種の報告を爲すか如きは勞費少くして利益あり。企業者の結合は労働者の強暴を防ぐに足るは勿論なりと雖企業者の組合は只其のみを以て目的とするものと思惟するべからず。労働者の教育の爲に手藝學校を立つる如き或は老衰者寡婦孤兒の扶養保險に關する仕組を爲し一は以て労働者と雇主との感情を融和し、一は以て労働の生産力を増加するとを得べし。

### 第三款 公共事業を論ず

公共事業とは私設の事業に對する名稱にして國家又は公共團體市町村公共組合の施設する事業を云ふ。

公共事業は最少の犠牲を以て最大の利益を得るとの私經濟的原則に依る點に於ては私設事業に同じと雖も其事業を經營する人が公私の差ある如く自ら其間に區別が存在するものなり。私設の事業は私人の利益を主たる目的とするに反して公共の事業は公共團體の利益を先とするなり。公共事業と一個人の事業との差は最も顯著なるも私設事業の一たる株式會社の如き團體的事業と大に其の趣を同じする點あり。即ち一個人の事業は大なる事業に適せずと雖も機械に需要供給の狀勢に從て事業の方向を決定するとを得之に反して株式會社及公共團體は全く反對の現象を呈するなり。

然らば公共團體の事業と團體的事業とは如何なる差別ありや。曰く

#### 一 事業指揮者の意思

#### 二 事業實行者と事業の主體との關係

是なり。

(一) 會社の取締役は通常會社の株主にして總會の意思を實行するものなると明なり。而して此總會なるものは數多の人より成ると雖も其事業の盛衰に關しては全く同じ利害を有すと云ふとを得。之に反して公共事業に於ては國會又は參事會の如き團體の意思を決定する機關ありて經濟上政治上の諸種の利害を代表するものなるか故に往々不統一を來し團體の不利益を醸すと少からず。時としては財政上の理由より事業を經營せんとするとあるを以て一方より盛なる反對を受くるとあるへし。又は官業は生産物の價を高くして表面上最も嫌はるゝ租税を避け實は租税の徵收と同一の効果を占めんとするとあり。殊に其營業は性質上若くは法制上多くは獨占的なるか故に生産物の販賣に於ても必ずしも私經濟的原則に依るとなし。

(二) 官吏若くは公吏は會社の役員と異り法律其他により充分の保護あると同時に其の俸給に關して劃然たる規定あり。會社の役員は會社の事業に密接の利害關係あるも官吏は然らず。只其名譽地位の増進等の原因は經濟上利害の關係薄き

點を補ふか如しと雖も必ずしも然らず。而も多数なる官吏公吏には殆んど影響するに及ばず。只僅に上級にして社會の耳目に關するもののみ隨厚の態度を取るの必要を感ずるとあるに過ぎず。

公共事業と私設事業とは何れか可なるやの問題は一概に之を論断すべからず。事業の性質場所時代の如何によりて異なるものなり。只其の大體の條件を擧ぐれば

一、事業が全國若くは全區劃を通じて均一なると

二、事業が獨占的であると

三、財政上の目的に出ると

是なり。

全般の統一管理を必要とする事業は之を各人の經營に一任するときには統一を缺くに違ふを以て其害大なり。例へば貨幣鑄造郵便電信等の事業は之を各人の經營に委するときには其統一を得ざるが如し。然り而して事業にして獨占的なるものは之を一私人の經營に一任するときには其經營者は暴利を博して全般の人民は

之が爲に損害を蒙るとあり。故に郵便鐵道の如きは官業たる性質を有するものなり。

國家又は地方團體の事務の範圍は現今非常に増進せしか故に其費用も又増加し盡く租税に其財源を俟つと能はざるに至れり。是を以て財政上國家が事業を經營するとあり、我國に於ける業煙草專賣事業の如し。

## 第二節 經濟の技術上より見たる企業の形式

### 第一款 大企業及小企業

大企業と小企業との別は資本額と勞働者の數とによりて區別するも其標準は實に漠然たるを免れず。此區別を定むるに當ては資本の額事業の經濟上に於る地位、營業の組織及營業管理者及其補助者の地位等に鑑みざるべからず。

一、生産を充分に擴張し居らざると

二、一地方又は一階級に向ての生産なると

三、投資的ならず且競争者少きこと

- 四、分業行はれず且機械を用ひ得へきも尙器具等を使用すると
- 五、事業の指揮者とその補助者との階級相近きと
- 六、事業の補助者に家族を以て充てゐると

大事業(Grossbetrieb)の著点

- 一、大資本を要すると
  - 二、市場の範囲廣大なると
  - 三、事業の監督は顧客の使用の注文によらざると
  - 四、事務に當るものは商業的技術的教育を要すると
  - 五、分業の盛なると而して各労働者は事業の全般を窺ふを得ざると
  - 六、事業統轄者と労働者との間に會社上の區別あると
- 抑も大事業、小事業の別生したるは近世の科學及技術上の發明と資本の集積とに歸因するなり。爾れは中世組合の勢力盛なるに當りては組合の規約によりて諸種の制限を蒙りたるが故に資本の數及事業の方法等に於て自由の擴張進歩を謀るを得ざりき。彼の重商主義起るに及て商工業の保護は國家の最大任務なり

との觀念發生し從來の圖象は漸く變となり自ら大事業現出するを見るに至れり。即一方に於ては家庭事業(Hausindustrie)又は手工業(Handwerk)ありと共に一方に於ては機械の使用による事業殊に製造業(Fabrik)生ず故に大事業と云へば機械工業を小事業と云へば手工業を意味するに至れり。

(一) 小事業の利害

(イ) 長所

- 一、労働者は獨立自由なると
  - 二、家族は互に扶掖して道徳上及經濟上の進歩をなすとを得例へば子女は両親の監督の下に働き妻は夫と共に勵精するを得るが如し
  - 三、自己の欲する時間丈行働する自由あると
  - 四、家庭に於ける諸種の仕事をなして倦怠を防ぐとを得
  - 五、事業の餘暇を他に使用するとを得
  - 六、多数の労働者を一ヶ所に集むるの要なきと
- (ロ) 短所

- 一、健康を維持する爲に充分の監督を施すとを得す。
- 二、労働者の数少くして勢力薄弱なるか故に賃銀を不當に下げらるゝも之に甘せざるを得ざること。
- 三、労働を過重すると何となれば小企業は容易に他より競争さるゝか故に之に抵抗する爲め事業をなすもの及其家族皆事業に於る利害密切なるか爲に過勞するとあり。此害は製造業の競争ある場合に最も甚しとす。

(二) 大事業の経済的作用

(イ) 大事業は大市場を支配するとを得。大市場は交通の發達によりて生ず。交通盛なれば千里一日にして達すべく、然らざれば十里も難しとすへし。余嘗て節を豆州天城山に曳けり山上の大樹は多くは朽廢に委し、又之を燒失す、蓋し運搬に難ければなり、市場遠きに非ず、至るとを得ざるなり。嘗に交通機關によりて市場が社会的に近接するの利あるのみならず、新市場たるや諸種の産業及之を補助するの機關發達するときは莫大の資本を以て貨物を生産するも常に充分の費用を見ふとを得て大事業と大市場とは相伴ふものと云ふへし。 *W. Johnson*

引、氏曰く「交通は外部の車輪にして商業は大事業を促すの精神なり」と。

- (ロ) 大事業は多くは小事業を壓倒す。高價の機械を据付け又は良好の設備を必要とする場合例へば蒸氣々鐘、鐵橋、汽船、大砲等の製作の場合に於て最も甚し。
- (ハ) 大事業は小事業に比して完全なる諸種の機械を使用するに當りては其の費用大なるが故に充分に貨物を生産して之を販賣せざる可からず、故に事業を能ふ丈け擴張するとを要す。然るに販路狭き場合は良好の機械を用ゆるも損失相償はざるが故に假令良發明ありと雖も之を用ゆると能はざるなり。

(ニ) 大事業は良好の原料を取得するとを得。原料品を多量に購求する時は運搬に於て利を得ると同時に安價なるとを得ればなり。

(カ) 大事業は良好なる労働を使用するとを得且之を有利に適用することを得。労働に對する報酬は労働者の技能に關係す。労働の効力は現今獨逸に於て最も實驗せられ各種の事業に於て博士其他の學者を雇ひ入れて非常なる研究を爲さしめたる結果として今日の商工業の隆盛をなせるものなり。獨逸の企業家は常に原料等の無謀(比較的)なる使用其他無謀の企業よりも人の行爲は遂に

安價なりとす故に良好なる勞働の利用は現今最も重要の事となれり。而して大事業は之を用ひるに易く小事業は最も難しとする所なり。加之大事業に於ては分業の利益を充分に取得するを得るを以て勞働力の効驗亦顯著なりとす。

(ハ) 大事業は資本を利用するを得。例へは建築温熱光氣皆一を以て他に利用するを得。何となれば今一の大事業に於て使用すべき是等の費用は其事業の大きさに正比例して費用は増加するものに非ざると明なればなり。従て一貨物に對する生産費は事業の大なるに比して減少するなり。

(ト) 大事業は生産物を有利に販賣するを得。大事業に於ては生産物の數量大なるか故に之を運搬するに當りて運賃の割引を得るのみならず荷造費、保険料、管理者の數等皆小事業に比して小額又は小數者を以て辨するを得従て貨物の價を減少するを得るなり。

要するに以上の長所は市場の廣大なると他の事業及制度の發達によりて益々増大するものにして小事業は益々衰頹するの勢あり、就中現今の發達を極めたる大

業は紡績織物、醸造業等なり。

(三) 大事業の短所及小事業の存在し得べき場合

大事業物與と其の經濟的勢力は夙に識者の認むる所にして小事業は全く之か爲に濼滅せしめらるゝやの問題生ずるに至れり。或は尙進て現今大事業と目せらるゝものも尙一層大なる企業例へは *Trusts* 又は *Cartels* によりて壓倒さるゝに至るやの問題生ず。現今米國に於ける其勢力盛なると我國に於ける其波及又は英國獨國に於ける製鐵及大醸造の如きは殆ど經濟社會を驚倒せんとするものあり。然り大事業並に巨大事業 (*Monopolies*) が存在を保ち得、其の勢力は益々盛ならんとするは理論上實際上當然の事なり。然れとも大事業には亦之に伴ふ弊害と短所と並存し其範圍も無限なるものに非ず。大事業は技術上より見れば増大がわりと雖も其他に大なる障害存するなり。

(一) 大事業は勞働者の不勤勉及資本の濼費あると 夫れ多數の勞働者は會社の事業との關係密接ならざるか故に自己の事業に於けるか如き充分の勤勉を爲すことなく之を監督すと雖も必ずしも周密なる方法に出るを要せず。且生産の

材料器具、機械を使用するに於ても少しも節約するの意思なし而して是等を監視するか如きは實に至難の事に属するなり。

之に反して小事業に於ては労働者と企業者との關係親密にして其監督も容易なるか故に諸種の節約と勤勉とによりて大なる利益を生ずるとを得へし。

(二) 大企業は小企業に比し市場の變動に感染し易し。小企業は個々の注文に應じ或は一定の需用を觀察して後生産するの傾あるか故に市場の變動に遭遇すると少しと雖も大企業に於ては投機的に一般の市場を目的として生産するか故に供給過多に陥るとあり。現今に於ては政治と經濟との關係緊切し政治上の變動は直に經濟上に影響するか故に往々異常の變動を生じ事業は之か爲に大に苦むとあり。米西戦争の我國の貿易を阻害したる如き其他斯る實例は枚舉に遑わらず。

(三) 小企業は一地方の需用に應ずる場合に存在す。全國又は國際間の貿易の目的となる物の生産に於ては通常大企業を利とするも一地方の需用に應ずる場合に於ては小企業は優に大企業に對抗するとを得るなり。

特に生産物の性質が速なる消費使用を必要とするもの。例へば食料品の生産修繕的事業の如きは小企業が最も適したるものと云ふべし。

(四) 小企業は奢侈品の製造に適す。奢侈品の如きは時の流行によりて種々異なるが故に巨大の生産をなすも急に一部に於る需用の減少を來すとあればなり。

(五) 美術品の精製は小企業によりて行はる。美術は生産者の心理的作用が大部分を占むるものなるが故に機械類の力を假ると能はず。従て大企業となすの必要なし否な大企業となすとを得ざるなり。

(六) 小動力(Klein Motoren)の發明は小企業の大企業に對する競争力を増加せり。小企業は單に手足を用ゆるのみならず器具を使用すると甚た多し然るに現今に於ては運搬に自在なる小動力發見されたるにより之を利用して生産力を増すとを得。機械は之を据付くるに於て廣大なる範圍を占領せしと雖も斯る小動力は小區域に適用して充分の作用をなし又時々之を他所に移轉して其の活動を完全にするとを得るなり。Werner Siemens氏曰く「自然科學時代の發達の目的は資本家が奴隷的に活動者を使用する所の大企業が再び各人個々の労働に歸

着するにありと。小働力の小事業に於る效用を説明して餘りあり。實に小働力は小働力に對して比肩するに足るの好武器と云ふ可し。其價は廉にして破裂の危険なく、据付くるに易くして又監視するに容易なり。

小働力の重なるものは瓦斯發動機、熱氣發動機(Heissluftmotor)、水壓發動機(Wasserdampfmaschine)の如き是なり。

然れども全般より之を見れば小事業の存在は餘程制限されたる範圍に於て行はれ、大事業が常に小事業の範圍を侵蝕しつゝあるなり。故に社會主義の論者は小企業は悉く壓倒されて遂には僅少なる巨大事業の獨占する所となり、其極資本家主義の社會組織は盡滅して共產主義に至らんとする樂天的觀察を爲すものあり。或は大事業の獨占到對して國家は正當の制限を加へざるべからずと論するあり。又近世の經濟學者は此等の趨勢を見て彼の樂天派の如く社會主義によりて組織さるゝとなく又資本家主義も消へ、其間に調和したる社會經濟の組織行はれ、一方に於ては激甚なる競争の弊滅し、他方に於ては勞働者の社會上の地位改善さるゝに至らんと主張するものあり。

夫れ小事業化して大事業となるに至るは生産力を増加すると疑ふべからずと雖も、之を社會上より觀察すれば種々の弊害あるものと云はざるべからず。大事業の起ると共に獨立的自由なる事業は滅し、國家の中樞たる中等社會の數は減して世は巨富と赤貧とに分たれ、上下の意思懸隔して猜忌は相互の間に増長し、不平滿々たるに至る虞なしとせず、是れ識者の考ふべき所なり。只法制、教育の手段により一方に勞働者の地位を進め、一方に資本家の暴壓を防ぎて以て其の間に圓滿なる關係の發生するを務むべきなり。

## 第二款 企業者の結合を論ず

企業者の組合は既に略述せしか如く自由競争の弊を避け經濟上の好地位を占めんとするにあり。此の種類の結合薄弱なるものは既に久しき以前に存せり、中世に於て最も然り。其の時に於ては生産物の販賣若くは運搬に關する同盟に過ぎざりしか、現今に於ては只に販賣のみならず其の生産に關するものなり。

現今「トラスト」又は「カーテル」の發生したる原因は生産過多、競争激甚に歸すると云へし。即ち物價の下落は徒に消費者に利して企業家は莫大の損耗を蒙むるの愚



なるを感し結合して其の弊を矯めんとするなり。故に先づ協議して貨物の價を定めんとしたりと雖も、生産額に制限を定めさりしか故に競争依然として行はれたり、依て價に關する規約と同時に生産額を定むるに至れり。是に於てか目的を達するを得ると同時に大企業より生ずる利益を充分に享受するに至れり。

「トラスト」の生し得べき場合 獨逸に發生したる「カール」は企業の内部分の組織に關しては何たる規約を存せざりしと雖も現今に於ては其の結合たるや内部の組織に及ぶのみならず、進て數多の企業か合して一となるとあり。例へば米國に於ける「トラスト」の如し。故に斯る企業者の組合は粗より密に至りし狀況なり。此の發達の極度は個々の企業か全體の企業の利益の爲に行はれ生産物は個々の事業のそれに非ずして全體の貨物なるに至る場合なり。故に「トラスト」として成立し得るには貨物の性質一様にして又其の生産の方法も均一なるを得る場合に限るなり。然らざれば到底組合の規約は充分に行はれざるなり。米國の「トラスト」は近世最も世人の注意を惹けるものにして各企業は全く一に合して毫も一個獨立の事業としての存在を認めず。故に只に生産と價とに關して「トラスト」全體の

意思に従ふべきのみならず事業の全般より觀察して不利なるものは其の企業を廢するなり。故に従來各企業に於ける株主は盡く(Trust Board)と稱する全體の事業經營者に充分の信頼を爲すを要す。

「トラスト」の利害 「トラスト」は大企業の一なる事勿論なるか故に大企業に伴ふ利害は自ら存在せざるを得ず。而して最も「トラスト」の長とする所は其獨占的なる點に在り。故に「トラスト」は貨物の價を自由に定むる事を得るの利あり。然れども若し高きに過ぐれば需用は減少するの傾あるか故に必ずしも消費者の苦痛を増すものに非ず。只法制に依り適當の制限を施し奔馬をして逸せざらしむるにありのみ。

### 第三章 生産を支配する原則

#### 第一節 自由競争を論ず

古代經濟組織に於ては人は自ら生産して自ら消費するなり。其間には有無相通するの觀念殆どなかりしと雖も益交易の必要を生じ遂に現今の狀況に及べり、現今の經濟組織即ち是れなり。此の組織の大本となるものは契約の自由、所有權、及

分業の三なると前に述べたるが如し。此三基礎の上に行はるゝ生産は消費と全く分離し生産は企業者によりて行はれ、企業者の外に消費者は存在するなり。故に生産者は常に消費者にして消費者は常に生産者なりし古代の經濟組織とは全く正反對の現象を呈せり。是即ち現今の經濟組織なり。既に企業者又は生産者と消費者とは相對立する者なり。故に生産者は最も高價に最も有利に貨物を賣却せんと欲し消費者は最も安價に最も有利に之を購求せんと欲するなり。資本及勞働を利用するとは生産者の自由なるか故に生産者か生産の範圍方法を決定するに當り其標準とするものは經濟上の利害なり。是に於てか費用と利得との關係に焦慮するに至り其の利害の有無を定むるに於て比較すへき標準となるものは即ち價值にして價值は通常貨幣によりて顯はさるゝなり、之を代價(Price)と云ふなり。代價は只に生産者の標準に止まらず實に消費者の標準なり、故に現今の經濟組織は價格及價值(Worth)の如何によりて自由なる諸種の經濟的活動生するなり。是れ現今の經濟組織を稱して自由競争の原則によりて支配さるゝ經濟組織と云ふ所以なり。

## 第二節 自由競争の經濟上及社會上の結果

### 第一 經濟上の結果

自由競争ある經濟組織に於ては企業者は生産の總攬者にして時の需用に鑑み貨物の供給をなすものなり。而して其動機は利益に存すること勿論にして利益は價格の如何によりて決定さるゝなり。而して人の多數なる皆利に就かんとするか故に競争者の數測るへからず。故に

- 一、生産の範圍及方法増大す、人各其長を示して以て市場に勝を制せんか爲めなり。故に或は大企業となり、或は分業となる。
- 二、利益、利子、賃銀皆低落の傾あり、競争自由にして頻繁なるか故に利を見れば争て之に就くが故に企業家、資本家、及勞働者の収入は自ら低落せざるを得ざるなり。
- 三、信用による取引を盛ならしむ、資本を放下しても再ひ之を回收して新なる事業を起す必要生するあり従て信用の使用行はるゝに至るなり。
- 四、事業か投機的なると、需用の程度不明なると競争の範圍及強弱に變動

あるとにより將來の變動を豫想して事業を經營せざるへからず。故に機に適すれば利し、然らざれば損す。

五、生産過超を來すと、是投機の結果なりと云ふを得。既に需用供給の不確實なるあり、寧ろ充分に生産して市場を獨占せんに加かず、且競争者多きか爲め各企業者の生産多く遂に生産過多となり、物價の下落を來すなり。

六、大企業の増加を來す、競争の弊を矯めん爲に現出すると前に述たるか如し。

七、不經濟的の生産行はるゝと、競争は社會上良制の一と云ふを得ん。然れとも其、其、其、果、の、生、ず、る、場、合、は、貨、物、の、性、質、を、其、好、に、す、る、か、又、は、貨、物、の、改、良、は、出、來、さ、る、も、尙、其、の、價、格、を、安、く、す、る、と、に、よ、り、て、競、争、す、る、場、合、な、り。然らずして或は偽造により或は模倣によりて競争するときは私經濟上の利益は之有らんも國民經濟上甚だ不利益にして徒に資本勞働を浪費するものと云ふべし。此等の卑劣なる競争は只に競争者たる生産者を害するのみならず多くの消費者をも害するに至るなり。

## 第二 社會上の結果

自由競争は各人の任意なる行動に出て、經濟上の利益を占めんとするにあるか故に利益も其人の力に出て損耗も其人の罪に歸するなり。故に得失の責任は一に其人に存す故に各人は自ら自己の能力を發達せしめざるへからず。勞働力の増進、學識の進歩、節儉貯蓄皆此責任より促かされて生ずるなり。而して各種の力は各其地位を得て其技能に相當する報酬を得べきなり。然れとも之は單純なる條件の下に於る自由競争の結果にして只理論上あり得べき事と云ふを得べきも實際に於ては幾多の制限を蒙るものなり。何となれば社會の組織は各種の力の公平なる活動を容るゝの餘地なく、假令活動の餘地ありとするも其の效果をして充分に現出せしむるを得されはなり。例へば有識者か必ずしも世人に知らるゝにあらす無識も資本を有するときは恰も有識者の如く經濟上の地位を進むるを得るなり。畢竟人の多き其眞價を見出し難きと、道德の不完全なるより眞價を定むるに公平ならざるとに出るなり。

之に加ふるに現今の自由競争的經濟組織に於ては財産權の移轉職業の自由ある

より社會の不公平なる標定を現實にすると容易なるか故に貧は益、富は益、富に至り、資本家と労働者又は財産家と其資力者との二階級現出す。其結果の社會上に及ぼす現象を擧ぐれば

一、労働者の労働實際上に於て低落すると、労働者は無資無識なるか故に資本家、企業家の如き有識有資者の恩恵如何によりて労働定まる。只或事業に向て労働の供給充分ならざる場合に労働高まるとを得れども是例外と云ふべし。何となれば労働者の供給は常に需用に超過するの傾われはなり。

二、労働者と雇主との關係は全く私經濟的の原則に依りて定まる、雇主は最低の労働を以て最高の利益を占めんとす。故に労働力の耐久の基礎たる教育健康のとは顧みられず、長時間の労働を爲さしめ又女子を使役す、故に労働力衰ふれば直に解雇するに至るなり。

三、企業家は競争の激甚なる爲めに労働者に好意を表せんとするも其力なし。以上の悪結果は政治上最も悪るべきのみならず國民經濟上不利なるか故に法律上、道徳上の制限を必要とす。又各種の經濟政策も生ずるに至るなり、此點に關し

ては相反對せる二主義存在するなり。

(イ) 漸進主義 此主義によれば現今の經濟組織に於ても法律上の制限例へは獨占又は專賣行はれ或は労働の時間の制限、工場の行政あり。又事實上の制限例へは天然力の制限あると、及其特別の地方に偏して存在するとより生ずる制限あり。又社會上の制限例へは交通發達して尙人民の性情開化の度によりて資本及労働の移轉し難きと、等の制限あるか故に一方に労働者の需用多しとて必ずしも競争者襲來するとなかるべく、資本の需用ある場合にも必ずしも資本が直に入來るとなければなり。自由競争の短所を漸時改良するとに務めは國民經濟は益々良好の結果生ずるに至らんと主張するものなり。

(ロ) 激進主義 此主義は所謂極端社會主義の主張するものにして現今の自由競争による經濟組織を全廢して新なる共産的公共的經濟を營まんとするものなると前に述べたるか如し。

## 第三編 交易論

### 第一章 總論

交易とは有無相通する經濟的活動たり、貨物又は財産權の移轉に關する經濟的活動を云ふなり。交易には常に貨物の移轉伴ふものに非ず然れとも之に關する權利の移轉變更消滅の生ずるものなり。例は不動産其物の移轉あるとなきは勿論なりと雖も之に關する財産權は種々に變動するなり。交易は有無相通するの主旨に出るものなり、有無の生ずるは自然及社會上の差別より生ずるなり。水なき所には水は貴く、鑛物の諸所に散在せる、人に賢愚の別ある、強弱の差ある、皆交易を必要とする原因たらざるはなし。交易は或時代の社會上經濟上の狀勢の下に存するものにして其の進歩せると否と複雑なると否とによりて交易に繁簡あるなり。古代は交易なるものなく假令之ある場合に於ても尙其度は至て緩なり。文明進むに従ひ競争盛となり分業行はるゝに至らば益々交易の必要を感ずるに至る。交通を妨害するの事情は

#### 一、國民經濟の組織

#### 二、法令による制限

#### 三、技術的制限

の三にして國家經濟の發達せざる間は諸種の交易機關(Verkehrsmittel)に乏しきか故に交易充分に行はれざるか如し。法令によりては生産に關する制限、關稅によりて外國の輸入を難くする如き、又交通機關發達せざるか故に需用者と供給者と隔離するとのなり。

以上は交易を制限するものなりと雖も交易を擴張し便利にするの手段は最も旺盛を極むるの狀態なり。今之を擧ぐれば左の如し。

#### 一、度量衡

#### 二、貨幣及信用

#### 三、運輸及交通の機關

#### 四、商業

#### 五、市場

交易機關の國民經濟上に於ける効果

一三六

(一) 度量衡は貨物の分量を精確に定むるものにして度量衡の精密なる製作行はるるに従ひ之にて定めたる貨物の分量精密の度を加ふるなり。

(二) 貨幣及信用 物々交換は需用と供給とが適合せざるか故に貨幣なる一種の貨物を用ひ交換の媒介とするなり。信用は貨幣の代用をなすものにして現今最も多く使用さるゝものたり、後段に於て尙詳説すべければ茲に之を畧す。

(三) 交通機關 Kommunikationsmittel 運輸交通の目的となるものは人、貨物、及報告なり。如何なるものを運輸交通せしむるによりて機關の種類も異なるなり。

運輸交通は市場を大にして又相近つかしむるものなるか故に生産物と消費者とを接近せしむるの作用あり。運輸交通機關が規則正しく安全に且迅速に行はるとは生産者、消費者が常に近接して需用供給相適合するを得るとに歸するなり。凡て經濟は需用供給の定規の上に活動するものなるか故に始めは一地方に於る取引行はれ後に地方と地方との間尙進て國際間の取引生ずるに至るなり。

(四) 商業 商業の種類は場所の如何目的の差によりて諸種に區別するとを得。場

所の差によりて分ては國內商業、國際商業、又事業の大小より區別すれば大商業若くは卸賣及小賣商業若くは小賣の二に分る。取引の目的によりて區別すれば動産、不動産の賣買、證券の賣買の如き是なり。

是等各種の商業の經濟上に於る利害得失は之を商業政策論に譲り、今は只一般に商業の經濟上に於ける地位を定むるに止めん。

商業は貨物を直接に生産するものに非ずして、貨物を餘りたる處に取り不足の所に致す行爲にして、無用の地より有用の地に移すものなるか故に、貨物の價值を増加する生産行爲の一なると同時に、貨物の移轉を迅速容易ならしむる一の分配行爲なり。

商業は安き所に貨物を買ひ高き所に之を賣却する取得の一形式にして其價の差によりて利益を獲得せんとするの行爲なり。抑も需用多き所は價貴く供給多き所は價低きか故に商業は需用供給の比例を觀察せざるべからず。而して需用と供給とは時々意外の變動あると少からず、故に商業は其性質投機的にして其程度は大事業と小事業、國際商業、國內商業とによりて大なる差あり。然りと雖も商業

の如きも學術の進歩に従ひ一定の系規(Prämissen)を帯ふるに至りし故に其投機  
の程度を緩和するものありて存す。

(イ) 商業は是に買ひて彼に賣るものなるか故に貨物の集散を宜くし貨物の存在を  
各所に平均す、從て貨物の價を平均せしむるの效あり。

(ロ) 商業は分業を發達せしめ且生産者消費者の地位を安固にす。何となれば商業  
未發達の時は生産者は生産と同時に販賣を自からせざるを得ず、消費者は常に生産  
者たらざるを得ざりしも商業によりて消費者は自ら生産するを要せず。是れ商業  
者の手を経て充分の供給を得ればなり。故に直接に生産に従事するものと否と  
の別生するなり、是分業の生ずる條件なり。又消費者は生産の状況より獨立した  
る地位を保つを得。何となれば一地方に於て生産の結果不良なるか又は物價の  
騰貴あるも消費者は商人の手を経て安價の貨物を求むるを得ればなり。之に  
反して生産者も一地方の需用の變動に苦しむとを要せず、商人は其の貨物を他方  
に運轉媒介するを以て獨立の地位を保つとを得るなり。

(ハ) 商業は生産の競争を盛ならしむ、貨物の商業に於るは良馬の白樂に於るか如

く、比較的安價なる貨物は直に諸所に移轉販賣せらるゝか故に、諸種の生産物、諸方  
より來る貨物は皆競争によりて市場に勝を制するなり、從て消費者は利益を蒙む  
ると大なり。是に於てか古來自由貿易保護貿易の二主義顯はるゝなり。自由貿  
易論者は外國品の輸入によりて安價なる貨物を得るは決局國の利にして競争の  
結果最も比較的良好の貨物を購求するは大なる利益なりとす。故に國家は貿易  
に向て何たる制限を加ふるへからず。

之に反して保護主義者は論して曰く、國家は必ず自國の需用する丈の貨物を生産  
するの能力あるを要す。然らざれば一朝事あるときは不測の困難に陥るとある  
のみならず一國は成るべく其國民の生産力を發達するを可とするか故に或事業  
に關して對等の競争をなすに至る迄は國家の保護を必要とすと。要するに事業  
の性質、競争國との關係によりて定まるべき問題なり。

(五) 市場 市場とは貨物集散の地にして法律又は習慣による經濟的現象たり。或  
は現今の都市を云ふとあり、未開の國に於ては人民は氏神の祭禮を卜して集合し  
有無相交換するとあり。又法律を以て期日、場所等を制限し貨物取引の便を計る

とあり。現今に於ては都會は常設の市場と云ふべく、貨物の分配は概ね都市に於て行はれ生産も又營まる。蓋し都市には人口多くして需用供給の適合容易なればなり。

市場の最も效用ある點は需用者供給者は如何なるものを如何なる程度に於て購求し、又は生産すべきかの點を見分ると容易なる點にあり。之あるか爲に貨物の正當の價も定り販賣者が暴利を食るとを得ず、購求者が特別の利を得るとなく決局貨物の取引容易なるに至るなり。

市場に於る貨物の價は一般に波及して一地方の價の標準となるを得。此點は交易の盛なるに従て増進し市場の大となるに應じて波及の範圍廣かると勿論なり。

市場にも大小ありて大市場は自ら小市場に畢なる所あり。小市場は古代に於て最も多く存在したるか倘現今に於ても見るとを得べき彼の祭日に於る商人及顧客の集合の如き、或は青物市場の如き、皆其當日存在せる貨物に關し且其貨物の運轉さるべき範圍少きか故に貨物の價の如き僅に一小部局に限られ而して其變

動も亦速かなり。之に反して大市場に於ては貨物の集散大なるか故に其の種類範圍も亦大なり。故に此處に於て定まりたる價は他所の物價に影響すると大なり。殊に大市場に於ては只に現存の貨物に關して需用供給の關係を定むるのみならず將來に於て貨物の分量の増減如何を豫測して評價するものなるか故に其價に於て激變あるとなし。然れとも斯る取引の方法行はるべきは貨物の性質一様なるものにして豫め如何なる種類なるとを定め得べき場合に最も適用あり、取引所は此等の例なり。

投機的賣買(Börsen)には有價證券賣買(Verthypapier Börsen)物産取引(Warenbörsen)の二種あり。此二種は其取引の目的となるもの、種類によりて更に數多に分る。

取引には所謂直取引及延取引ありて直取引は貨物を直に授受するものにして、延取引は未來の期日をトして其の期限の到來の時貨物の授受をなすものなり。直取引も貨物の價の一日中に於ける變動によりて多少の投機ありと雖も延取引の如く甚しからず。延取引は將來に於ける價格の騰貴を豫想することを得るときは現在に於て買込むとなり、下落を豫想するときは現在に於て之を賣



却せんとするなり。故に將來の市場を觀察して賣買を決するものなるか故に大に投機的なりとす。

取引所は斯る投機賣買を爲すの機關にして其の經濟上に於る利害は益大なるを以て取引所に關する制度は充分精査するを要するなり。

一、取引所の長所

イ 需用供給が適合宜しきを得ると、

ロ 精密に且公平に物價を定むるとを得、

ハ 一定の時期に於る諸所の物價を平均するとを得、

二、取引所の短所

イ 買占又は賣放等によりて一二の投機者の爲に全軀の經濟社會が紊亂せしめらるゝとあり、

ロ 無識者の投機を促す、

ハ 投機が極度に達し恐慌を生ずるとあり、

取引所に關しては商業政策學に於て論究すべきものなるか故に茲に之を略説するに過ぎず。

## 第二章 價值論(Vertheorie)

### 第一節 緒論

余は既に前章に於て價值の觀念に就き概説せり本論に於ては價值決定の標準條件等に付略説すべし。

夫れ價值に關するの論は古今の學者を勞せしめし問題にして今尙異説紛々たり。此の原因は

(一) 理論を以て定むるとの難きのみならず如何に價值か或條件の下に變動するやを圖説するとありと雖も只大體の標準を示すに過ぎずして實際上に於ては一定の根據を立つるとを得ざると。

(二) 價值に關する用語の不定なると、用語の不正確なるとは一般學術の研究を妨害するとは古今の同歎にして就中經濟學の如く吾人の慣用の事物に關係する事項を研究するものに於ては此弊害の特に大なるを見る。抑も價值なる語を用ゆる場合に於ては之を物理學上の意義に用ひて火の熱力又は水の作用等を以て水

の價值と論ずるあり。又は道徳上社會上有益なるものを以て價值あるものとし、道徳に違反するものは之を價值なきものと稱するとあり。殊に我國に於ては價值と價格とを同一に觀察する人あり、或は價值と效用とは同意義に用ひらるるあり、或は然らざるもあり。余は價值なる語を獨語の *Wert* と同意義に使用するのみ。人は之を效用と云ふとあるへし、或は價格と云はんなり。要は *Wert* に関する語にして名を以て實を失せざるにあり。近世の學者たる Menger, Böhm-Bawerk, Jaens 等は先づ使用價值 (*Gebrauchswert*) を論ず。而して使用價值は交易なき場合に於てもあり得べきとなるか故に孤立經濟に於ける價值か論せらる故に直接に實際上の效益なきか如し。之に反して古代の學者は尙實際的立脚點に出て交換價值 (*Tauschwert*) に重きを置けり。故に二者全く相反するか如きも、然らず古代の學者も交換の觀念以外に價值の觀念生し得るとの論に反對するに非ず。又現今の學者も交易的條件を度外視するに非ず、只現今の學者は貨物の分量の價值に對する關係を正確に且適當に明にしたるに反し、舊派の稀薄的價值 (*Seltenheitswert, Scarcity Value*) に、關し只少しく論及したるの差あるのみ、從て二者は僅に異なる所あるに過ぎず。

## 第二節 價值評定の條件

價值とは吾人か一定の貨物に對して他との比較上吾人の慾望を満足せしむる程度を云ふ。故に價值は比較的の語にして各人の各貨物に對する感情なり。故に價值の程度定まるには慾望と貨物の慾望を満足せしむるに足る性質の二に歸着するものとす。

(甲) 慾望 慾望は慣習、教育、社會の情態、外界の事情によりて異なるとは明なり。之れ價值の如何を定むるの本となるものにして吾人の評價は獨立絶對的のものに非ず。然れども是等の外部の事情は大體に於て人の意思を左右するに過ぎずして各人は各自己の判斷自己の計算によりて價值を生するなり。只外部の事情によりて左右さるゝと云ふは自己の心機如何によりて自由に變動するとの謂に非るのみ。

又同し人に於ても一定の貨物に對して慾望か種々に變更し、或は強弱の生ずるとあり、殊に幼稚なる時より死に到る迄慾望、情念に種々の變化を來すものなり。是各人の實驗する所にして詳述するを要せず、殊に意識の發達、養成如何によりては

大に價値の觀念に變遷を生ずるものなりとす。

又新に事實の真相を觀破するによりて價値に大影響を來すとあり。例へば無銘の刀劍が正宗の作なりしとを發見したるとき或は正宗の刀劍と信したるに實は偽作なると明なるに至るときは忽ち價値に變動を生ず。是實質に於て何の變更も生したるに非ず全く一の事實の發見によりて此結果を生したるなり。且吾人は所有せざる場合若くは所有を禁せられたる場合に於ては之を得んとするの情緊切なり。而も一旦之を取得するとを得るの希望生ずるときは直に之に對する慾望の程度減ずるとあり。畢竟價値は各人の心理的作用により生ずるものなるか故に心性の變更によりて異常の慾望又は價値の評定生ずるなり。

人の生活する土地氣候形狀等も大に慾望に關係するとは既に述べたる如くにして人の身分も亦大なる影響を與ふるなり。例へば囚人の自由を欲し豫審の被告に一片の證據書類は最も貴重なるものの一たるか如し。彼の愛情價値(Affektions-werth)と稱せらるゝもの例へば一家の系圖の如き其家族に向ては貴重なるものなりと雖も他の人に向ては殆ど何の價も無しと云ふとを得べし。斯る差異の生ず

る原因は家族的觀念の存すると否とによりて生ずるとあり或は特定の人と人との間の親密なる關係より其の一人の手蹟が殊に貴重なるか如きは是なり。又多くの美術思想なきものは錦繪の美を知りて名手の作の良好なるを知らざることあり。

之を要するに價値は各人の感情に存するものにして單に一の物か社會に有用なると否とによりて定まると云ふことを得ざるなり。

(乙)貨物か吾人の慾望を満足せしむるに足るの性質 價値は社會全體に對して一の貨物か有用なるによりて定まると論定すると得ざるも各人に對して必ず或慾望を満足せしむるに足るの性質を有せざるへからず。只其慾望の種類に高下あり又は有害なると否とあるのみ。

それ貨物の種類は只に有形物のみならず無形のものをも含むとは既に述べたるか如し。殊に現今の取引に於ては多くは權利の移轉に關するものにして貨物其者の引渡しは殆ど一の附屬的行爲に過ぎざるなり。此他名譽の表彰たる勳章位記の如きは大なる價値あるものとす。人と人との關係に於ても有力者と親密なると

或は親子の關係より生ずるもの皆特定の人に取りて充分の價值あるものなり。此等は毫も交換の目的となるものに非ず、即生産さるゝものに非ず、賣却さるゝものに非ず、又購買さるゝものにも非ず、然れども價值の存するとは毫も疑を容れず。貨物の性質及び之に關する知識は價值の評定に關係を有すると大なり。價值を生ずるには貨物が吾人の慾望を満足せしむるに足るの性質あると同時に其之を達する手段の伴ふとを要す。吾人の知らざる貨物は價值なきは勿論、知るも之を取得するの手段が社會に存せざるときは毫も價值なきなり。之に反して他に新なる貨物發見せらるゝか、若くは現存の貨物に關する吾人の知識増進するときは直に價值の増減を來すなり。ランプ發明されてより行燈の需用衰へたるか如きペンシヤの製鋼法知られてより鐵の需用の増進したるか如き皆同理に出るなり。既存の貨物の性質は毫も變したるに非ず、只比較上吾人の慾望か之に關して一に増し一に減したるなり。又彼の火力、肥料力、光力の如き各人の意思に關係なくして觀察し得へき力は之を火、肥料、光氣の價值と云はすして他の名稱を付するを可とす。即ち大小、強弱力等の語を以て顯はすを可とす。然れども火、肥料、光の有す

る物理上の力は固より各人に取りて其慾望を満足せしむるに足る性質なるが故に各人は之に對して或感情を有するなり。是價值の基礎となるなり。

### 第三節 限界的價值の觀念

夫れ吾人の慾望の種類は甚だ多し。然れども一定の限度を過ぐれば慾望は全く消滅し却て不快の感を生じ遂に有害の結果を生ずるものなり。

今之を飲食物に付て考ふれば吾人の飢渴は一定の食を得、定量の水を得れば直に醫せらるゝに至ると吾人の經驗する所なり。即ち始めは無上の快樂を感じ漸々其度減して遂には苦もなく快もなきに至り、尙進ては不快を感じるに至るなり。然らば精神上の慾望に付ては如何。精神上の感情たる美音を聞き、美觀を愛するか如きも、絶へず之を聞き常に之を見るが如きは最も不快を生し易く、其見若くは聞く間に暫く心機を一轉するの必要生ずるなり。如何に美術を嗜好する人と雖も常に多くの畫圖に接するの人は二三名手の作を見るに止まり、悉く之を觀察するの慾望なきは勿論之を爲すは却て苦痛なると明かなり。技術上の事に關しても然り否、此點に於ては最も明瞭に上述の法則の現出するを見るなり。土地を

耕し雜草を薙取り又は肥料を加ふる場合に於て収益は絶對的に増加すと雖も資本及勞働を費すに比例して相對的に収益の生ずるに非ず、遂には最高限に達して其の以後は却て土地の生産力を減少するに至るなり。潺々たる流水は家畜の飲料に充て灌漑に便なり。而して通常水の欠乏を感せざる所に於ては何の價なしと雖も、大旱の際に於ては雲霓も亦人の見て喜ぶ所なり。之に反して一旦奔逸するときは雷に田畑を害するのみならず人畜をも損するに至る。火に於ても亦斯の如し暖を取り食を煮るの火は貴重なりと雖も一度之を失せは百萬の財寶烏有に歸せんなり。

之を要するに凡ての場合に於て効果を生ぜしむ可き原因は漸々減少して増加力の各部の効果は漸々減するの傾向あり。而して力の増加か何の効果を、も生ぜざる場合即ち力を加へても無効なる場合か慾望を満足せしめたる最頂點なるなり。只蓄財に對する慾望は其財寶の益集まるに從て増加の度大なるの觀あるも通常財寶は極度まで之を集むるを得ざるか故に、極點を過ぐる場合即ち價值遞減の事實が顯はるゝ機會を見るときを得ざるのみにして以上述べたる價值遞減法の原則

の適用なきに非ざるなり。

前節及本節に述べたる所に依り價値の定まる原因は貨物の性質及之を利用するとを得るの手段に存すること並に其分量に依りて定まると明かなり。而して有**用的結果**(*Useful Results*)は分量の増加に依り或程度まで増加し其以後は却て減少するものなり。是れ**限界的價値**(*Limiting Value*)の論の起る源にして同種類の貨物の各分量は吾人の幸福に向て同一の効果を與ふるものに非ず。ゴッセン(*Gossen*)氏は此**限界的價値**を稱して最後の微分子の價値と云ひ、**ヤエボンス**(*Jevons*)氏は之を**Terminal or Marginal utility**と云へり。限界的價値を明瞭ならしめん爲めに左に表を以て之を説かん

貨物の分量

有**用的結果**

限**界的價値**

一	.....八	.....六
二	.....十四	.....五
三	.....十九	.....四
四	.....廿三	.....三
五	.....廿六	.....二

六	廿八
七	廿九
八	廿九
九	廿八
十	廿六

右表に示せる如く貨物が只一個存するとき八だけの價值ありたりとせんに若し貨物の數二個となりたる場合は八だけの價值が増すものとせば十六だけの價值を人に感せしむる如きも、實際價值は一の感情にして貨物の分量が二となれば始め只一を有する場合よりも貨物に對する價值が減して十六とはならず十四となるが如し。即ち此時の最後の貨物の價值は六なり。之を限界的價值と云ふなり。斯く漸々貨物の分量が増すに従て限界的價值は減少し遂に貨物が入るときは吾人の慾望を満足せしむる極端に達したる場合に於て限界的價值は零なり。其以後貨物の數が九となりたるときは却て有害となり其結果全體の價值の減少を來す。即ち限界的價值も有目的の結果も益減少するに至るなり。

#### 第四節 客觀的價值、主觀的價值及交換價值

##### 使用價值を論ず

價值は一個人の精神上に於て測定さるゝものなると前節に述べたるが如し。之を主觀的價值と稱し貨物の一般の性質に基き一般の人より觀察したるものを客觀的價值と稱す。

交換價值とは貨物と貨物とを交換する地位に於て測定されたる價值を云ひ使用價值とは貨物を使用する上に於て慾望を満足する度合なり。

此交換價值及使用價值の區別は餘程久しき以前の學者によりて唱導されたり。アダムスミス氏も亦價值なる語に二義ありて一は貨物か吾人の慾望を満足せしむる貨物の性質の有用、不有用の點より觀察するものとし、一は其貨物を以て他物と交換し得る力を顯はすものとせり。水は使用價值多きも交換價值少しと云ふが如し。此の區別は各人は必ずしも自己の欲する貨物を有せず而して同し貨物に於ても人に依りて價值の感覺に差あるより生ずるに至れり、即ち各人の有する分量に従て各人の有する交換價值は異なるなり。

交換價值は又之を主觀的、客觀的に觀察することを得へし。主觀的交換價值は各

人が一定の時に於て交換せんと欲する價值にして客觀的交換價值とは一般の人より觀察して交換さるべき價值を云ふ。

物の代價殊に一般の物價は即ち客觀的交換價值にして通常貨幣を以て之を評定するなり。然れども各個の場合に於ては物の代價は主觀的交換價值と同一なる場合ありて只市場の相場と稱せらるるものは客觀的交換價值にして、そが貨幣によりて顯はされたるものに外ならず。尙代價を論ずる時に詳説すべし。

### 第三章 代價

#### 第一節 緒論

代價(Preis)とは廣義に之を云へば貨物を交易するに當り其對價(Gegenwert)として授受さるる貨物の總額なり。交易に際し一の貨物の對價となるものは通常金錢なり。假へば物と物との直接交換ある場合に於て其評定されたる貨物の價格を稱して代價と云ふなり。即ち一の貨物を代價百圓なりと云ふは其時と處とに於る貨物の價を金錢に依りて評價したるものなり。

彼の交換價值と稱せらるるものは代價とは常に同一のものに非ず。客觀的交換

價值は一般の場合に於ける一の貨物の全般より見たる評價にして代價は或貨物に向て現在取得されたる對價若くは報酬なり。故に吾人は日常一の貨物を特別に安價にて購求することを得たりと云ふことを得るなり。即ち賣主に於て急に金錢を得るの必要より一の貨物を通常の場合に賣却し得べき代價より安く賣るとあるを以てなり。此場合には代價は賣主の主觀的交換價值が低かりしに依りて相場より安きなり。夫れ代價は吾人の經濟的活動の標準にして消費者は之によりて消費の程度を定め生産者は之と生産及販賣に關する目標とするか故に代價の高低は經濟社會に於ける唯一の指針となること恰も航海者に於て磁石、晴雨計の必要あるか如し、故に學理上之を觀察するの根底を定むるとは最も有用の事に屬す。然れども經濟的現象は紛亂混淆して如何なる原因によりて代價の變動を生じたるやを知るに苦しむ。只與ふ丈け一定の條件を假想して其場合に生ずべき變動を豫定するとを得ば假令結果に於て稍々理論の命する所と異なるか如きものあるも之れ只假想したる條件に或少數の原因か加りたるより生ずるものなるとを推測するとを得るか故に代價の高低を知るに於て大に裨益する所ある

は論を俟たず。

抑も代價の關係を觀察するに當りては人の慈善、好意等の理由に基ける特別の場合に生ずる代價に向ては一に其當事者間の關係に依りて生ずるものにして之を論定することを得ざるは勿論之を論ずるも無益の事たり。只其の一般の場合に我經濟社會に於て通常生し得べき代價の變動に付て觀察すると必要にして且出來得べきとたり。従て先づ吾人は交易の場合に於て各其經濟的利益に向て活動するとを假定するとを得。而して其活動は自由なる場合を通常とすと雖も尙社會上法制上制限を蒙むるとあり。即ち

一 賣却者の獨占なる場合

二 賣却者と購買者との競争ある場合

是なり。而して此外尙ほ貨物其ものの數量が増加し得べき場合と否とあり。故に此等の著しき場合を基礎とし種々の條件を假想し代價變動の原因を説明せん

## 第二節 獨占代價

獨占代價の生し得べき場合は貨物の所有者が事實上又は法律上專賣の力を有する場合なり。

之を論ずるに當りて先づ一般の場合を論し後購買者間に競争ある場合に論及せん。

### 第一 一般の場合

夫れ交換の成立するには之によりて相互間に利益の生ずることを要す。即ち賣却者は對價を得るを以て現在の貨物を有するも利益なりと感し購買者は對價たる金錢を有するよりも尙貨物を得るを利とする場合に生ずるなり。換言すれば貨物と其對價となる貨物とに對する賣主及買主の主觀的交換價値の如何に依りて交易行はるゝなり。而して買主は出來得る丈最も安價に買はんと欲し賣主は出來得る丈最も高價に賣らんと欲するか故に代價の最低限は賣主が其貨物に對して有する主觀的交換價値にして最高限は買主が賣買の目的たる貨物に對する主觀的交換價値なり。而して代價は此兩限度の間に昇降するなり。代價の最高限及最低限は貨物及其對價の有する限界的價値に依りて定まる。例



へは探幽の繪畫を有する人ありとせんに若し其人富貴なる時は金錢の如き若くは通常容易に購買し得べき貨物の多量を有するを以て其限界的價値は甚だ低くし従て多額の金を以てせされは此繪畫を賣却せざるべし。之に反し若し其人一朝にして多くの財産を失ふたりとせんか他の一般の財産の數量減少したる結果夫等の貨物の限界的價値高くなるを以て他人は少額の貨物即安價を以て此繪畫を購求するとを得べし。而して限界的價値は其貨物の一般の性質之に對する吾人の慾望の度合持主の財産の程度に依りて種々の差異を呈するなり。若し賣買の目的たる貨物か本來賣却の目的を以て購はれたる時は其貨物の代價の最低限は之を取得するに費したる犠牲の額なり。又買主か再び之を賣却するの目的を以て購求するとき呈出し得べき最高限は此買主か再び其物を賣却する時に於ける一般經濟市場の之に對する慾望の豫測なり。

## 第二、購買者間に競争ある場合

(甲) 賣主か一人にして買主か數人ある場合に賣買の目的物か只一あるのみなる時例へば天下の種品を只一人か有する如き場合に於ては最も購買力ある一人の買

主か之を購ふとを得るに止まり而して他の之を欲するもの、競争の結果其價を騰貴せしむるの傾向ありとす。

(乙) 賣主一人買主數人ある場合に於て賣主か數個の貨物を有する場合に於ては之を二の場合に區別して論せざるべからず。即ち

(イ) 賣主か此等の貨物を漸時に賣却する場合

(ロ) 賣主か此等の貨物を同時に賣出す場合はなり。

(イ) 漸時に賣却する場合 此場合に於ては最も此貨物に對して慾望あるものか先の第一に其一を購求す。漸次に購買の慾望の度に應じて賣却さるゝか故に各貨物の代價は漸々に下落するなり。何となれば先づ第一に慾望多かりしものは最も高價に購求して茲に満足を得競争の範圍を脱すべし。依て次に賣主は再び一の貨物を出す時は現在に於て最も購求せんと欲する者は第一次に買ひたる人の慾望よりも小にして即ち此第二次の買主の最高限たる主觀的交換價値は比較的小なる故賣主は之を比較的安價に賣らざるべからず。順次斯の如くして進む時

は漸々價は減して遂には最低限たる賣主の主觀的交換價值に近づくに至るなり。

(ロ)同時に賣出す場合 此場合に於ては價は各貨物に對し(イ)の場合に於ける如き差異なく常に同一なり。何となれば各買主は他人より高價に買ふを欲せされはなり。然れども賣主の有する貨物の數が各買主を盡く満足せしむるに足らざる時は其貨物に向ての慾望少き者は比較的慾望強き者と競争するを得ず從て殘るものは其者貨物を購求し得る見込あるもののみなり。而して此等の買主の間に於ても其慾望の差あると勿論なりと雖も各成るべく安價を以て買ふとを利とするが故に賣主の主觀的交換價值を考へ且殘存の競争者の數を考へて此貨物を購求するを得るの見込生ずるに於ては何人と雖も獨り進て高價を支拂はさるへし從て皆同代價に於て購求するに至るなり。

此の場合に於て貨物の數が賣主の數に近きに從て各貨物の代價は減少するなり。貨物の數と之を欲する買主の數と同一となるに至るか又は前者が後者よりも超過するに至るときは貨物の價は賣主の主觀的交換價值まで下落するなり。之を要するに貨物の代價は貨物の増加と共に減少するか故に或物品に對して專

賣權を有するものありと雖も無限に利を得んとするも能はず。畢竟多く生産するとの結果生産費の減少に依りて利する點と生産費は減しても生産額の増加より生ずる代價の下落との比較對照に依りて幾何の數量まで生産を増加すべきやを決定せざるへからず。

### 第二節 競争代價

專賣品の如き法律に基ける獨占的貨物又トラスト等の市場を獨占する場合若くは鐵道の如き獨占事業の外は多くの貨物は皆自由競争の目的となり得べきものにして販賣者間にも亦購賣者間にも競争存在して其間に代價の定まるは現今の狀態なり。

抑も賣却者は其主觀的交換價值よりも尙ほ一層高價に賣却するを利とし購買者は其主觀的交換價值よりも尙ほ低價に貨物を購はんと欲す。而して此等の買主賣主は共に市場に集まりて其間に代價の發生するに至るなり。即ち賣主數人ある場合に於て一人か一定の價を要求する時は他の賣主は自己の主觀的交換價值よりも其が高價なるときは喜て其の如く價を定むへしと雖も若し其價にては安

きに過ぐる時は競争すると得ざるなり。之に反して買主に於ても賣主より要求されたる價にて買ひ得るものは之を購ふへしと雖も其他は之を買ふを欲せず。然れども賣主は最も利益を得て最も高價に賣ると能はざるも猶ほ薄利を以て賣るとは全く賣却し得ざるに勝れるを慮し買主と雖も最も安價に買ふとは其の望む所なりと雖も稍高價に買ふは全く買はざるの不便よりも利得ありとす。故に一人ありて一定の價を要求するものある時買主之を買ふとを敢てせざるとあらんには他の賣主は尙ほ安價を以て賣却すると得るものあるへし。此の場合に於ては一方に於ては價の下落の爲めに賣主の數を減し一方に於ては買主の加を來す是に於てか其間に競争の結果一定の代價生するに至るなり。蓋し賣主に於ては薄利なるも賣らざるに勝り買主に取りては稍高價なるも買はざるに勝れる場合に生すればなり。故に代價の兩極端を考ふれば其最高限は最も高くしても買ひ得へき買主及最も高價に賣るの必要ある賣主の價値の評定に依りて定まり最低限は最も購買力少き買主及最も安價に賣り得へき賣主の價値の評定に依りて定まるなり。今之を通常一の經濟的團體に於て觀察すれば代價は最も購

買力少くして面かも尙ほ購買するの必要あるものの評價に依りて定まる、從て高者は多くは之か爲に利益を得つゝあるなり。上來述へたる如く代價は買主及賣主か貨物及其對價に對する主觀的價値より生ずるものにして其主觀的價値の定まる原因は

- 一、貨物を取得せんと欲するもの、數及賣却せんとするもの、數
- 二、要望さるゝ貨物の數及賣却さるへき貨物の數
- 三、貨物に對する賣主及買主の評定する價値
- 四、貨物の對價となるものに對する賣主買主の有する價値

以上の原因中買主に關係する條件を需用ナハフラーグ(Nachfrage)と云ひ賣主に關係する條件を供給アンゲポート(Angelbot)と稱するなり。故に一言せば代價は貨物に對する需用供給の程度如何に依りて定まると云ふとを得るなり。

今需用の場合より論すれば貨物を取得せんと欲するもの、數及要望さるゝ貨物の數は人口の數、男女老幼の種別、貨物の性質に依りて定まり貨物及金錢に對する各人の感ずる價値も亦同し理由に基くと多し。

又供給の側より論ずるも需用の場合に於て述べたると殆ど同し條件に依りて定まる、只其作用に少しく異なる所あるのみ。

### 第三節 生産費と代價との關係を論ず

前節に於て述べたる所は需用供給の行はるゝに依りて代價が定まるとの一般の理論なり。此の需用供給の法則の範圍内に於て尙ほ其程度に關して學理上決定し得べき法則あり。即ち代價は最少の生産費に依りて定まるとの原則是なり。今少しく此原則の適用の場合を論せん。

需用供給の法則の適用ある場合は、貨物が需用に應じて自由に生産し得べき場合なりとす。即ち貨物が収益漸増法 (Law of increasing returns) の下に生産され得る場合即ち貨物を多く生産すればする程其生産費を減ずるとを得る場合例へば器械類を使用して生産さるゝ貨物を云ふ。此場合に於ては代價が生産費より高價なる時は競争者の増加あり、又競争者なき場合に於ても尙ほ生産を増加する利益なる點ありと同時に、貨物の生産を増加せば益、生産費を減する結果を生ずるを以て直に生産の増加を來し遂に前に述べたる理論に従ひ其價下落して殆んど生産費と

同一なるに至るなり。故に収益漸増法に基きて生産さるゝ貨物の代價は最少生産費に依りて定まると云ふとを得ん。然れども此の法則は絶対に行はるゝものに非ず。

(一) 生産費が代價の基礎となり代價は其れと同額以上なりと云ひ得る場合は生産費が買主の主觀的交換價值を超過せざる場合なり。若し超過したる時は貨物に向ての需用は停止するなり。

(二) 生産費の減少は直ちに其程度まで物價を減少するものに非ず、先づ生産減少の結果として生産の増加を來し後生産費に近くまで物價下落するなり。

(三) 収益低減法 (Law of decreasing returns) の行はるゝ貨物に於ては其代價は最高の生産費に依りて行はる。収益低減法の行はるゝ貨物とは土地より生ずる生産物の如きものにして此等は生産の増加と共に生産費の増加を來すものなるか故に貨物に向て需用増加する時は勢ひ貨物の生産を増加すべく其結果生産費増加するが故に代價の騰貴するに非れば生産の増加は行はれざるなり、即ち代價は常に最も高き生産費に基くなり。

## 第四節 相關的代價

Zusammenhängende Preise

一の貨物が生産さるゝと同時に他の貨物が生産さるゝ場合甚だ多しとす。此等の場合に於ては同時に生産されたる貨物の價に關しては以上述べたる法則の適用を許さゝるとあり。

今數多の貨物が同時に生産さるゝ場合を擧ぐれば

一 諸種の貨物の相關的生産

二 一企業者の經營せる諸種の生産

是なり。

(一) 諸種の貨物の相關的生産 此場合は一の貨物を生産すれば其附帶として容易に他の貨物の生産を爲すとを得る場合なり。例へば羊毛を取らんと欲する場合に羊毛及其皮の生産が同時に行はるゝか如く象牙と象皮と同時に生産され糖業と同時に酒類の製造容易なるか如き一の重なる生産の外に尙ほ付屬の生産行はるゝとあり。

(二) 一企業者の經營せる諸種の生産 例へば土地所有者が牧畜牛乳業を兼業する

場合の如き又は新しく各種の生産が相關係せずとも尙ほ別々の生産に従事し而かも資本は一の營業者の有する場合あり。

此等の各場合に於ては生産費は何れの貨物に幾何なるやを決定するに苦しむ。又一の事業より生ずる貨物の代價は生産費を償ふ能はさるも尙ほ他の事業より得る所を以て之を償ふとを得。而して生産費を償ふに足らざる一の事業を繼續するとは尙ほ全般の事業の爲に必要なる場合あり。

故に此等の場合に於ける貨物の代價は

一 全般に於て最も利益を得る爲に各貨物の代價を定むるなり。勿論此の場合

に於ては買主の主觀的客觀的交換價值を豫測すべきなり。

二 相關的貨物にありては代價は一の貨物の需用供給のみならず尙ほ同時に生産さるゝ貨物全般の需用供給の關係に基くなり。

## 第四章 貨幣論

## 第一節 貨幣の起源及歴史

貨幣は國民經濟發達の如何によりて數多の變遷進歩をなすものなり。最も古代

に於ては貨幣なる觀念なく交換は物と物との直接の授受によりて行はれ漸々交換さるべき貨物の中間に媒介物を用ゆるに至る是貨幣なり。抑も物と物との交換は需用供給必ずしも能く適合せざるか故に交換の媒介物を發見して其缺欠を補ふに至るなり。而して社會益、進み取引益、煩繁となるに従て價格の標準となると貯蔵に便利なる性質あると磨荷も交換を便にすべき性質を最も多く兼有するものを選択するに至るなり。今少しく經濟發達の狀態に遡りて貨幣か如何なる變遷をなしたるやを畧説せん。學者の所謂狩獵、牧畜時代に於ては家畜毛皮は交換の媒介物にして農業時代に於ては五穀の如きは最も諸國に於て用ひられたるの證あり。商工業時代に於ては益、金屬を用ひらるゝに至り現今に於ては貨幣は如何なる社會に於ても金屬に限るものゝ如く思惟せしむるに至れり。本邦に於ても金屬の始て用ひられたるは顯宗帝の御宇なりとの説あるも學者間に議論あり。持統天皇の時鑄鏡司を置きたるを以て此時銀貨の鑄造ありたるを傳ふるに足る。

之を要するに各時代に於て取引の繁簡に處して交換を圓滑ならしむるに足る性質を有するものか等の場合に於て貨幣として用ひらるゝなり。

## 第二節 貨幣の定義及職分

貨幣の定義は二の方面より述ぶるとを得へし。一は法律上の意義に於る貨幣、一は經濟上の意義に於る貨幣是なり。

經濟的意義に於ては貨幣は價格の標準、交換の媒介、價格の貯蔵たるべき一の貨物なり。

法律上の意義に於ては貨幣は債務の辨濟價格の標準として國法に依り強制力を有するものなり。

法律上の意義に於て貨幣たるものは常に經濟上の意義に於ける貨幣たりと雖も經濟上の意義に於ける貨幣は常に法律上の貨幣たるものに非ず。例へば本位貨は經濟上の意義に於ける貨幣なると同時に法律上の意義に於ける貨幣なりと雖も補助貨は或程度迄法律上の貨幣なるも其程度以上に於ては經濟上の貨幣たるに過ぎず。本章に於ては法律上並に經濟上の意義に於ける貨幣に關して説明す

るなり。

既に述べたる如く物々交換は經濟の進歩と共に益々不便を感ずるに至るか故に之より生ずる不便を補ふか爲に現今の發達せる貨幣生ずるものにして今其職分を述べれば

(一) 貨幣は交換の媒介なり

物々交換の場合に於ては甲の欲する物を乙は有せず、乙は甲の所有物と交換せんと欲するも甲は乙の所有物を欲せず、故に甲も乙も共に欲する即社會一般の廣く欲するものを以て交換の媒介とするは取引に大に便なるものなり、貨幣は此職分を充たすものなり。

(二) 貨幣は價格の標準となるものなり

一の貨物と他の貨物とを交換するに當りて如何なる割合を以て互に交換すべきやを測定するとは最も必要なり。例へば茲に甲乙丙の三種の貨物ありとせんに乙は甲の二倍、丙は甲の四倍の價なる時は乙と丙との交換の比例は一と二との割合なると明かなり。貨幣は此の職分を有するなり。

價格の標準なりと云ふことと交換媒介なりと云ふこととは異なれり。交換の媒介なりとは貨幣を使用して之と貨物とを交換し置き再び必要の場合に他の貨物と貨幣とを交換するに由りて貨幣以外の二貨物の交換完成するなり。之に反して價格の標準なりと云ふとは交換の場合に貨幣を用ゆるに非ず只交換さるべき貨物の貨幣に對する比價を定め以て交換の目的を達するに便するものなり。

(三) 貨幣は價格の貯藏たり

貨物の種類は甚だ多くして其存續力は長短限りなし。故に一の貨物の所有者は自己の現在の需用以外に存續力少なき貨物を所有する場合に於て之を棄賣にするか甚しきに至ては徒に之を毀滅せしむるの外なし。此弊を防かんか爲に貨幣を用ゆるに至りしなり。

### 第三節 貨幣の材質

貨幣は以上の職分を完ふすべきものなるか故に如何なる物を以て貨幣とすべきやは次に生ずる問題なりとす。之に關しては諸種の性質を列挙する學者種々ありと雖も畢竟大同小異なり。余は簡潔を主とし左に之を述べんとす。

(一) 持續力あると 彼の農業時代に於て用ひたる五穀若くは狩獵時代に用ひられたる毛及肉の如きは其持續力甚た少く或は蟲害に罹り或は腐敗す。是れ價格の貯藏に適せず又人の需用も減少し易きか故に交換の媒介たる能はず。

(二) 同質なると 金銀の如き元素は皆同様なるも五穀類の如きは同し米と云ふも其種類に等差あるか故に或貨物は米何石又或は他の貨物は米若干に相當すと云ふも此米の媒介により交換さるゝ二貨物は何等米の標準に依りて各々の價格を測定したるものなるや不明なり。之に反し金銀の如きものに於ては甲貨物は金何匁に相當し、乙貨物は又金若干匁に相當すと云ふ時は直に甲乙相互の交換比例は明瞭なり。故に金銀の如き同質のものを必要とするなり。

(三) 分割し得へきと 分割し得へきとは分割しても各部分の價か特別に減少せざる性質あると云ふものにして金銀銅鐵の如きは全體の十分の一の分量あるものは價にても猶十分の一なり。之に反して寶石、金剛石の如きは大なれば大なる程其價貴く、全體の幾分は正當の比例以外に於て價は減少するなり。斯の如くなれば分割を容易にするを得ざるか故に各取引の場合に於て價格の一致せざる

場合に夫等の交換を爲す能はざるの不幸に陥るとあり。

(四) 高き價值あると 貨幣は代價の標準なるが故に自己か價值を有すへきと勿論なり。然れとも只價值あるのみにては不可なり其か高價なるものを必要とするなり。安價のものは交換の媒介たる場合に於て多額の貨幣を携帯運搬するの不便あり且貯藏にも便ならず。又價格の標準たる職分を果す場合に於ても一の貨物の價か何億何千圓と云ふ如き時に於ては計算上の混雜を來すものなり。

(五) 價值の變動少きと 貨幣は價格の標準となるものなるか故に標準たる尺度に變更ある場合に於ては、一の時に於ける代價は他の時に於ける代價とは大に異なる事あるか故に遂に債權債務の關係を紊亂せしめ信用の發達を阻害する。と大なり。以上述べたる所の諸性質を最も多く有するものか貨幣の材質として最も適當なるものにして如何なる物質と雖も以上の性質を完全に備ふるものに非ず。而して金銀は比較的多く此性質を具備するか故に文明諸國に於て貨幣として用ひらるゝに至りしなり。

#### 第四節 貨幣制度



貴金屬を貨幣として用ゆるに付ては國法を以て諸種の規定をなすとは現今各國の取る政策にして只半開未開の國には未だ之に關する何たる規定をも有せざるなり。

斯る法規制定の理由は貨幣の品位及量目を各取引に際して検査するの勞を省く爲めなり。何となれば若し貨幣に關して一定の形狀、品位、量目等を定めず古代に於て行はれたる如く棒の形にし又は金砂の状態に止め、技術上何の製作をも施さざる時は只に携帯に不便なるのみならず尙ほ交換に不公平を來すを以てなり。現今に於ても尙ほ且品位、量目の検査か實行さるゝ場合あり。即ち國際間の貿易及半開野蠻國の貿易に於て見るか如し。

然れとも古代に於ても貿易殷盛なりし國に於ては貨幣を或一定の形にし、量目を定め又は物質の眞否を定むる勞を省けり。小亞細亞地方に於て貨幣を製作したる都市か其紋章を貨幣に付して其の貨幣か一定の量目、一定の性質を有するを保證せり。我國に於ても寛永通寶の裏面に「長」の字を記せるものは長崎に於て製造せしとを顯はし、仙の字を記せるは仙臺製なるを示し、又「元」の字あるは大阪製なることを顯はせり。現今に於ては技術の進歩に従ひ法制を以て一定の形狀、品質、量目を定め貨幣は皆此規定に合せざるべからざるとなれり。是れ其貨幣の完全なるとの保證なり。

國家は貨幣制度を立て自ら造幣を爲し以て貨幣を相當の大きさに造り社會の要求に應ずることを得。且貨幣制度を立つるに當りて一私人の貨幣製造は不可なるのみならず却て惡貨幣製造の弊あるか故に造幣の事業は國家の獨占たるべし。古代に於ては造幣の事業は統一せず或は國家に依り或は私人に依りて行はる。Spencer は自然淘汰の理を適用して造幣は私人に任すべしと論したりと雖も是れクレシヤムの法則を知らざりし結果にして私製に依りて惡貨幣を造れば益、其貨幣が流通するに至るが故に私鑄造者にして惡意あるものは最も利益を得、從て遂には惡貨濫發となり債權、債務の關係を紊亂するに至るべし。

貨幣制度に於て注意すべきは本位貨及補助貨の別なり。本位貨とは地金としての價と、貨幣としての價と差なきものにして無制限に通用力を有するものなり。補助貨とは價格の表識に止まるとも云ふべく地金としての價と、貨幣としての價

との間に大なる差異あるものにして或程度内に於て通用力を有するものなり。故に本位貨は政府が一定の形を備へしめて之を何圓と定むるも決して政府の力に依りて地金よりも高價を保たしむるものに非ず、是れ只國家の發したる合法貨幣なるを證するのみ。補助貨は之に反して國家の力に依りて地金の價以上の價を保たしむる者なり。従て本位貨幣は世界各國に通用するを得。且造幣所(Mint)に於て製造すへき數及通用すへき額に毫も制限を加ふるの必要なし。然れども補助貨に於ては其必要大なり。

然らば補助貨を制定する理由は如何、曰く大貨幣たる本位貨幣のみを用ふるは日常の小取引に不便あり、本位貨幣の量目に依り小額の取引に適用すへき小貨幣を造らんとせば其形小に過ぎて却て取引に不便なるのみならず又磨滅し易し。従て品位を悪くして分量を多くせざるへからざるなり。

### 第五節 各種の貨幣制度の特質

ウェボンス氏は理論上并に歴史上貨幣制度の種類を五に區別して説明せり。余は茲に之を畧説せん。

#### (一) 秤貨量幣制度

古代秤の發明なかりしときは五穀の如き當時に於ける貨幣は大概目分量に依りて計られたるが後、秤の發明ありてより秤は諸種の取引に非常に必要となれり。羅馬帝國に於てはリブリペンス(Libri pons)なる者ありて金錢を計る制度ありしが如き其證なり。此制度に於ては重の單位は價の單位なりしなり。英國の Pound sterling は其遺物なり。此制度は現今尙ほ緬甸及び支那に行はる。又國際間の取引に於ても外國の貿易は例令何弗何磅と云ふも畢竟其重量に重きを置き之れに依りて價を定むるなり。何となれば貨幣の通用するは慣習の力も大なりと雖も尙ほ法律の力大なるものにして一國の貨幣は外國に於ては慣用なく且つ法律の効力は他國に及ばざるを原則とするが故に他國に於ては一に他國より入り來る貨幣の分量を檢查するの必要生ず。

#### (二) 無限指名貨幣制度

此の方法に依る時は金、銀、銅の如き金屬を一定の分量に作り置き、各貨幣は恰も貨物の如く各私人の自由なる使用に任ず。然れども此等は市場に於ける金、銀、銅の

各個に付其割合を定むるに苦む。此等の不便あるか故に各國は決して斯る制度を定むるとなし。只數國の貨幣か或一國に混入するか故に恰も此の制度あるか如き顯象を呈す。例へは半開國に於ては自己の貨幣として確定せるものを有せざるか故に其の國に入り來る貨幣を自由に私人の取引に用ひるを許すなり。亞弗利加洲の西岸に西班牙、佛蘭西及び和蘭の貨幣行はるゝか如し。

### (三) 單本位制度

此制度に於ては本位貨幣は只一種の貨幣に限らるゝものにして、現今に於ては金本位、銀本位か最も盛に行はれ、就中前者は世界文明國の貨幣制度となるに至れり。銀本位制度は銀貨か本位貨幣として無限の通用力を有するものを云ふ。然りと雖も、經濟上の貨幣として別に金貨を用ひ其の他補助貨を用ひるとは銀本位制たるを妨げず。金本位制は只金貨か本位貨となるのみにして其の他の點は銀貨本位制に關して述べたると同じ。

### (四) 複本位制度

此制度は二種以上の貨幣を以て本位貨とするものにして彼の羅匈同盟は殆んど

一世紀間此制度を維持せり。

複本位制、單本位制の長短得失は後に本位論に於て述べなければ茲に之を畧す。

### (五) 雜合法貨制度

純粹なる單本位制、即貨幣の種類は本位のみなる場合に於ては本位貨に採用したる金屬例へは金銀銅鐵の優劣に依りて取引に便不便あり。殊に銅鐵か本位貨なる場合に於ては甚だ不便なり。之に反して金銀殊に金か本位貨なるときは例へは我一圓の貨幣は鑄造しても餘り小片に過るか故に之を鑄造せず左れば小額の計算に用ゆへき貨幣を有せざるに至る。従て本位貨の外に銅鐵の如き卑金屬を用ひて補助貨とするを可とす。是雜合法貨制度の起る所以にして此制度は本位貨幣の外に他の貨幣を用ふる場合を云ふなり。

雜合法貨制度は只に單本位の場合にのみ行はるゝのみにあらず複本位の場合にも行はるゝなり。例へは金銀を以て本位貨幣とすると同時に尙は一錢二錢に相當するか如き小額の貨幣を用ゆるとあるか如し。

雜合法貨制度と複本位貨制度との區別は前者は本位貨以外に尙他の種類の貨幣

を用ゆる制度の謂にして、複本位貨制度は只本位貨其者か二種あるとの謂なり。

## 第六節 貨幣の流通に關する原則

### 第一 法律の勢力

法治國の時代に於て法律か百般の事に關して勢力あると當然の事なり。貨幣は國家の一制度にして公共の全般に關する重大なる制度なり。故に法律に於て貨幣の運命を定め其流通に關して諸般の規定をなすとを要するなり。例へば本位貨補助貨の流通額に對する規定の如き、其の形狀品位に關する法規の如き、皆一定の法律の下に證明され信用されて其の流通を見るなり。就中補助貨の如きは他の經濟上の理由に基くものありと雖も尙ほ法律に依りて強制力を與ふるの結果地金に數倍せる價を以て通用さるゝを得るなり。

### 第二 慣習の勢力

慣習も又社會的事實に影響を及ぼすと大なり。就中方今に於ては慣習は直に法律に非すと云ふも尙ほ慣習を法律の淵源とし慣習の法律的確信は之をして一の慣習法たらしむるとの議論あるに至れり。殊に貨幣に關しては世人は甚だ無識

なるもの多く只表面に現はれたる形狀等に注意するのみ。彼等か貨幣を受取るに他人か又之を容易に授受すへしとの觀念に出たるに外ならずして其が品位、形狀、法規に適合するや否やを顧みて然るに非ざるなり。那威(Norway)の田舎に於ては昔の紙幣多く用ひられ現今の金貨用ひられすと云ふ。又旅人が新貨を携へて行きたる爲に受取られざるの不幸に陥ることあり。我國人の紙幣を使用するに慣れたること久し。是れ不換紙幣を用ひし慣習の然らしむる所と云ふべし。其の他貨幣の表面に書するに始めて制定されたる年の年號を以て後世鑄造する貨幣も尙ほ之を續用することあり。マリヤテレサダラー(Maria Theresa Dollar)及我天保通寶の如き是れなり。

### 第三 グレシヤム氏の法則

此原則は「惡貨幣は良貨幣を驅逐するも良貨幣は惡貨幣を驅逐する能はず」との法則にして英國のトーマス・グレシヤム(Thomas Gresham)氏が之を發見せしを以て此名あり。此法則の行はるゝ事實は遠く希臘時代に於ても注意したる人ありしか之を一の法則として系規を定めたるはグレシヤム其人なり。

茲に云ふ悪貨幣良貨幣は比較的にして一國內の二貨幣に於て品位分量等に関し善悪ある場合を云ひ、良貨とは品位量目比較的完全なるを云ひ、悪貨とは然らざるものを云ふ。

抑も貨幣は習慣の勢力が其流通に大影響あるか故に世人は大體に於て形狀に變化なくんは假令品位が悪くなり量目が減するあるとも之を通用して怪ます從て如何なる貨幣をも用ひらるゝか如きも世には貨幣に關する充分なる智識を有するものあるか故に此等は良貨を得るに從ひ之を溶解し若くは之を庫中に藏し、只悪貨のみを通用せしむるか故に遂には良貨は全く其影を止めざるに至るなり。就中外國との通商ある場合に於ては國外にては習慣の勢力も法律の效力もなきか故に貨幣は地金の有する價の外には通用せず、從て外國に支拂はるゝ貨幣は皆善良なるものゝみ。之に反して悪貨は法律習慣の力に依りて國內に止るとを得ると同時に外國に向て輸出さるゝを得ざるか故に國內は益々悪貨を以て充さるゝに至るなり。

以下尙ほクレシヤム法則の適用ある場合と否とを論せん。

#### (一) 複本位の場合

理論を簡單にせんか爲に金銀兩本位の場合を想像して之を論せんとす。今世界に於ける金銀の比價一と十六なるときに或一國に於て一と四との比價に定めたりとせんに、世界の市場に於ては金の價は高くして或一國に於ては比較的安價なり、即ち其の國に於ては銀を高く評價し過ぎたり。從て利を重んずるの商人は争ふて銀四を持ち來り金一を買ひ之を世界の市場に賣却して銀十六を得再ひ其の中より銀四を持ち來り金一を取りて歸る。斯の如くすると一再にして止まらず遂に其の一國は銀貨のみとなるに至るなり。是維新の際に於ける我國の經歷に徴して明かなり。

夫れ兩本位を定むるに當りては其比價は當時の市場に合せしむと雖も是一時に止まり市場は常に變動す。市場の價に於て高きに係らず法律上に於て低く定められたるものは常に良貨の地位なるか故に驅逐されて悪貨獨り存するなり。故に市價の變動と共に其の時に於ける悪貨が其の國の貨幣本位にして兩本位の實は毫も是なし。此故に學者は萬國共同の複本位制を設けて市場の價格を左右し

以て此のクレシヤム法則の適用を避けんとするものあり。其果して實行し得べきや否やは後段に於て説く所あらん。

(二) 本位貨幣と補助貨幣と存する場合

本位貨はクレシヤムの法則に所謂良貨にして補助貨は惡貨なるか故に此場合に直に此法則行はれて本位貨は忽ち補助貨に依りて驅逐さるべきか如し。然るに各國皆雜合法貨制度を取り而して之を續行するを得る所以の理如何。

吾輩は既に貨物に限界的價值ありて數量の増減は其物の價を高低するとを述へたり。此原理に基き補助貨の數を増加せば全國に於て一個の貨幣は増加す從て貨幣の價下落するか故に其の貨幣は外國に輸出さるゝに至る。此場合に補助貨は品質惡しく外國に於ては地金の價に於て評定さるゝか故に國內に止まるの利あるより他の良貨即ち本位貨輸出さるゝに至る。之に反して補助貨の數を増さざるとき換言せば補助貨の數を一國に需用する額に注意して出す時は假令本位貨の數増加するも本位貨は輸出の結果需用點に歸着し結局貨幣の總額は國民經濟の需用に適應するか故に本位貨は出て、補助貨が殘存するが如きとなし。要

するに政府が補助貨の數を限るとは最も緊切の事にして此他補助貨の強制通用額を制限して補助貨を濫用するを防ぎ人民をして可成的本位貨を使用せしむるとに注意すべきなり。蓋し本位貨は屈伸力ありて其需用供給如何に依りて自由の國の内外に往來するに反し補助貨を以て大取引に用ひしむれば遂に補助貨濫發の幣を醸すを以てなり。

(三) 磨滅せる貨幣ある場合

以上述べたるが如くクレシヤムの法則の適用あるは重に複本位殊に一國若くは二三國の如き小數國家が複本位制を取る場合にありと雖も尙ほ通常單本位制の國に於ても磨滅したる貨幣多き場合に新貨幣を流通せしめんとすれば新貨は溶解され或は貯藏され或は外國に送られ結局其の目的を達するを得ざるなり。故に國家は先づ朽廢せる貨幣を吸収滅却して後新貨を出すべきなり。此の形跡は夙に英國貨幣史上に顯はる。

## 第七節 貨幣と物價との關係を論ず

茲に物價と云ふは貨物の代價(Price)の總稱として用ひるなり。古代の經濟學者は

物價の定まるは單に貨幣の數と貨物の數とに依りて定まるとせり。即ち貨幣多くなれば物價騰貴し貨物多ければ物價下落すと。今之を式にて顯はさんに  $m$  を貨幣の數とし  $g$  を貨物とし  $p$  を物價又は代價とすれば

$$\frac{m}{g} = p; \quad \frac{nm}{g} = np; \quad \frac{m}{ng} = \frac{p}{n}$$

となると論ずるものあり。之を貨幣分量説(quantitative theory of money)と云ふなり。

換言すれば此の論の如く貨幣の數増加すれば物價上り、貨幣の數減すれば物價下落する傾ありと。然れども此論は理論上異なるや否や暫く之を述へん。

ミル(Mill)氏所論の要點を察するに貨幣と物價との關係を見るに貨幣と貨物との需用供給の點を觀察せざるへからず。貨幣の貨物に對する供給比較的増せば物價上り、貨物の貨幣に對する供給比較的増加せば物價下落す。而して貨幣の貨物に對する供給は日常の交通に顯はるゝ貨幣の總額にして貨幣にても私人の庫中に藏せられ又は軍用金として貯藏しある金の如きは物價と何の關係をも有せざるものなり。又貨物の貨幣に對する供給とは生産して直に消費さるゝ貨物に非ずして賣買の目的となるものなり。

即ち貨幣の貨物に對する供給又は貨物の貨幣に對する供給は、貨幣及貨物の全體に非ず、各其の取引の目的となる、一部の貨幣及貨物なり。然れども是れ未だ完全の説明を得たりと云ふへからず。交換さるべき貨物か只一度賣買の目的となるに止まれば以上の説明を以て足れりとすへきも、貨物は一回のみならず數回賣買の目的たるとあり。即ち貨物の數は變せざるも貨幣に對して云ふ時は、貨物の供給が増したると同じく、換言せば貨幣の價値増加するか故に物價下落すと云ふに、あるか故なり。然れども尙ほ進て貨幣の循環の遲速をも考へざるへからず。今一例を取りて言へば米百石を一日に甲地より乙地に運ばんとするに或容積の箱幾何入用なるやを見るには一箱が一日に何回運轉さるゝやを究めざるへからず。一石丈一箱に積て只其の箱を一回運轉せしめしのみにて其箱は後に使用せず他の箱を以て更に運搬するとせば百箱入用なるも一箱を二回運轉せしむれば五十箱にて足るか如し。

貨幣も亦斯の如し。貨幣の貨物に對して云ふ所謂相對的の供給は其貨幣の數と其貨幣の循環の速度に依る。故に商賣か二倍丈増したりとせんに、貨幣の數は一

定するも二倍丈運轉の度數増せば物價には影響せず。勿論貨物の生産増し又取引も頻繁なるに至り貨幣の運轉の度も増すと雖も尙ほ未だ交換の媒介たる職分を充分に盡すに足らざる時は貨幣に對する需用多くなるの理なるを以て物價下落すべし。殊に文化の進み、經濟社會發達するに従ひ信用の制度起り、交換の媒介として貨幣の代用を爲すと大なるか故に物價變動の如何は貨幣と貨物の數との單純なる比例に基くものに非ざるなり。

要するに物價は(一)貨物の數及其の取引の度數(二)交換に用ひらるる貨幣の數及其の循環の速度に依りて定まるものなり。然れども此の貨幣と物價との關係を見るに付ての觀察點たる(二)の條件は短時期に於て變動するものに非ず又變更し易からず。之に反して(一)の條件たる貨物の數の増減は變動頻繁なるか故に貨物の數の増加は實際に於ては直に物價を左右するものなり。只注意すべきは昔の富と貨幣との比例に於て富十の場合に於て貨幣一なりしか故に正比例を以て現今に於ては貨幣を増加すべきものなりと論ずるは大なる誤りなり。

### 第八節 本位論争

先にクレシヤム法則を述ふるに當りて説きたるか如く兩本位制度は久しきを保つを得ずして金銀の市場價格の變動に従て或は金單本位となり或は銀單本位となる故に現今に於ては一國の本位を市價の變動に任せ置くの不利を悟り一國の兩本位論を主張するものなし。故に現今の兩本位論者は皆各國の連盟に基ける兩本位制採用論者なり。

其の要領を述べんに數多の國の共同條約によりて金銀の比價を定め且各國に於て鑄造する貨幣は法貨として各國に通用すべしと云ふにあり。

此連盟を爲すに付き必ず英國及び其屬國を加盟せしむべしとの説と英國を加ふるの必要なしと論ずるものあり。金銀の比價を定むる上に於ても一と十五、二分の一とする論と條約締結當時の市價に従はしむべしとの二説あり。

抑も此萬國兩本位同盟論の起源は彼の羅甸同盟の兩本位維持の經驗に基くものなり。即ち西曆紀元千七百八十五年より千八百七十三年迄に金銀の比價を一と十五、二分の一として金銀貨の自由鑄造を許したるか其勢力は當時の經濟社會を支配して金銀の市價も亦此軌道を出でざりし。然れども遂に千八百七十三年頃



に至りては法定價は市價を左右するに足らざるを實驗するに至れり。即ちカ  
リフォルニアの金鑛發見以來は此等の同盟國は低價なる金貨を以て充されたり。  
其後銀價の年を逐ふて低落せんとするの狀勢あるか故に兩本位を維持すると能  
はずして事實上純然たる單本位國となりしなり。

萬國兩本位論者は此の事實を以て全く羅匈同盟か少數國家の間に行はれたるの  
みなりしか故に遂に此現象を來せしも若し文明國の全眸若くは大部分が同盟す  
る時は金銀の法定價は容易に市價を支配するとを得へしと想像せしなり。  
斯くの如く兩本位は實行し得へきとは明なるか故に其結果貨幣の欠乏より生ず  
る物價下落の弊を避け且兩本位行はるゝ時は補償作用(Compensatory action)即ち金  
下落すれば金に向て需用生じ銀下落すれば銀に向ての需用生ずるか故に金も銀  
も極端に價の下落を來すとなく從て物價の變動少しと。若し此の說の如く英佛  
獨米並に東洋諸國の同盟成らば固より幸にして其利益大なる勿論なりと雖も  
其の實行は實に至難の事に屬す。今少しく其理由を述へん。  
夫れ金貨を用ゆるに損れたる國に於ては銀か多く入り來るとを以て最も不便を

感ずべく人皆金貨を得んと欲するが故に金貨と銀貨とは法定の價以外に評價さ  
れ銀貨は金貨と交換する爲め多少の打歩を支拂はさるへからず。且通常取引の  
場合に金貨にて支拂ふへしと特約するとあり斯くして流通には金貨用ひられ銀  
行及び國庫には銀貨のみ存する有様とならんか此際若し一般人民にして銀貨を  
以て金貨と引換を求むるに至る時は銀行及國庫は大なる不都合を感ずるに至る  
へし。從て政府又は中央銀行より發行されたる紙幣の基礎動搖するに至るなり。  
又此兩本位條約が破るる時に當りては安き銀を取込置くと其國の損なるか故  
に内密に成るへく金を入れて銀を退出さんとする競争あり。此等の事情は益、此  
條約の維持し難きを感じしむるに至るなり。

加之兩本位論者は補償作用を以て最も強固なる理由となすと雖も補償作用は只  
長時期に於て金銀の變動を極端ならしめざるに止まり短時期にありては其變動  
極めて著し。要之兩本位にありては小波動多くして大波動なく單本位の場合に  
於ては只永き間に大波動あるのみにして通常は殆ど其變動を見ざる位なり。只  
複本位を採る時は貨幣の欠乏を補ふに足ると云ひ得らるへきも是すら強力の理

由と云ひ難し。何となれば現今信用の制度發達し貨幣職分の大部を代り行ふに至りしを以て金貨の供給も未だ甚たしく稀少なりと云ひ難ければなり。

## 第五章 信用論

### 第一節 信用の觀念

吾人の經濟上の取引に於ては一方の行爲(貨物若くは勞働の提供)と同時に他方の之に對する行爲あるとあり。或は一方の行爲あるも其の報酬若くは對價(Gegenwert)は同時に生ぜず他日を期して實行さるゝとあり。斯く一方の犠牲に對して直に他方より報酬の來るものを直取引と稱し、報酬か一定の期間の後行はるゝを信用取引と稱するものなり。

故に信用取引の觀念中には(一)當事者の意思か自由なると(二)相互の信任すると(三)未來に報酬を期するとの三要素あるを要す。

強制して報酬を得んとするか如きは今日の法制に於ては私人間にあり得へからざるのみならず國家か人民に對する場合に於ても通常斯るとなし。是ある場合は寧ろ之を一種の租税として觀察するを可とす。而して國家が租税を取るは報

酬として徵收するものに非ず信用は報酬を未來に期するものなかる故に當事者間に信任あるとを必要とするは勿論なり。

此の如く信用は未來に報酬を期するものなり。古代の學者は單に當事者の信任のみに重きを置き時の要素を主とせず。勿論信用と云ふときには通常未來の觀念も存すと雖も直取引の場合に於ても尙當事者の信任は存在し且其信任の存在するに依りて直取引が行はるゝとあり。故に信任と云ふ觀念の中に常に未來に報酬を期するとの觀念含まると云ひ難し、故に特別の一要素として未來の觀念を擧ぐるを可とす。

余は今ツクナー氏の説に基き信用の定義を擧げんに。

信用とは一方の行爲に對して未來に於ける他方の行爲を豫期するに依りて生ずる經濟上の貨物の授受に關する取引なり。

### 第二節 信用の種類

信用は種々の方面より觀察して之を類別するとを得

(一)公共的信用及私人的信用 此區別は信用を求むる人の如何に依り區別して述

へたるものにして公共的信用とは國家又は公共團體が其の費用に充つる爲め資金を得るの必要あるとき生ずる信用にして公債の如き是なり。私人的信用とは一私人間に生ずる貸借關係を云ふ。

(二)短期信用長期信用 信用の期間の長短より區別したるものにして讀て字の如し。

(三)消費信用生産信用 是れ信用の目的より區別したるものにして消費信用とは勞働者を維持する爲め其他日常の需用に應ずる爲め流動資本として資金を借るに依りて生ずるものなり。生産信用とは固定資本に用ゆる爲めに信用を起すものを云ふ、即ち器械工場を設備する爲に資金を得るか如き之なり。

(四)對物信用對人信用 對物信用とは相手方の財産を擔保として信用を與ふる場合を云ひ、對人信用とは相手方の能力、智識、健康を信用して資本を貸與するものを云ふ。一は物か信用の基礎にして一は人か信用の基礎たるなり。

### 第三節 信用の發達

信用は一個人の關係より發達し又社會的關係より行はるゝに至るなり。

一個人の關係とは各人の智能、老幼、賢愚等の性質及當事者間の關係例へは君臣たり、夫婦たり、親子たるの關係によりて生ずるなり。余は今専ら社會的方面より信用發達の狀態を研究せんとす。

自然經濟時代に於ては生産と消費と同一の人に依りて行はれ第三者に何の關係なし。従て一方か勞務又は貨物を提供して他日の報酬を期するか如きとなし。只一の例外と稱すへきは所謂必要信用(Notwendige Kredit)の場合にして土地を借りて耕作するに當ては其の報酬は收穫の後に於て之を爲すより外なし。従て斯る信用は古代に於て存せしと雖も斯る場合を除きては信用即ち貸借關係の生ずるに至るには尙ほ社會上經濟上種々の發達を要す。即ち一經濟社會に於ける流動資本の増加あるを要す。而して流動資本の増加は所謂貨幣經濟の發達を前提とす。斯く一般に經濟社會全般の進歩は左の諸條件より來るなり。

(一)法律行爲の自由 古代に於ては農業に關しては牧場法、工業に關しては中世の團體組織ありて主たる工業者(Meister)の數を限り助手の撰擇を制限し給金の最高價を制限したり。然るに近世に於て法律を以て諸種の自由を認むるに至りし結

業は自由の経済組織となりて益、信用發達の基礎を爲せり。即ち土地所有權及其賣却分割の自由、工業商業の自由、職業の自由、契約の自由を來し殊に昔は要式契約に限りしも今は之を必要とせざるに至り資金に對する需用緩急如何によりて信用取引勃興するに至りしなり。

(二)貨幣の使用 貨幣が使用さるゝに至りしより資本は金錢に依りて顯はされ且貯藏さるゝか故に最も信用の發達を助くるに足るなり。抑も貨幣資本(Gold Kapital)は抽象的資本(Abstrakte Kapital)にして種々の形に變更するを得るか故に多くの貨物を有するものは之を貨幣として保存し、需用に應じて直に之を供給するとを得、是信用の基を開くものなり。

#### 第四節 信用の經濟上に及ぼす效果

(甲)信用は現存の財産上の價值即ち資本を他の之を利用するものに移轉する働きなり。

企業者、労働者は通常資本を有せず只才能と体力とを有するに過ぎず。之に反して富者は資本を有するも之を利用するに務めず或は之を利用する方法を知ら

ざるとあり。若し信用が此二大階級を連鎖するなくんば資本は徒に遊び、企業者、労働者は空しく饑肉の敷に沈まんのみ。信用に依りて無資産者も尙ほ其の活動の基礎を得、資本家も亦幾分の利子を得るを以て二者各満足を得るなり。

(乙)信用は間接に資本を創作増加するものなり

信用は直接に資本を増加するものに非ず只之を移轉して間接に増加するに過ぎざるなり。信用に依りて、浪費さるゝへかりし資本をも有用に用ゆるとを得るゆへ結局大なる利益あり。又貯蓄銀行、通常銀行及保險制度に依りて貯蓄心を増加し従て新資本生ずるに至る。

(丙)信用の私經濟國民經濟に向て如何なる生産上の效果を付與するかは資本移轉の結果に依りて定まる

イ、信用に依りて得たる金を浪費すれば其の信用の結果は皆無なり

ロ、信用に依りて得たる金を固定資本とする時は通常利益あり。例へば山林業、鐵道、鑛山業に投下したるか如し。然れとも若し時機に合せざるときに固定するか或は過分に固定するは大なる損なり。